

グローバル

第4号

第1部 2004年院生研究会

第2部 修士論文要旨

第3部 研究発表



フェリス女学院大学大学院国際交流研究科

『グローバル』第4号の発刊にあたって

イラク情勢の泥沼化、パレスチナ問題の混迷、ブッシュ大統領の再選によるアメリカの単独行動主義継続の可能性、日本と北朝鮮との関係の悪化、日本での平和憲法を「改正」する動きの強まり、地球環境のいっそうの悪化など悲観的な状況が拡大するなかで、東北アジアと東南アジアを包摂する「東アジア共同体」創設の動きが注目され、期待されています。実際、2005年秋、マレーシアでASEAN（東南アジア諸国連合）と日本、中国、韓国による東アジアサミットの開催が予定されています。

この「東アジア共同体」の創設が実現できるのか、創設できたとしてもいづれ世界のグローバル化の巨大な波にのみこまれてしまうのではないのか、「東アジア共同体」自体がグローバル化して強者が弱者をおしつぶす機構にならないか、各地域の多様性を尊重しつつ域内の政治の安定と経済的繁栄を保障する機構になりうるのか、これらはまだ未知数で、明確な見通しをたてられる段階ではありません。しかし、「東アジア共同体」構想にはたしかに期待をもたせるものがあります。

その理由の一つは、「東アジア共同体」構想が成立するうえで、東南アジアの小国連合であるASEANが重要な役割をはたしているからです。ASEANは1967年に東南アジアの5つの反共的な国家（インドネシア、フィリピン、シンガポール、タイ、マレーシア）が結成した地域協力組織ですが、冷戦終結後の1990年代には、社会主義国のベトナムなどが加入したことにより、ASEANは東南アジア10か国すべてをふくむ政治体制の相違をこえた地域協力機構になりました。さらに1994年、ASEANのよびかけで日本、中国、韓国、アメリカ、ロシア、EUなどが参加し、アジア太平洋地域における安全保障について協議するASEAN地域フォーラム（ARF）がはじまりました。

このようにASEANが発展してきたのは、各国の主権を尊重してたがいに内政干渉せず、コンセンサス型の運営をつらぬき、各国間の信頼関係を作るために長い時間をかけてきた東南アジアの人々の知恵と努力があったからです。もちろんASEANは、内部に域内の経済格差、各国の内部での貧富の差・人権抑圧・民族対立など多くの問題をかかえています。しかし、東南アジアの国々がASEANのようなゆるやかな協力体制をつくりあげ、この小国連合が東アジアの地域協力を主導的役割をはたしていることは、世界史において画期的な出来事であり、大国中心のグローバル化の波にたいするすどい批判とみることができます。

第二に、「東アジア共同体」の構築によって、東北アジアの国々の関係改善と地域協力をすすめることも期待されます。日本と韓国の関係はこの数年、大いに改善されてきていますが、この構想にとって欠かすことのできない日本と中国との関係は、経済面で緊密さをましているにもかかわらず、靖国問題に象徴される歴史問題や資源問題などによって政治面では冷えこんでおり、さらに両国の民衆のあいだに相手国にたいする反発、さらには排他的ナショナリズムが強まっていることなどのために、改善の展望がひらけないでいます。

「東アジア共同体」構想は、この困難な日中関係の改善を打開するための切り札となる可能性があります。この構想に積極的にいかかわっていこうとすれば、日中両国政府は否応なしに接触をふかめ、相互の不信感を低めて、協力関係をつくる努力をする必要があるでしょう。そして政治面での関係改善がすすめば、両国の排他的ナショナリズムも弱まり、日本における右翼的政治潮流の拡大の原因の一つが減少することにもなります。

日中関係の改善には、なによりも政府間の信頼の醸成が不可欠ですが、民衆レベルの不信感や敵対感情を是正することはきわめて重要であり、この分野では私たちにできることが少なからずあります。す

でに日本と韓国とのあいだには、スポーツやテレビドラマなどの文化交流をつうじて感情的共感が拡大しつつあります。民衆レベルの交流は、北朝鮮とは今すぐはむずかしくても、中国とのあいだではもっと創意的で多彩な試みができるはずです。

現在のところ、「東アジア共同体」構想はまだ将来の夢の段階かもしれませんが。しかし、私たちはこの夢の芽を大切にそだてる必要があります。そのためには大胆な発想の転換と斬新な構想力をもたねばなりません。初代の国際交流研究科長山之内靖先生は、大学院の「創設の言葉」で「私たちの大学院は、既存の知がその有効性を失ったことを見定め、21世紀型の新しい知を模索してゆかねばならない時代がきた、そう自覚して発足しました」と述べています。大学院の発足から5年目となる2005年をむかえて、今日の時代状況にいたずらに悲観するのではなく、「新しい知」の創造に努力し、それにもとづいて私たちにできる行動をおこしていきたいものです。

国際交流研究科には、現在、博士前期課程14人、博士後期課程3人（うち1人はバングラデッシュ人）の学生が所属しています。そして今年度も、かれらの研究活動をまとめた『グローバル』第4号を発行することができました。この号には、2004年11月1日及び2005年2月15日にそれぞれ池上彰氏、熊岡路矢氏をかこんで行なわれた院生研究会の記録、同年1月に提出された修士論文の要旨、および院生研究会で発表された修士2年次生の報告要旨からなっています。池上氏はNHKの報道記者主幹・「週刊こどもニュース」のお父さん役で、『そうだったのか、現代史』など啓蒙的な本を刊行されてきた方で、その軽妙な語り口と報道記者らしいするどい分析によって私たちの知見を大いに高めてくれました。熊岡氏は日本のNGOの草分け的存在、日本国際ボランティアセンター（JVC）の代表で、日本の政府開発援助（ODA）及びJVCをはじめNGOの活動について歴史的に考察され、現在の課題を浮きぼりにされました。また修士論文はそれぞれ力作ですし、2年次生の報告も各人の研究の努力を示すものです。この冊子が読者の「新しい知」の探索にとって少しでも役にたてば幸いです。

2005年3月31日

大学院国際交流研究科長
石 島 紀 之

目 次

第1部 2004年院生研究会

「こどもニュース」から世界を読み解く

池 上 彰1

日本のODAとJVCの活動

熊 岡 路 矢12

第2部 修士論文要旨

女性に対する暴力 DV、ストーキングの加害者特性から暴力根絶を考える

岩 崎 仁 美17

18 - 19世紀のヘッジ・スクールにみるアイルランドの民衆教育

石 垣 里 枝 子23

日本の女性の地位向上における女性NGOの活動と国連 国連加盟前後を中心に

榎 本 春 子28

第3部 研究報告

カナダ先住民の虚像と実像

秋 吉 啓 子33

横浜とアジアの反帝国主義

鈴 木 晶45

陶山篤太郎と川崎 川崎における現代化プロセスの一考察

眞 有 経 子54

明治期一キリスト者の思想と闘い 矢嶋楯子とキリスト教

熊 田 京 子67

第 1 部 2004年院生研究会

「こどもニュース」から世界を読み解く

講師 池上 彰 氏

NHK 報道局記者主幹

〔司会〕本日はNHKの池上彰さんにお越しいただきました。めまぐるしい国際情勢のなかで、横浜まで来ていただいたことにお礼申し上げます。毎週土曜日の「こどもニュース」のお父さん役としてご活躍中で、誰にでもわかるような経済や政治の本も数多く執筆されています。それではよろしくお願ひします。

〔池上氏〕

今日は「こどもニュース」風に話をしようと思います。テーマは二つです。一つは当たり前のことですが、世界には色々な見方があるというのを地図を通してみていこうということです。もう一点は、いよいよアメリカ大統領選挙が明日ですが、アメリカってどんな国なんだろうというのを考える、この二点で話したいと思います。色々な関心を持つ方がいるかと思いますが、世界全体の基礎の基礎を考えたいと思います。

まず簡単に私の自己紹介ということでよろしいでしょうか。テレビの画面に出ておりますけれども、アナウンサーではありません。NHKに記者として入りまして、記者の仕事をやってまいりました。私の場合、NHKに入ってまず松江放送局で3年間仕事をしまして、その後、広島県の呉で通信部記者というのをやりました。自分で車を運転して現場に行き、カメラを回して、原稿を書くという、全部自分でやる仕事です。そのあと東京の社会部にきました。社会部では警視庁捜査一課、三課を持ちまして、殺人事件専門記者でありました。殺しの専門記者だったわけですが、そのあとにわかに一転して、消費者問題や教育問題を担当して、文部省で教育改革のあり方について取材をしたりしていました。昭和の終わりには宮内庁から天皇陛下のご容態報道ということで、3ヶ月間、毎日、宮内庁から中継するというのをいたしまして、平成元年から首都圏向けのニュースのキャスターを5年間、それから「こどもニュース」のニュースキャスターということで、今11年目になっております。

よく聞かれる質問が二つあります。「こどもニュースはいつ収録しているんですか」と聞かれ、あれは生放送なんですと言うと、「それは大変ですね。で、いつ収録しているんですか」とまた聞かれます（笑）。子どもが出る番組ってみんな収録なんです。生放送に子どもが出るというのはみんな考えていないものですから、意外に思うかもしれませんが、まったくの生放送です。生放送ということは、子どもが何を言い出すかわからないですよ。以前、中東問題を取り上げたときに、中東と呼ばれるところでは、イスラエルの国の中で、イスラエルのことを憎んでいるパレスチナの人が爆弾を爆発させるというテロ事件を起こす。そうするとイスラエルの人が大勢亡くなる。怒ったイスラエルの軍隊が、パレスチナの人が大勢住んでいる場所に戦車で攻め込む。そうするとパレスチナの人たちが大勢亡くなる。するとまたパレスチナの人がイスラエルで...というふうに、やられたらやり返すということがずっと続いてきたんだよね、と話をしたんですね。そうしたら小学生の女の子が、「それって子どものけんかみたいだね」と言い放ったんです。もう私は真っ青になってしまいました。離れたところに住んでいる日本の子どもはそう思うかもしれないけれど、あそこに住んでいる人たちは、自分たちの土地や宗教を守るために命がけで戦っているんだから、それを「子どものけんかみたいだね」という言い方はしないほうがいいんじゃないかな、とたしなめたんです。テレビを見ている方から、「子どもがけんかみたい」と言ったところで、NHKに抗議電話が殺到いたしました。電話を受けた人に聞きますと、「なんであんなことを言わせるんだ、台本にそんなことが書いてあるのか」と、こういうお叱りです。「こどもニュース」は、子どもならではの素朴な疑問、質問、あるいは感想を自由に言わせようという番組です。ですから電話を

受けた者が、「あれは子どもがとっさに言った感想で、台本なんかないんです」と言うと、「じゃあその部分をカットして放送すればいいだろう」と。「いえ、生放送だからカットできないんです」という話になりまして、今はスタジオの後ろに「生放送中」という掛け軸をかけています（笑い）。それが一つの質問です。

もう一つよく聞かれる質問は、「池上さん、土曜日の夕方は画面に出っていますが、他の日は何をしていますか」というものです。他の日は遊んでるんですよ、と言いますと「それはうらやましいご商売ですね」と言われてしまって、冗談がまったく通用しなかったことがあります。先ほども言いましたように、私は記者なんです。毎週毎週、今度の土曜日にどんなニュースを取り上げようかということを考え、ニュースの項目をピックアップします。そのうち一番難しいニュースや大事なニュースを、どんな模型を作れば子どもたちにわかってもらえるんだろうかというのを考えて、その模型のアイデアをつくり、実際に模型を作ってくれるプロダクションの人に設計図を書いて渡す。そして金曜日の夕方に模型が出来上がってきますと、それをどんな風に動かせば子どもたちにわかってもらえるのかというのをまた改めて考える、という仕事をしています。つまり私の本業は、「こどもニュース」をつくる裏方の仕事なんです。土曜日の夕方、ついでに画面に出ているんだとお考えいただければいいと思います。

そもそも「こどもニュース」は、世の中にいろんなニュース番組があるのだから、ひとつくらい子ども向けのニュース番組があってもいいんじゃないでしょうか、という視聴者のご要望で始まった番組です。お父さんがいてお母さんがいて、子どもたちがいて、家族で一週間を振り返るという手法です。初代のお母さん役が柴田理恵さんでした。そもそも私は首都圏向けのニュースを5年間やりましたが、裏方のほうが合っているんですね。画面に出てしゃべるといのが苦手でありまして、テレビに出るのをやめさせてくれと頼みました。それが認められまして、首都圏ニュースのキャスターを降りることになったら、まったく別のところで「こどもニュース」のお父さん役を探してしまして、池上がやめるならやってもらおう、という話になったんです。その時点でお母さん役が二人に絞り込まれてしまして、私が二人の人と「お見合い」をして、柴田さんになったというわけです。柴田さんが画面に出ますとそれだけで、画面がNHKの放送には見えない、という大変いいキャラクターでありました。

二代目が高泉淳子さん、三代目が林まやさん、現在の四代目が林家きく姫さんです。

「こどもニュース」というのは、小学校5年生以上にわかるようにとつくっている番組です。ニュースである以上、どうしても抽象的な概念を扱わざるをえません。ですから出演している子どもも小学校高学年から中学生ぐらいです。でも、生身の子どもというのは成長がはやい。あっという間にその年齢を超えてしまいますので、二年ないし三年で子どもが替わる、それに合わせてお母さんも替わる。新しい家族でスタートするということになるんです。だったらお父さんも替えればいいのに、と思うのですが、先ほど申し上げましたように、私はつくる側ですから引き続き担当しているということになっております。

「こどもニュース」ではいろいろな話、世界のことも含めてやるのですが、今日はまず世界にはいろいろな見方があって、世界のことをよく知ろうということで話をいたします。

イラクで人質になって殺された香田さんのことを見ていますと、香田さんの父親は54歳、私と同年です。私にも息子がおりまして、父親の悲しみというのが大変よくわかります。そういうなかであの子は中東のことの何の常識もないまま、半ズボン姿でイラクに入った。それもよりによってイスラエル経由で入っていった。パスポートにイスラエルのスタンプが押されていたんだらうか、「ノースタンプ、ブリーズ」と言って、スタンプを押さないで済ませる知恵が回ったんだらうかどうだらうか、という疑問も持っています。イスラエルの入国スタンプのあるパスポートを持ってイラクに入ってつかまったら、これはイスラエルのスパイだらうと思われるわけです。ご存知の方も多いと思いますけれど、パスポートにイスラエルの入国スタンプがあると、ヨルダンとエジプト以外のアラブ諸国には入れません。そういうことを彼は知っていなかったんじゃないかな、とったりしています。そしてあちらの人は、女性

ばかりではなく男性も肌をあんまり見せないという風習のなかで、半ズボンでうろうろしていたら目立つという意味でも、やはりある程度世界に対する常識をもっていたほうがいいという思いで見えておりました。

今日は世界にはいろいろな見方があるということで、これから地図をお見せいたします。まずはみなさんが日本で小学生の頃から見ている世界地図です。真ん中に日本があって、右手にアメリカがあり、みなさんの左手にヨーロッパがある。こういう地図がみなさんにとってごく当たり前です。でも、こういう地図を見ているのは限られた人です。世界の多くの人はこういう地図を見ていません。ではどんな地図を見ているのか。

イギリスの地図です。イギリスの地図ですからイギリスが真ん中になっています。日本は東のはずれです。日米安全保障条約に「極東条項」という言葉が出てきます。イギリスから見て「極東」、それに対して中東というのはイギリスから見て中くらい東だから中東と言うのです。そもそも中東という言葉はイギリスが使い始めたのです。インド、パキスタン、バングラデシュのあたりはかつてイギリスの植民地でしたが、このあたりがイギリスにとっての東になるわけです。かつては中近東という言い方をしていたものもあります。中東よりもさらに近い東、それはバルカン半島のあたりで、それもひっくるめて中近東と言っていたわけです。外務省が中東課というのを作って以来、中近東といってしまうと近東と中東はだいぶ様子が違うので、ということでは分けるようになっていきます。

日米安全保障条約の中に、日本にいるアメリカ軍は極東の安全のためにいるんだというふうに書いてあります。その場合の極東というのは、政府の統一見解としては、フィリピンより東が極東となっています。日米安全保障条約というのは、日本がもしどこかの国から攻められたらアメリカ軍が守ってあげます、そのかわりアメリカ軍を日本にいさせてくださいねという条約です。日本を守るためということになっているけれど、日米安保条約を読むと、いまはたまたま日本にいるけれど、極東全体のためにアメリカ軍はいるんだよということになっています。ということは台湾で中国と台湾との軍事紛争が起きれば、日本にいるアメリカ軍が出動するということです。朝鮮半島で軍事衝突が起きれば出動するという、その根拠が日米安全保障条約の中で与えられているというわけです。

さらに言いますと、クリントン時代に民主党のジョセフ・ナイ報告というのが出ました。いまはハーバード大学の教授になっている人です。いわゆる太平洋地域にはアメリカ軍10万人体制を維持するというのがありますが、そのときに日米安保の再定義というのをやりました。日本にいるアメリカ軍は極東だけではなくて、(地図を指しながら)こちらの方まで(インド洋、アラビア海方面)の安全に関与しようということにしました。これは条約にはなっていませんが、いまや横須賀にいる空母がイラク戦争のときには出動しているというわけです。

では次にイランの世界地図を見てもらいます。いわゆる中東というのはだいたいアラビア語を使っているアラブ民族の国です。でもイランだけはペルシャ語を使っているペルシャ民族です。ペルシャ語もアラビア語もヘブライ語も、セム語族という語族の中に入っていてルーツは一緒ということになっています。

子音のみを書くので、母音が表示されないんですね。それだとなんて発音するか問題になってきます。フェリスで学んでいらっしゃるみなさんですから、聖書を当然のことながら読んでいると思うのですが、例えばヤハウェの神というのが出てきますよね。神のことを「ヤハウエ」というか「エホバ」というか、なぜ言い方が分かれるのかといえ、もともと古来のヘブライ文字で神のことを書いてあるのは子音でしかないのです。聖書によく、神の名をみだりに唱えてはいけないというのがありますから、聖書には書いてあってもみんな神様のことを言わないようにしていました。神のことを示したヘブライ語の子音の文字だけでは、どういう母音を当てて呼んでいたかわからない。ヤハウェともエホバとも発音できるが、どちらで呼んだらいいかわからなかったということなんです。でも最新の研究だと、どうもヤハウェと発音していたらいいということになっています。

このイランの地図にはイスラエルという国はないんですね。イスラエルのところには「パレスチン」と書いてあります。イランという国はイスラエルを承認していません。アテネ・オリンピックの時に、レスリングだったか、イランの選手がイスラエルと対戦することになって、試合に出ませんでした。それによってその選手はイランで表彰されたいのですが、つまりイスラエルという国を認めていないので、地図にもイスラエルという国はないのです。ここはパレスチナになるというわけです。それぞれのお国柄によってこういう事実があるわけです。

次は時代によって変わる地図ということで、台湾の地図です。台湾というのは、みなさんご存知のように「中華民国」と名乗っていました。この地図には、北京のところを見ると北京という名前はなく、「北平」という昔の名前になっています。そしてモンゴル、ここも含めて中華民国だとしています。つまり中華民国という国ができた時のその状態が続いていると考えられていて、第二次大戦が終わり、国民党が台湾に逃げ込んだあとにも、台湾ではずっとこの地図を使わなければいけないことになっていました。

李登輝さんが総統になってからずいぶん変わってきました、台湾だけで選挙をし直します。つまりその時点で中華民国は虚構を捨て去った。国民党が支配していたときの虚構を、李登輝さんの時でやめて、言ってみれば台湾だけの独立した機構がこの辺りから始まったのです。

ちなみに総統というのは、英語で言えばPresident、大統領のことです。中国語で総統というのを、同じ漢字を使っている日本でもそのまま使っているわけです。これを「大統領」と訳してしまいますと、台湾は中国とはまったく別の中華民国で、そこに大統領がいるということを日本としても認めてしまうことになってしまいます。そうすると中国との関係がうまくいなくなることもありますので、あえて総統という言葉を使っています。

では次は中華人民共和国の地図です。台湾は、中華人民共和国の中の台湾省、一部にすぎないと表示してあります。ところで、北方領土は何色に塗ってあるのか。日本と同じ色に塗ってあります。つまり、日本とロシアの北方領土の問題について、中国は日本側の立場に立っているというのがわかります。というのは、ロシアがソ連だった当時、中国とソ連も島をめぐる対立していたことがあります。ここで国際政治の単純明快な論理が出てきます。「敵の敵は味方」です。領土問題についてソ連は敵であり、そのソ連と領土問題をめぐって対立している日本は、敵の敵だから味方、というわけです。中国は領土問題については日本の言い分を聞く、という形をとっていました。

この「敵の敵は味方」というのは単純ですけれども、明かに現れてきました。アメリカの場合ですと、かつてイランと仲が良かった。イラン革命の前にはイランに国王がいました。アメリカはイランと信頼関係を築くことによって、中東全体の支配に楔を打ち込むということで、仲良くしていました。イランとイラクは対立をしていました。そうしたらイランでイスラム革命が起きてしまい、反米政権ができてしまったのです。イランとの関係が悪くなって以降、アメリカはイラクにてこ入れをすることになりました。その結果、フセインという化け物を作り出してしまったのです。「敵の敵は味方」という、馬鹿馬鹿しい単純明快な論理がいまも世界で幅を利かせているのです。

次はお隣り韓国地図です。韓国の地図を見ると日本海はないのです。「東海」と書いてあります。「冬のソナタ」の中で東海でデートをするという場面がありましたが、これはつまり日本海側の街のことです。韓国人たちは「日本の海ではなく東海だ」と言っておりまして、国際機関に対しても東海と表示をしるという主張を繰り返してきておりました。それが受け入れられて、「日本海（東海）」という表示になりつつあります。

では北方領土はどうなっているのでしょうか。そうです、北方領土はみんなロシアのものということになっています。日本と韓国は竹島をめぐる争っていますよね。日本人は竹島といってもなかなかかわらないのですが、韓国ではあれを「独立島」と呼んでいて、日本が勝手に自分のものだと主張していると、みんなが知っています。そうすると敵の敵は味方ということで、北方領土はロシアのもの、とみる

わけです。

次はアメリカです。世界の中心はアメリカ。アメリカの子どもたちはこの地図を見て育つわけです。日本で見ている世界地図では見えないことがあります。それはヨーロッパとアメリカの関係です。アメリカにとってはヨーロッパのほうがアジアよりはるかに近いのです。かつて旧ユーゴスラビアの紛争で、セルビアによってコソボのアルバニア人たちが弾圧をされていました。このときにアメリカ軍を中心としたNATO軍がセルビアを爆撃しました。アメリカ本土から飛んで行ったんですね。アメリカ軍のパイロットが、朝に家で食事をして、車を運転して基地に行き、爆撃機に乗り込んで、セルビア上空で爆弾を落とし、また基地に戻ってきて、家に帰って食事をしながらテレビを見ていたら、今日、自分が爆撃をしたことがニュースに出ていたということがありました。毎日セルビアの上空まで爆撃に「通勤」していたんです。それくらい近い関係にあるということです。

アメリカの地図では、北方領土はロシアの色に塗ってあります。日本の主張がアメリカに伝わっていないということがあります。自民党の議員たちがアメリカの地図会社に陳情して回ったのですが、まったく相手にしてくれなかったということです。

有名なオーストラリアの地図です。日本列島というのがユーラシアからはみだした列島であることがよくわかります。日本海は内海ではないか、という違った見方ができるように思います。

今度は、「こどもニュース」的に言いますと、「みんな、いま色んな地図をみてきたよね。でも宇宙から見たら国境線はないんだよ」という地図です。本当のところはそれを言いたいんです。それを知ってほしいなと思います。

同時に世界というのは、緑のところと砂漠のところとはっきり分かれているのがわかります。アメリカ大陸は意外に緑が少ないです。南米は、アマゾン川の自然破壊がすすんでいます。まだ実に緑が豊かなところ。サハラ砂漠は本当に砂漠ばかりです。ヨーロッパは緑がいっぱい、アラビア半島は砂漠ばかり。中国大陸も今砂漠が広がっていますね。

今度は地図ではなくて、宇宙から見た日本列島周辺の写真です。これは国立天文台の先生がアメリカのNASAに頼んで、いかに日本が電気を無駄遣いしているかを宇宙から撮ってもらったものです。1997年1月7日夜の8時半の写真です。東京はもちろん赤く、静岡、名古屋、大阪も明るい。北海道の真ん中のそんなに人がいないところでも、ナイタースキーのゲレンデのライトが宇宙から見えるのです。日本海ではいか釣り漁船の灯りが見え、韓国のソウルも真っ赤です。そしてそのすぐ北側は真っ暗なんです。北朝鮮が真っ暗だったということが写っていたわけです。一番寒いときに真っ暗なんだ、電灯もない暖房もないというのが見えてくるのです。

色々な世界地図を見ていただきました。それぞれの国の人たちが自分の頭の中に描き出す世界というのは、自分の国が真ん中にある世界だということです。色々な外国の人と付き合うときに、それぞれの国の地図が頭の中にインプットされているというのを、折に触れて考えてもらいたいというのがひとつです。

見方が違うというのにはもうひとつあります。例えば日本の日の丸です。子どもの頃のお絵かきで、空の太陽を皆さんは何色に塗っていましたが、赤く塗っている人が多いですね。私たちが日の丸を見れば、あれは太陽をシンボライズしたというのはすぐにわかります。でも世界には太陽を赤く書くという文化はあまりないのです。例えばアメリカ人が日の丸を見たら、この赤って血の色なのだろうか、あるいは情熱をシンボライズしたのかと思っている人がかなりいます。「太陽を書いてごらん」と言われて赤く書くのは、日本とロシアの一部の人たちだと言われています。アメリカで子どもたちが書くのはどんなものかという、イエローないしはオレンジということになります。では、虹の色は何色か。七色に決まっているだろうと思いますが、そうではないんですね。これは私も好きな「WHAT DO YOU LIKE?」という絵本ですが、虹は六色になっています。つまり、アメリカ人は虹は七色だという固定観念を持っていないんです。私も虹の色を数えてみたことがありますが、五色まではわかるのですが、こ

れを七色に数えるのは難しいんですね。私たちは虹は七色だと思い込んでいるけれど、世界には必ずしもそう思っている人ばかりではないということです。ここまでが世界には色んな見方があるという話です。

次はアメリカ大統領選挙の話です。いよいよ明日ですね。

昔「こどもニュース」で、ジョン・ケリーさんが民主党の代表に選ばれたときに、ケリーさんを説明するための「飛び出す絵本」というのを作りました。題して「政治家一直線」。これを放送でやったのですが、その時は放送の直前に四国に台風が上陸しまして、急遽「こどもニュース」を七分縮めなければならなくなり、全部を紹介できませんでした。せっかく作ったのですから、今日は全部をまとめて紹介しようというつもりです（笑い）。

（絵本を見せながら）「ケリー物語」です。この放送をやったときにはケリーさんは60歳ですが、子どもたちに「還暦です」と言っても通じない。そこで、子どもたちが知っている60歳の有名人を例として挙げようということになりました。橋幸夫、加藤茶なら子どもたちもわかるだろうということで、放送当日には、「ケリーさんは60歳、日本でいうと加藤茶と同じ年なんだよ」と説明しました。

1943年生まれ、お父さんが外交官だったものですからヨーロッパ各地を転々としてきました。お父さんは食事のときにいつも政治の話をしていましたから、ケリーさんは高校生の頃から将来は政治家になろうと思っていました。政治家になろうと思う決定的な出来事がありました。高校のときにケネディ大統領に会い、自分も将来政治家になろう、できれば大統領になりたいと思うようになったということです。ちなみにケリーさんは正式には「ジョン・F・ケリー」で、「JFK」と一緒になるわけです。「ジョン・フォーブス・ケリー」です。アメリカではフォーブスというのは大金持ちの一族が有名です。民主党としては貧乏人の見方として売り出したいものですから、「フォーブス」とは言わないで、あくまでも「ジョン・F・ケリー」です。

将来は政治家になろうと決意したケリーさんは、エール大学に入ります。ケリーさんが、実はある秘密クラブに所属していました。“Skull & Bone”という秘密クラブですが、ここに三年後に入ってきたのがブッシュさんです。ケリーさんとブッシュさんはエール大学の先輩後輩、秘密クラブの先輩後輩です。アメリカのエリート大学には秘密クラブがいくつもあります。いわゆるWASPのエリート層が中心になった秘密クラブがありまして、卒業した後もそのネットワークを生かして助け合うというのがよくあります。ここに入ったということで、ケリーさんもブッシュさんもエリートの家柄だということがわかります。

そのケリーさんは大学を卒業して、ベトナム戦争に行きます。愛国心に燃えて、徴兵制にとられる前に自ら志願して海軍に入りました。ベトナムのデルタ地帯で川をパトロールする艇長になりました。このパトロールボートを絵に書くというのは実は難しく、当時の写真を集めて、スタッフの方にこういうボートを書いてくださいとお願いしました。部下が何人乗っていたのかも、正確な数で絵に書かなければなりません。部下は5人いて、そのうちの一人は黒人だったので、黒人の絵がさりげなく書いてあるわけです。ボートの上であるドラマがありました。敵の攻撃を受けている真っ最中に、グリーンベレーという特殊部隊の兵士の一人が川に落ちてしまいました。ケリーさんは自らも攻撃を受けてけがをしながら、その人を助け出したという物語がありました。

このベトナム戦争は、実は地獄でした。親友が次々に殺される。ケリーさんの部下が間違っただけで男の子を殺してしまうという事件がありました。しかも母親の目の前で。ケリーさんは今でもこの男の子の顔を覚えているそうで、よく夜中にうなされるそうです。ベトナム戦争に行ったけれど、実は地獄だった、というのを強調するためには、その前の段階で戦争映画のようにかっこいい絵にしておいて、でもね、実は地獄なんだと展開するのです。そういうわけでケリーさんはベトナム戦争は間違いだ、と思うようになりました。

そのときブッシュさんはテキサス州の軍隊に入っていました。アメリカという国は50の国の集まりで、すべてに憲法があり、最高裁判所もあり、軍隊もあります。テキサス州には陸軍と空軍がありまして、ブッシュさんは空軍のパイロットになりました。当時、ベトナム戦争中に、アメリカ兵は5万5千人が殺されていきました。当時のアメリカは徴兵制で、一定の年齢になれば男はみんな戦争に行かなければならなかったんです。中には戦争に行かずにすませたいという人もいます。曽我ひとみさんと結婚したジェンキンスさんは、ベトナム戦争の当時は韓国にいました。韓国にいるアメリカ駐留軍がベトナムに送られている頃でして、北朝鮮に逃げたアメリカ兵もたくさんいました。ジェンキンスさんが北朝鮮に逃げた理由はわかりませんが、ちょうどその頃です。ひょっとするとベトナム戦争行きが嫌だったのかなと思います。

ベトナム戦争に行かないやり方は三つありました。一つはジェンキンスさんのように逃げることです。当時、日本でも反戦運動、「ベ平連（ベトナムに平和を市民連合）」という市民運動がありました。ベトナムに送られるアメリカ兵で、日本に來ているアメリカ兵を逃がすという活動をしていました。つまり軍隊に行かないで逃げるという方法です。もう一つは海外に留学するというやり方で、クリントンさんがそうでした。「ローズ奨学金」でイギリスに行って、イギリスでベトナム戦争反対運動をしていました。もう一つ、合法的に徴兵を免れる制度がありました。それが州の軍隊に入ることです。州のために奉仕しているのだから、連邦軍には徴兵されなくて済みました。連邦軍に入ったらベトナムに行かなければならなくなるけれど、州の軍隊に入るとしたら、とりあえず今までのように仕事はそのままできるということになっていました。なぜ州の軍隊があるかといえば、そもそも連邦政府に信頼を置いていないわけです。初めは13の国があって、アメリカという国をつくりましたが、13の国にはそれぞれ憲法があり、軍隊もありました。連邦政府をつくったら、それが力を持って、とんでもないことを押しつけてきたら大変だということになります。そういうときにはいつも武器を持って連邦政府と戦える力をつけておこうというのが州兵です。アメリカの合衆国憲法修正第2条に民兵は武器を持つ権利を保障するというのが書いてあります。もともと連邦政府に対する抵抗権として武器を持つということを認めているのです。ところがそれを今は拡大解釈されて、アメリカはみんな武器を持つ権利があるという風に言われています。

話がそれてしまいましたが、当時、州兵に入ればベトナム戦争に行かないで済みました。ブッシュさんが大変成績が悪かったにもかかわらずテキサス州の軍隊に入れたのは、テキサス州出身の国会議員のお父さんのこねで入れたのではないかという疑惑があります。民主党はその疑惑を主張しています。

「華市911」のなかで監督のマイケル・ムーアが、連邦議会に行って「あなたのお子さんはイラク戦争に行きましたか」と聞いてまわるシーンがあります。上院下院合わせて535人のうち、子どもがイラクに行っているのはたった一人です。みんな行かせていません。有力者の子どもというのは免れるんです。

今は徴兵制ではなく、志願兵だけです。ベトナム戦争の時とは違います。ベトナム戦争の時には国内でも反戦運動が盛り上がりました。徴兵制でみんな兵士に取られますから、自分が、あるいは自分の息子が、自分の夫が、いつベトナムに送られるかという危機感がありました。だから反戦運動が盛り上がりました。今はアメリカ兵というのは志願兵です。

志願したのだから、殺されてもしょうがないというのがかなりあります。志願する人というのは、それ以外に仕事がない人たちです。あるいは中南米からアメリカに入ってきて、なんとかアメリカ国籍を持ちたいという人たちです。アメリカ軍の兵隊として戦争に行けばご褒美として国籍がもらえることになっています。ですから、アメリカ国籍のほしいヒスパニックがイラクにずいぶん行っています。いわゆるアメリカの「本流」の人たちからは、アメリカ兵という姿が見えないんです。これがイラク戦争反対というのが盛り上がらないことの一つの理由だろうと思っています。

ベトナム戦争の時は、州兵は基本的にはベトナムに行きませんでした。しかし今は志願制ですから、イラク戦争ではアメリカ兵が足りません。そこでブッシュ大統領は、州兵を連邦政府軍に編入して、イ

ラクにどんどん送り込んでいます。イラクで毎日のように死んでいる、あの多くは州兵です。ほとんど訓練も受けないまま、装備も不十分なまま、送り込まれています。州兵がどんどん殺されることによって、その家族がイラク戦争反対というのを呼び始めています。

さてケリーさんですが、ベトナム戦争から帰ってきて、戦争反対を訴えます。国会議員になり、環境問題に熱心に取り組むようになります。かつてリオデジャネイロで地球サミットが開かれました。ケリーさんは地球サミットに民主党の代表として行き、今の奥さんテレーザさんと知り合いました。再婚同士ということになるのですが、かつてアメリカでは離婚歴があると大統領になれませんでした。初めての離婚歴のある大統領はレーガンで、あれ以来、離婚をしていても支障はないということになりました。2003年の秋に、ケリーさんは民主党の大統領候補になりました。そのときに次のような演説をしました。「私たちはみな、同じボートに乗っているんだ。世界に尊敬される国にしたい。みんなが団結しないとボートは転覆してしまうかもしれない、アメリカ国民は団結しなければならない」と、ベトナム戦争のボートの話をかけているというわけです。

そしていよいよ11月2日、一騎打ちが行われるという絵本でありました（拍手）

大統領選挙というのは選挙人を選ぶわけですね。直接選挙だという言い方もできるんですが、厳密には間接選挙です。大統領を選ぶときには538人の選挙人を選び、12月にそれぞれの州都に集まって投票します。その結果をワシントンに集めて来年の1月6日に上院下院合同議場でこれを開票します。ですから、正式に大統領が決まるのは、1月6日、就任式が20日になるわけです。

そもそも大統領選挙人という仕組みは、アメリカの13の国が連合体としてでき、連合体の大統領を決めようということになりました。もちろんテレビも新聞もない、多くの人が読み書きができない、情報がないという状態の時です。そのときにそれぞれの国で自分たちの代表、つまり大統領を選ぶ人を選んでその人たちに投票をしてもらうことにしていました。それがいまでも残っているということです。

538人の選挙人はどうやって選ばれているかと言いますと、上院議員は100人、下院議員は435人、ワシントンの3人を足した数の分だけ選ぶことになっています。一番大きいのがカリフォルニア州の55人、小さいのはサウスダコタやノースダコタの3人です。人口によって選挙人の数が違ってきます。それぞれの州で投票して、1票でも多い陣営が勝者です。“Winner takes all”、勝者総取りです。投票の仕方は州によって、あるいは郡によって色々です。タッチパネルのところもあれば、穴を開けるやり方もあります。

こういう仕組みになっているものですから、全米で票数では勝っていても選挙人の数で負けるということがあるわけです。4年前、票数ではゴアさんの方が多いのに、選挙人の数ではブッシュさんの方が多いということが起こりました。選挙人の数が少ないところで圧倒的な差をつけ、たくさんの選挙人のあるところでわずかな票数で負けると、選挙人の数では負けるということが起きるわけです。

それからもう一つ、選挙人の総数は538です。過半数は270です。でも組み合わせによっては269対269になることがあります。ニューヨークタイムズがこれを計算したら、33通りあるのだそうです。こうなったらどうするか。先ほど説明したとおり、来年の1月6日に正式にわかることになっていて、そこで連邦議会の議員が決めるということになるわけです。

それからもう一つ、大統領選挙人は選ばれたけれど、その人が誰に投票するかは本当は自由です。大統領選挙人が実際に投票するときには別の名前を書いてしまうというのが過去に1回だけありました。大勢に影響はなかったですけど。選挙人というのは、民主党と共和党のいわゆる有力者が選ばれているので、投票行動を変えるというのはありえないわけです。

というわけで、269対269になったら議会で決めます。大統領に関しては下院が決めます。副大統領に関しては上院が決めます。というのも、副大統領は上院の議長を兼ねていますので、上院の人たちで自分たちの議長を決めることになります。現在の議会は共和党のほうがちょっと多いのです。でも明日は

上院議員選挙と下院議員選挙が同時に行われます。今回大統領選挙にもなって、下院議員が総取替えの選挙ですから、結果をみないとわからないのです。たぶん共和党が下院議員は多数になるでしょう。同数だった場合はブッシュさんが選ばれる可能性があります。

もう一つトリビアな話があります。今回コロラド州だけは住民投票があります。「勝者総取り」は民主的でないのではないかというので、得票数に比例して決めるかどうかというのを住民投票するのです。これがアメリカらしいところで、今回の結果を4年後から実施しようというのではなくて、即刻実施です。明日の結果に基づいて得票数を配分して決めます。

勝者総取りか比例がいいか。比例がいいと思うでしょうが、違う考え方ができるのです。もしも比例がいいということになったら、共和党も民主党も、どうせがんばったってわずかの差しか出ないのならば、他のところでがんばったほうがいいんじゃないかというのが出てきます。反対に総取りになれば、どちらもコロラド州に足を運んで、「私が大統領になったらコロラド州のためにこういうことを実現します」と言うに違いありません。民意を反映させるなら比例のほうがいいけれども、コロラド州の収益を考えれば総取りのほうがいいこともあります。

カリフォルニアというのは55人です。伝統的に民主党が強いんです。総取りすることによって民主党は過去に大統領に当選しているわけです。それなのにこちらでも比例制になったら、おそらく近い将来民主党は大統領を出すことができなくなります。カリフォルニアを抑えることによってなんとか互角の戦いをしているわけですから、比例制があちこちで行われたら実は危ないということになります。

民主党と共和党どう違うかという、リンカーン大統領は共和党でした。奴隷制度をなくそうといったのは共和党だった。もっと民主主義であるべきだという共和党と、奴隷制度を維持しようという民主党という対立構造がありました。それが長い間に逆転しまして、金持ちの味方共和党、貧乏人の味方民主党と、乱暴に言ってしまいますとこうなります。例えばクリントン政権のときにアメリカでは黒字財政が続きました。この黒字をどう使うかと、ゴアとブッシュが対立しました。ゴアさんは社会福祉のために使いましょうというのが主張でした。ブッシュさんは、税金をみんなに返しましょう、返ってきた税金を使ってくればアメリカ経済は活性化するという考え方です。民主党の社会保障的な考え方と、努力すれば誰だって豊かになれるのだから、機会を与えることこそが大事というのが共和党の考え方との違いです。ブッシュさんが当選したことで、大幅な減税をしました。

日本の場合は減税するときには、所得税の額が減ります。実は減税があったとはぴんと来ないんです。アメリカは減税分だけ小切手で来るので、目に見えて減税分を何かに使えるというのがありまして、確かに経済に効果があります。税金を納めた人はたくさん返ってきます。金持ちはたくさん税金が返ってきますが、貧乏人は返ってきません。ブッシュ政権の4年間で貧富の差がさらに広がりました。クリントン政権の時の黒字をすべて使ってイラク戦争を始めました。今は大幅な赤字です。にもかかわらずブッシュさんは大企業に対する大幅減税にサインしました。これによってますます財政赤字になります。ブッシュさんはさらに減税すると公約しました。そしてイラク戦争の戦費は増えています。今、アメリカの財政はピンチになっています。連邦政府の職員の年金の支払いも難しい状態になっています。ブッシュさんが選ばれたら何をするのか、とてつもなく国債を発行するのでしょうか。その国債を日本が買う、という状態になるのでしょうかね。ケリーさんが大統領になったら、ブッシュさんのつけが回ってきて、とてつもなく大変なことになるでしょう。というのが、今のアメリカの現状です。

大統領選挙は共和党と民主党の一騎打ちだと言われていますが、実はいろんな人が立候補しています。今回もラルフ・ネーダーという環境問題に熱心に取り組んできた人が立候補しています。自動車はどんなスピードでも危ないと告発する本を書いた人で、消費者運動をずっとやってきた人です。4年前、この人が立候補しました。ゴアさんも環境問題には熱心だったのだけれど、環境問題を考える人はかなりネーダーさんに入れちゃったんです。その人たちがゴアに投票していたらまちがいがなく当選していたんです。この4年間、ブッシュ政権のもとで京都議定書からも離脱しました。アメリカでは環境保護局と

いうところで環境問題に取り組んできた人が、絶望して辞めたり、あるいは退職に追い込まれるという事態になっています。民主党の人たちはあのときネーダーに投票しなければ、と言っています。にもかかわらずネーダーさんは今回も立候補しています。民主党の人たちはより悪くないほうに投票しようよという運動をしています。ラルフ・ネーダーが出ることによって、民主党の票が取られてしまいますと民主党は危ないということになります。今回、共和党が全米の各地でラルフ・ネーダーを候補者として登録しています。ラルフ・ネーダーが民主党の票を取ってくれるだろうということで、共和党員が署名を集めてネーダーが立候補できるように登録しています。ここまでくればラルフ・ネーダーも出るのをやめる、と言えいいのに、出ると言っています。私はネーダーがとても好きだったのですが、今回は個人的には愛想がつかしました。今回は4年前ほどは取らないだろうと言われていますが。

[質問] アメリカが国債を発行した場合、日本が買うしかないと思いますが、日本の経済は良くないので、日本が倒れてしまうのでは。

[池上氏] そうですね。日本が最近、米国債を買った時は、財務省が円高対策としてやりました。円高があんまり進むと輸出品の値段が上がってしまうので、輸出品が売れなくなり、経済が悪くなります。財務省は円を売ってドルを買う、つまり円をドルに替えてアメリカの国債を買いました。これによってアメリカはイラク戦争のための戦費をまかなったということになります。国債を買うお金はどこから出たのかというと、財務省の発行する財務省証券というのがあります。財務省証券とは何か。これも国民からの借金です。日本政府が負っている借金で、私たち国民が返すという構造になっているわけです。国債を買ったことによって、円が下がりドルが上がりました。日本としては儲かったという形になっていますが、このところまた円がじりじり上がってしまっていて、前に買った分が損失になるかもしれません。日本がアメリカの国債を買うお金を出すためには日本政府は借金をしなければなりません。ということは、日本がアメリカの借金の肩代わりをする形で、日本の借金が増えるということになります。このまま小泉さんがブッシュさんと一蓮托生で行くということになりますと、日本の財政状態がひどいことになるという、暗い未来が見えてきます。明るい話でなくて申し訳ありません。

[質問] ケリーさんが当選した場合、日本に対してはどのような政策を取るのでしょうか。

[池上氏] ジャパンパッシングが続くんじゃないか、経済界の見方はそうですね。クリントン政権の時に日本を無視して中国との関係を維持しました。ケリーさんも大変中国が好きですね。ブッシュなんかと仲良くやっていた日本の政府を相手にしないでしょね。ブッシュと仲良くやっていると宣言している人もいますから。中国と関係をつくっていいこうというふうに関わりなくなります。日本の政治では民主党とのパイプが少ないですから、日本としては困ったことになります。

それよりも、世界全体にとってどちらがいいかということを考えてほうがいいと思います。ブッシュ政権はイラクが終わったら、次はイランだと言っています。シリアにも圧力をかけています。世界全体のことを考えると、より悪くないほうをとるという選択で言えば、ケリーかなと個人的にはそう思っています。

[司会] ご多忙中にもかかわらず、フェリスの院生研究会にお越しいただいて本当にありがとうございました。

講演を拝聴して

池上氏のお話をいつも拝聴する度に感じる事が一つある。池上氏のお話は物事の様々な見方を私たちの中に植えつけてくれるのである。池上氏から頂いた知識は私たちにとって「種」の様な存在であり、その種は聞き手によって様々な芽吹き方をして行く。個人の意見を率直に述べるジャーナリストは数多く存在するが、しかし「物事の見解は様々。答えを出すのは他の誰でもないあなた自身です」と、「種」だけを渡してくれるジャーナリストは非常に稀有な存在なのではないであろうか。

情報社会と呼ばれる現代において、情報はメディアを通じて簡単に入手出来るが、その情報を「自分の知識」として濾過し自分のものとして収める事は容易な事ではない。しかし池上氏はいつも易しい言葉と例えを用いて誰にも解りやすく説明して下さり、最終的な答えを聞き手に委ねるのである。

今回の講演は世界中の地図を用いて、「地図」をたった一つ取り上げただけでいろいろな角度で世界中の国の立場や状況がこんなにも違うと言う事を教えて頂いた。他の学生からは「ある意味、『地図=政治』を反映している物だと受け取った」との意見も挙がっている。「事実」と言うものは常に一つだけ存在するものであるが、当事者の「真実」とは個人や国家にとって全く異なるものとなる、という事を今回の講演を通じて更に痛感したのであった。

「国際化社会」という言葉が定着しつつある現代社会ではあるが、実際には心穏やかでない国際情勢が連日新聞を賑わせている。池上氏から「種」を植えて頂いた私達一人一人が、各々の意見を芽吹かせて個々の花を咲かせていけたらと思う。そして願わくばその花から新しい「種」を生み出して行きたい。グローバリゼーションと言うマクロな時代と密着した社会を生きるには益々その経験を必要とされるであろう。

この度の講演をご多忙な時間の中に快諾して下さった池上彰氏に深い感謝の意を表したい(国際交流研究科博士前期課程1年、金久実央)。

日本のODAとJVCの活動

講師 熊岡路矢氏

日本国際ボランティアセンター代表

私自身がいつ（政府開発援助ODA）の問題に直接ふれたかといいますが、いまから25年前にインドシナ難民がタイなどASEAN諸国に逃げてきた頃です。ベトナムのボートピープルやカンボジアの難民が、命からがらタイなどASEAN諸国に逃げてきた時期からの、経験的なお話をしたいと思います。

日本国際ボランティアセンター（JVC）の活動はいまから25年前（1980年）に始まりましたが、私はJVCをつくるころから参加できました。日本で自動車の整備士や職業訓練校での経験がありましたので、1980～85年は難民キャンプで難民学校をつくるのにかかわり、そのあとは難民を出す側の国、カンボジアやベトナムの復興の活動（給水・母子保健・職業訓練など）をしてきました。

JVC初代代表はアジア工科大学院大学の川口昌宏先生（日本大学）が引き受けてくれました。川口先生は、いわばODA側とNGOの側との両面がわかる方ですが、300万円の予算でNGOが建てたラオス難民学校と比べて、ODAで数千万円をかけた技術学校は活用されず、クモの巣がはっているということをおっしゃっていました。ODAはもちろん役に立っている例もあるけれど、調査・実施・評価のプロセスがきちんとしていなければ、無用なものになってしまうこともあります。極端なケースでは、本来継続を目指しているのに、ODA支援が終わったとたん、事業が立ち行かなくなり、支援によって建てられたものが売り飛ばされて、その地域の有力者のポケットマネーになるということもあります。

これはODAに限らず、自分たちの身に振りかかったことでもあるので、頭の痛い問題となっていますが、カンボジアで起こっていることとお話します。現在、JVCの技術学校（プノンベン）は、カンボジアの政治的有力者とそれに近い企業（政商）の都合で、立ち退きを要求されるという状況に直面しています。80年代、カンボジアが国際社会から孤立していた時代に、JVCは民間のお金だけで活動をしていましたが、いまは草の根無償などODAからも支援を受けています。ですから、外務省や大使館を巻き込んで強制立ち退きに向かおうと思うのですが、外務省などは相手国への「内政不干渉の原則」が強すぎて、立ち退き要求などに対してねばることに弱腰だと思いました。いまは外務省・JICA（日本国際協力機構）・コンサルタントなどで働いていた人々で、ODAに関するアドボカシーということで、NGO側で働いている人もいます。私自身もODA実施の内側にいたらさらに明確な批判ができるかもしれないと思いますが、逆に内部にいたことがあると、心理的に批判しにくいかもしれないという両面があります。

私自身は最も先鋭的な分野において、ODAの対極で活動をしてきたといえます。紛争時や国交のない国々での人道支援や、紛争の起こっていないところや終わったところ、例えばタイ・ベトナム・ラオス・カンボジア・エチオピアなどでは、農村開発や地域開発をNGOの立場でかかわってきました。

もともと日本のODAは戦時あるいは戦後賠償として始まりました。いまもODAはそういう性格を引きずっている面があると思います。「戦争中に被害を与え、申し訳ないことをしたので何かお返しをする」というものです。私は、これは本来のODAとは違うのではないかと考えています。開発協力の必要よりも謝罪賠償の意図が中心ですので、本来必要な計画・立案があまりなくても実施されてきたと思います。日本のODAに特徴的な点の二つめは、日本の政府・政治的有力者と相手の政府・有力者が受益し喜ぶようなものになっていて、市民・住民の観点がとても弱いということです。フィリピンのマルコス政権やインドネシアのスハルト政権のときの日本のODAに顕著ですが、道路・橋・港・ダムといった大規模インフラ、国民や外国に対して自慢できる大型の経済設備を建設しました。三つ目の点は、いまお話したことと関わるのですが、日本のODAには日本の企業が強く関わっているということです。援助案件が日本企業の裨益につながるということが多くあります。

援助によって両国の有力政治家がうるおっているというのを明確に立証するのは実際には難しいこと

でしょう。たとえばカンボジアでは、フン・セン首相とソック・アン官房長官と癒着した形で、KTパシフィック社のコントリウという政商がいます。日本でいえば、田中角栄元首相と国際興業の小佐野賢治社主のような関係です。マルコス政権が倒れた時、これはODA検証のいい機会でしたが、不十分な結果に終わりました。スハルト政権が倒れた時も、市民社会やマスコミなどが権力をチェックしようとしたが、政府・外務省はその努力を放棄したと見えました。日本ODAの問題点を検証し改善する良い機会だったのですが、そこを明確にできないまま、今日まで来てしまいました。本当に残念無念なことです。

外務省の人に聞くと、ODAの検証は一般論としては「イエス」だけど、「先輩外交官の失敗を後輩として批判的に検証することは心理的にできない」という情けない答えが返ってきました。日本の外交政策やODA政策を見直し改善する機会を失うという点で残念です。また、外務省はきちんと検証を行なう機能や性格を持っていないと判断されてしまいます。日本の場合は形式的には複数政党制だけど、戦後60年の利権構造は根本的に変わっていません。政権党が替わるような国では、政策担当者や政策立案者が交代し、そのときに自浄作用が働くわけですが、日本の場合は事実上、自民党の一党支配のような形態・構造はほぼ変化していないので、政策への建設的、積極的な批判・検証ができていないのです。

日本にはいまだODA基本法がありません。戦後補償としての性格と（いくらか崩れたとはいえ、相手国からの「要請主義」ということで）、ODA実施が両国の政治的トップ同士が中心になっていることが原因だと考えられます。ただ、1992年のリオ環境会議の前後に「ODA大綱」ができ、90年代半ばにこれをめぐる議論もまともになりかけたといえます。しかし相手国の経済成長を支援するという基本的考え（経済開発協力）と枠組みは続いています。冷戦が終わったことで、大国が軍事費を削減し、貧困問題の解決に資源をかけられるようになったはずですが、西側諸国の旧ソ連圏との競争という意味での援助への熱意は下がり、経済的な「世界統合」への傾向が生まれました。また援助が行われた国々においても、数字上のGNP（全体平均）はあがりましたが、そのなかで、極端な貧富の二元化が生まれてしまっています。数字的な平均のレベルで生きている人はほとんどいなくて、上下に大きく隔たって少数の「上層」と多数の「下層」があるわけです。貧困層の底辺は、文字通り肉体・内臓を売らねば生きていけない絶望的な状態の人々です。実際に起こっていることはどういうことなのか、一例ですがカンボジアのケースで話したいと思います。

1979年に波尔・ポト政権が倒れ、カンボジアとその人々はなんとか生き延びていかなければならない時期が続きました。当時の国際社会の見方では、隣国のベトナムが、いろんな理由があったにしても、波尔・ポト政権という他国の政権をひっくり返しました（最近でいえば、米国が、アフガニスタン、イラクで行ったことですが）、それが厳しく非難され、酷いことに「侵略された側」のカンボジア自体も経済制裁を受けることになりました。一人当たりの年間のGNPは、計算しようもありませんでしたが、あえて見積もれば30～50ドルぐらいかという状況でした。数字にできないほどひどかったです。フン・セン氏（80年代前半当時、外務大臣）なども、他国の政治リーダーに比べたらきわめて倹しい生活でした。基礎教育や基礎保健など、人間の必要におけるすべての分野で状態が悪かったのがカンボジアでした（ほかにアジアではアフガニスタン。両国とも紛争、内戦などで徹底的に破壊されました）。1991年のパリ和平協定で、国際社会に受け入れられることになり、平和と復興の道を歩みはじめたことになりました。しかし、貧しかった80年代と比べて、安心して生きていける・豊かになったカンボジア、というのは5～6割以上の人には当てはまらないことでした。89年から土地所有権の売買ができるようになりました。以前は小さい土地を耕して米や野菜をつくって生活できていたのが、土地なし農民に転落し、都市の違法居住者やホームレスになる農民も多数生まれました（小作農になればよい方で）、和平協定が成立した91年からは、さらに土地所有権の売買が可能になり、貧富の格差が猛烈に広がることになりました。富んだ人からみれば、市場経済導入も援助も利益や財産を増やすものですが、低いといわれた、80年代のレベルからも蹴落とされて底辺に沈んでしまった人が多数出てしまいました。

フン・センはポケットマネーで2000校以上の小中学校建設支援をしました。首相の給料だけでは不可

能です。しないよりはいいかも知れませんが、日本のODAの一部をふくめ、援助利権やビジネス利権が数百・数千万ドルの単位で彼のところに入ってくるのだと考えると複雑です。本来、こういうことは社会の中で政府予算の中で実現されるはずなのに、それが「ポケットマネー」で行われ、フンセン政府や政権党＝人民党の指示につなげられる。という歪みがみえます。

80年代のカンボジアは、いわば共有されていた貧困で、ほぼ全員（99%以上の人々）が非常に貧しい状況でした。「助け合い」の考えや仕組みも生きていたし、利権の取り合いなどが生ずる以前の段階でした。それが90年代になって、数字上、全体の経済水準は上がったように見えるけれど、土地使用権・所有権が売買できる条件下で、極端に富む少数の人と、80年代の貧困レベルからも脱落させられる人々が生まれました。以前小さくても自分の家を持って、米や野菜を作って食べていけるだけの土地を持っていた人々が、社会全体の5割、少なくとも2～3割の人たちが悲劇的な形で蹴落とされていきます。女性が家長である世帯も農村でやっていけたのは、「サマキ（カンボジアの言葉で「結」＝連帯の意）」での世帯同士（10～15世帯）の助け合いができていたからでした。拙速な市場経済導入で、この「サマキ」も壊れ機能しなくなりました。

NGOの活動・存在にも関係することでは、事務所や居住のことがあります。80年代は居住選択の自由はなく、一軒か二軒のホテルにまとめて住まわされていましたが、パリ和平協定以降、事務所や家の選択・交渉が認められました。和平協定成立以降、政府関係者や公務員の住んでいたところはとても大きな資産価値をもつようになりました。国連平和維持活動（PKO）の国連カンボジア暫定統治機構（UNTAC）（要員、2万人以上）がカンボジア和平・復興プロセスで入ってくるようになると事務所・住居などが必要になるので、国連、企業、メディア、NGO関係者など外から来る人に貸す動きが一気に加速しました。そうして所有者の公務員などは都市周辺部に移り、周辺部の人々が郊外に住み、郊外に住んでいた人々が、農村の土地を購入し住むというような「玉突き」的な事態が進みました。

1993年の総選挙後から顕著になった傾向としては、土地なし農民層が人口の16%（OXFAM）に至ったということです。今は20%を超えているでしょう。人口1000万人の2割以上の人々が「土地なし農民」に落ち込みました。80年代はゼロに近い数字でした。子ども・娘売りもゼロではないけれど、少なかったのです。それが90年代以降は、内臓を売る、あるいは小さな女の子や場合によっては男の子も性産業に売り飛ばすことが行なわれるようになってしまいました。

長くカンボジアの話をして何を言いたかったかと言いますと、経済成長型の援助の結果、経済指標の全体や平均の数字は上がっているけれど、その中で極端な二分化が起こることを手伝うことにもなりません。それを防ぐ有効な手立てをしなれば、貧困削減を看板に掲げる開発協力・援助としては、失敗でしょう。日本政府・外務省などと協議する場でこの問題を話し合っていますが、なかなか改善は見られません。90年代半ばには、日本ODAでも、一旦、人間開発・社会開発の強調という場面が出てきました。しかし、日本経済の低迷、経済バブルの破裂、そして「9・11事件」後の米国政策に対応して、治安面にODAが使われることが多くなり、「経済成長型」に戻ってしまったと言えます。

1996年以降、NGOと外務省との間で定期協議を行なっています。ODA政策と具体的な連携策が二つの大きなテーマですが、例えば最近では日本政府はスマトラ沖地震の後に5億ドルを援助するとしただけれど、どのような現地調査の積み上げがあったのか、またその支援の中身は具体的にどのように使われるのか、これまでのように政府有力者の懐に入ってしまうようなことに対して有力な歯止めはあるのか、などを問うているところです。

質疑応答

〔質問〕セキュリティにODAが使われるというのは、具体的にはどういうことでしょうか。

〔熊岡氏〕二つあると思います。一つは、従来、たとえばチェチェンやウイグルなどの独立を求める人々たちを、西側諸国は「自由への志士」として扱っていたのですが、「9・11事件」以降、米国などは、こ

これらの動きを反政府活動者＝抵抗者・テロリストととらえ、むしろ弾圧する政府側への共感・支援を示しています。独裁的な政権において、これまで市民社会団体に流れていた援助資金が、ふたたび治安・安定のためふくめ、政府への支援に使われる傾向が高まりました。もう一つ狭い意味では、たとえば治安維持のための軍事・警察の警備訓練などにODAを使うという流れがあります。

〔質問〕イラクの場合は、自衛隊の安全確保のためにODAが使われているというのがありますが。

〔熊岡氏〕そうですね。「自己完結型であるが故に送られた」(03 - 04年時点の防衛長官説明) 自衛隊の安全を確保するためにODAを使うという理解しにくい政策がとられています。自衛隊が派遣されるとき、その派遣先のサマワでは、自衛隊の受け入れについて反対の人も賛成の人もいました。ODAを使って物質面での支援をし、自衛隊の受け入れ体制・環境・感情を確実にするようにしたというのが、実態だと思います。

〔質問〕ODAをめぐる、政府とNGOのやりとりのことをお聞かせください。

〔熊岡氏〕例えばアメリカのNGOの中には大企業と同規模の巨大NGOもあります。そういうNGOには、市民組織(PVO=Private Voluntary Organization)としての性格もありますが、米国開発庁(USAID)と組んでいるうちに政府機関の一部のようになってしまったものもあります。市民性や、話し合って決めていくという部分が少なくなっています。他方、アメリカ・フレンズ・サービス・コミティー(America Friends Service Committee)はUSAIDからはお金をもらわずに、政府が敵視しているような国でも活動をするという立場を取っています。またOXFAMアメリカは、政府から資金をとってないけれど、9・11以降、国内社会環境として、政府を批判しにくくなっているということを言っていました。

日本については、フランスやイタリアに近くて、政府が大きな援助額を仕切っている傾向がとて強いいといえます。ODAのうち、外務省からNGO(外郭団体を除く本来のNGO)に流れるお金は1%に満たません。ODAからNGOに流れる資金をもっと増やせ、という外圧内圧もあります。国際社会の基準で言えば正論ですが、NGOとして考えれば、NGOの実施能力・受け入れ能力を超える規模で金が行き流れてくることは、大きな危険も意味します。半分冗談で言うのですが、NGOを資金的に締め上げればよいという議論も成り立ちますが、NGOがきちんと使いこなせる規模の数倍のお金を注ぎ込むことで、NGOは腐ったり壊れたりすることがあります。

NGOと外務省との間で協議を続けていますが、市民社会の声はなかなか有効には伝わっていないというのが率直なところ。外務省の方は「一通り聞いておきます」という態度です。ODA改革など、市民社会の声は、国会議員やメディア、学界と協力するなかでしか実現していきません。私たちも国会に呼ばれたり、メディアで意見を述べたりしていますが、そういう連携の重要性を感じます。

外交については、現実のレベルでは、たとえば自民党の外交部会などが強い影響力をもっています。ここでの話し合いがODAにも反映されやすく、例えば日本のODAによってつくられたものに「援助マーク」をつけるようにしたり、日本企業・日本経済への還元や、援助分野の優先順序が提案されたりしています。本当のところでは、政府が変わらない限り、ODAの基本政策・性格は変わらないと思います。ODA改革につながっていかないのです。これは単に絶望しているわけではなくて、NGOの側からは政府・社会への提言能力を高めていくことが大切です、そういう力をつけていかないNGOは社会のなかで実効性をもたず、消えていくと考えています。

〔質問〕国益というのは何をさすのでしょうか。援助は何のために行うのでしょうか。

〔熊岡氏〕これは議論の尽きない問題でして、最終的には個人によって考え方が違っていると思います。私が国会で目の当たりにしたやりとりがありまして、印象に残っているものがあります。自民党の若手議員が、日本企業を利するために、また日本が国連で発言したり、安全保障理事会の常任理事国入

りを狙うときにサポートを得られるように、ODAを使うのは当然だという議論を行っていました。他方、鳩山さん（民主党）は、地球市民益を考えて行動することによって結果的に日本は守られるというふうに言っていて、これはNGOの考え方に近いものだと思います。

後半はJVC作成のビデオ「カンボジアの農村開発」を見ました。その中で、カンボジア農村の人々とJVCスタッフの協力の様子と、JVCの4つの基本方針①活動主役は村人（JVCは脇役）②あげない・持ち込まない・押し付けない③生活改善（自然環境を守る。そこから始まる生活改善）④村人とJVCはパートナーが紹介されました。その後の熊岡さんのコメントが以下です。

[熊岡氏]

外部からの支援が依存を生むという問題があります。JVCの経験では、エチオピアで国連世界食糧計画（WFP）の「フード・フォー・ワーク（Food For Work）」というプログラムをJVCで請け負って担当していたことがあります。そのときにあった話ですが、JVCのスタッフが農民に「今年は雨が少ないね。早く降ればいいのにね」というと、「（援助の小麦を作る）カナダで雨が降ればいい」という地元農民の反応が返ってきました。支援されたものを食べていくという依存の体制を作ってしまったのです。フード・フォー・ワークをやめるというJVCと、村役場・地域行政との間には緊張関係もおこって、事務所に爆弾が投げ込まれる事件もありました。支援のやり方を誤れば、本来自立を促すようにとの目的でなされたものでも、依存を生んでしまうという危険なメカニズムを経験しました。

津波被災支援の場合でも、緊急救援から生活再生・コミュニティの復興、開発へのプロセスをスムーズに進めるように、あくまで地域の人たちが主役で、JVCは脇役として側面支援を行うように努力しております。完全にはうまくいってはいませんが、この論点は落とせないと思っています。

まだお話ししたいことはたくさんありますが、時間がきましたので今日はここまでいたします。有難うございました。

第 2 部 修士論文要旨

女性に対する暴力

DV、ストーキングの加害者特性から暴力根絶を考える

岩 崎 仁 美

はじめに

女性に対する暴力は、人間の歴史とともに古くから存在したが、長い間それは「見えない暴力」とされ、または男性と女性の力の不均衡から「正当化」され、大きな問題として取り扱われること無く見過ごされてきた。女性に対する暴力にはさまざまな種類があり、レイプ、ドメスティック・バイオレンス、性的奴隷制、セクシャルハラスメント、ストーキング、女性性器切除などが挙げられる。地域や文化、伝統による違いはあるものの、女性への暴力は文化、人種を超えた世界的規模の現象であると言え、その問題の根は深い。本稿では、主に私たちが日々の生活で直面する危険性の高いドメスティック・バイオレンスとストーキングを取り上げる。女性への暴力が表面化してきた昨今では、暴力から逃れる方法、または暴力の加害者を訴える手段を説明してくれる書物は多くある。よって本稿では少し視点を変え、DV、ストーキングの両加害者に共通する特性から、暴力の原因を探っていききたい。そして、具体的に現在の社会が孕む問題を提示し、私たちが暴力根絶に向けて出来ることを検討していききたい。

DV 加害者男性の特性

DV 加害者男性の特性のひとつに、性別役割意識、男性性へのこだわりを指摘することが出来る¹⁾。女性を自分に従属するものと認識し、自分の意には反する行動を取ると激しい暴力をもって「コントロール」もしくは「制裁」しようとする。男の暴力性は自然の本性だから、女は結局のところ男の力に屈服するものだと言われる。「女の快楽は男に従属すること」という性の信念が支配しているのだ。だから、女が男に反抗しようものなら男の暴力はなおのこと正当化されるし、「殴られるようなことをした」女の方が悪いことになるのだ²⁾。だれもが「暴力はふるったほうが悪い」と言う。しかし、女性に対する暴力だけは、逆に、被害者であるはずの女性のほうが責められる暴力として特別な位置を与えられてきた。挑発した、反抗した、普段から身持ちが悪いなど、被害者の女性の「落ち度」が詮索されるだけで終わらず、「男に暴力をふるわせるような女」のレッテルが貼られて社会的非難を浴びることになる³⁾。男性は、「男は女より強い立場に立ち、女を「コントロール」「統制」する存在でいなければならない」というような既存の性別役割意識、男性性への強いこだわりから、激しい暴力でもって女性を自分の言いなりにし、自己の男性性へのこだわりを満足させるのである。

そして性別役割意識と並んでDV 加害者男性の特性の2つめに、暴力依存症・嗜癖（アディクション）の問題が挙げられる。「嗜癖」（アディクション）とは、脅迫的行動のひとつである⁴⁾。依存症と嗜癖。心理臨床の立場では、この二つに明確な違いはないが、あえて違いをいうならば、依存症はどちらかといえば状態を指し、嗜癖とはその行動面に重点を置いた表現である⁵⁾。また嗜癖は、近年盛んに議論されているアダルト・チルドレンが呈する症状のひとつとしてよく知られている⁶⁾。アダルト・チルドレンと嗜癖の関係については後述する。嗜癖は大きく分けると、①物質嗜癖、②プロセス嗜癖、③関係嗜癖の3つに分かれる。物質嗜癖とは、ある物質を体内に摂取することによっておきる変化、快感に嗜癖していくことを指す。アルコール依存症、薬物依存症、ニコチン依存症などがあげられる。プロセス嗜癖とは、ある行為の始まりから終わりまでのプロセスに伴う快感に嗜癖することを指す。ギャンブル依存症、浪費癖、買い物依存症、繰り返される性的逸脱行動、盗癖などがあげられる。そして3つめの関

係嗜癪は、人との関係への嗜癪である。破滅的な異性との関係を繰り返したり、他者の問題に集中しその人生に侵入する快感への嗜癪である。共依存（co-dependency）ともいう⁷⁾。2つめのプロセス嗜癪のひとつに、繰り返される暴力がある。これは強いものから弱いもの、権力のある者から無い者へ向けられ、DVもこれに含まれる⁸⁾。この場合、「DV男性は暴力嗜癪という心の病理である」と分類することは、治療・カウンセリングによる変化の手立てがあることを意味する⁹⁾。またDVの原因を、その加害者が育った家族環境に求め探ることで、DV根絶の糸口を見つけることができるのだ。

ストーキング加害者男性の特性

DVもストーキングも加害者が男性で、女性が被害者になるケースが圧倒的に多いが、両者の間でもストーキングはその特徴が大変顕著である。このような背景を持つストーキングは男性から女性に対する支配とコントロールの犯罪であると言える。つきまといや監視などの数々のストーキング活動は、ストーカーが、自分の思い通りにならない相手を従わせて支配しようとする行為にほかならないからだ。あるストーカーは相手を暴力で支配しようとするが、相手を殺すことで目的をとげる場合もある。殺人は相手を完全に支配することなので、ストーカーがエスカレートすれば殺人事件にいたる危険がつけまとうのだ¹⁰⁾。相手が自分の方に振り向かないと怒りを覚え、執拗なつきまといやいやがらせで相手を恐怖に陥れ、「支配」しようとする。そこには男女間の社会的な力関係が働いており、男性は女性を支配、コントロールするものであり、女性はそれに服従するものであるという従来の性別役割、いわゆる男性性への固執が見られる。

ストーキング加害者の特性の2つめに、人格障害が挙げられる。ストーカーについては、精神分析医が独自の考察を加え、ストーカーを類型化・分析しているが、それらは精神分析医によってまちまちで一致していない。しかしそれをあえて煎じ詰めれば、ストーカーは精神病の人と、そうでない人に大別される、ということが出来る。そして精神病でないと診断される場合、精神分析医が共通して指摘しているのが、「境界性人格障害」なのである。ボーダーライン・パーソナリティ・ディスオーダー（境界性人格障害）は、21世紀の心の病といわれている。昨今、増加しつづけているボーダーライン人格障害とストーカーの心理は共通する部分が多い、というのが大方の現状での見解である¹¹⁾。ボーダーライン人格障害はアダルト・チルドレンのメンタリティとかなり似通っている。これらは言葉の言い換えに過ぎず、両者はほとんど同じことを意味しているのだ¹²⁾。ストーキングは一種の「嗜癪」であると位置付けることが出来る。そのなかでも人間関係における嗜癪、いわゆる関係嗜癪であるといえる¹³⁾。ストーカーの多くがボーダーライン人格障害であるということ、そしてそのボーダーライン人格障害がACとほとんど同じことを意味するという、それらを考え合わせると、執拗に繰り返されるストーキングが依存症・嗜癪であるということにも納得できる。

DV、ストーキング両加害者特性に見られる共通点

以上で述べてきたように、DVとストーキング両者の加害男性にはいくつかの共通点が見られる。まずその一つが性別役割意識、男性性への強い固執である。男性たちの「男らしさ」へのこだわりは、①優越志向、②所有志向、③権力志向の3つにまとめられる。「優越志向」とは、競争において勝利したい、他者に優越していたいという心理的傾向である。「所有志向」は、できるだけたくさんのモノを所有したい、しかもそれを自分のコントロールの下に置きたいという心理的傾向。「権力志向」は、自分の意志を他者に押し付けたいという心理的傾向である¹⁴⁾。こうした志向性は、女性という存在を相手にしたとき、より強烈に作用する。男は女に、知的にも肉体的にも精神的にも優越していなければ「一人前の男」ではない。男は女を自分のモノとして所有し、それをコントロールし管理することができなくては

「一人前の男」ではない。男は女に対して、自分の意志を押しつけることができなくては「一人前の男」とはいえない。これらの拘束は男たちの多くにとって、もしそれができないなら、しばしば「男として失格」の烙印を押されかねないほどに強力なものだ。男たちは、もし力関係において女達に敗れるなら、ときに自分のアイデンティティそのものが深く傷つけられたように感じてしまう¹⁵⁾。また、男性性への強いこだわりを持つ男性は、女性を自分より下位のものとしてみなす「女性嫌悪（ミソジニー）」の気持ちを持つ。こうした男性性への強いこだわりが、DV、ストーキングへと結びついていくのだ。

DV、ストーキング加害者男性の2つめの共通点は、それらが「嗜癪」の一種であることだ。嗜癪を症状のひとつとして呈するアダルト・チルドレン（以下、AC）とは、機能不全家族で育ち、その生育歴に親との関係で何らかの心の傷を負った人々のことをいう¹⁶⁾。日本における機能不全家族とは、主に親からの「愛情という名の支配」である。一見愛情豊かな正しい家庭に満ちた支配（コントロール）による苦しみが日本的ACを作り上げる。母親は子どもに対してありったけの愛情を注ぎ、出来る限りのことを尽くしてやるものだという「母性本能」のイデオロギーが、過剰なまでの過干渉を引き起こし、母子密着という家族の病理を生み出す。そのような一見「正しい」とみえる日本独特の家族関係で育った子どもは、母親の思い通りの人生を生きるのみで「自分の人生」を生きることが出来ず、ACとなって苦しむこととなる¹⁷⁾（ACと呼ばれる人々は、嗜癪行動に陥るケースが多いのだが、決して全てのACが暴力的であるわけではなく、「AC = 暴力加害者」と短絡的に結び付けてはならない）。

女性に対する暴力の根絶に向けて

上記のようなDV、ストーキング加害者男性の共通点から、「性別役割意識」「AC」という2つのキーワードが得られた。「女性に対する暴力は断じて許してはならない」「絶対に無くすべきである」、そう思っただけでも、自分が今生きているこの社会は、女性に対する暴力を容認する風潮にある。男女平等の社会になったと感じているのは男性のみであり、女性にとってはまだまだ生き難さを感じる世の中である。男性中心のこの社会では、社会の全ての規則が男性の視点から作られている。いわば、男性社会においては社会全体が「ミソジニー」なのである。私たちがそのような社会の装置に疑問を持つことなく、もしくは疑問に思ってもそれを仕方の無いことだと諦めて暮らしていくことは、女性に対する暴力を容認する社会に荷担してしまっていることになりはしないだろうか。私たち女性は、女性というだけで不条理な暴力の犠牲者となる危険に曝されるが、一方で、知らず知らずのうちに新たな暴力を生む温床を作り出してしまっている危険性をも持つ。私は暴力の被害者としての「女性」、そして“産む性”としての「女性」の視点から、性別役割意識と、現在の子育てのあり方、家族の持つ病理を暴力の要因として挙げた。性別役割意識は、男性には暴力的になることを許し、女性には暴力を受け入れ、耐えることを強いてきた。そのように男性にとって好都合な性別役割意識はまさに「男性社会の作った装置」そのものなのである。また女性は「産む性」であることを理由に一切の子育ての責任を負わされ、その結果母子密着の家族関係を作り出してしまふ。従来の家族のあり方もまた「男性社会の作った装置」の1つにすぎない。日本社会において、親密圏の可能性はこれまで非常に限られてきた。家族制度の法的・経済的保護によって、親密権があまりにも家族に還元されてきたことが問題なのである¹⁸⁾。よってこれからは親密圏を発展的に組み替えていく必要がある。これまで親密圏は「愛」を紐帯に「家族」のみに還元されてきた。その愛のイデオロギーが男性の過度な男性性固執を容認し、女性を「母性」の名のもとに苦しめ、さらにその間に生まれた子どもを親の支配によって苦しめてきた。また愛のイデオロギーによって、壮絶なまでのDVは見えない暴力とされ、隠蔽されてきた。家族こそが暴力の現場であり、家族こそが新たな暴力の形成の場である。「家族は安全」という神話はもう崩壊した。

私たちが当たり前と思って見過ごしている様々な社会の装置は、次々と新たな暴力を生み出していく。「性別役割意識」「AC」この2つのキーワードから、私は女性に対する暴力根絶に向けて「性別役割意識

の解体」と「新たな親密圏の創造」を提案する。女性が女性に生まれたという理由で不条理な暴力の被害者とならぬよう、そしてこの世から女性に対する暴力を根絶することを目指して。

〔注〕

- 1) 梶山寿子『女を殴る男たちDVは犯罪である』文芸春秋、1999年、93 96頁。
中村正『ドメスティック・バイオレンスと家族の病理』作品社、2001年、100 101頁。
- 2) 戒能民江『ドメスティック・バイオレンス』不磨書房、2002年、4頁。
- 3) 同上書、139頁。
- 4) 緒方明『アダルト・チルドレンと共依存』誠信書房、1996年、61頁。
- 5) 信田さよ子『共依存』文芸春秋、2000年、34頁。
- 6) 緒方明、前掲書、61頁。
- 7) 信田さよ子、前掲書、36～43頁。
- 8) 同上書、40頁。
- 9) 草柳和之『ドメスティック・バイオレンス』岩波書店、1999年、19頁。
- 10) 秋岡史『ストーカー犯罪』青木書店、2002年、44頁。
- 11) 岩下久美子『人はなぜストーカーになるのか』小学館、1997年、124頁。
- 12) 同上書、152頁。
- 13) 同上書、140～141頁。
- 14) 伊藤公雄『男性学入門』作品社、1996年、104頁。
- 15) 同上書、105～106頁。
- 16) 信田さよ子、前掲書、129頁。
- 17) 信田さよ子『愛情という名の支配』海竜社、1998年、20～21頁。
- 18) 斉藤純一、竹村和子「親密圏と公共圏のあいだ」『思想』2001年6号、岩波書店、21頁。

〔参考文献〕

・DV、ストーキング関連

- 秋岡史『ストーカー犯罪 被害者が語る実態と対策』青木書店、2002年。
岩下久美子『人はなぜストーカーになるのか』小学館、1997年。
「夫（恋人）からの暴力」調査会『ドメスティック・バイオレンス』有斐閣、1998年。
戒能民江『ドメスティック・バイオレンス 夫婦ケンカが犯罪になるとき』主婦と生活社。
戒能民江『ドメスティック・バイオレンス』不磨書房、2002年。
梶山寿子『女を殴る男たち DVは犯罪である』文芸春秋社、1999年。
草柳和之『ドメスティック・バイオレンス』岩波書店 1999年。
小早川明子『あなたがストーカーになる日』廣済堂出版、2001年。
財団法人女性のためのアジア平和国民基金『女性に対する暴力Q&A』2003年。
佐伯幸子『これで撃退！ストーカー最強対処術』有楽出版社、2002年。
豊田正義『DV - 殴らずにはいられない男たち』光文社、2001年。
内閣総理大臣官房男女共同参画室『男女間における暴力に関する調査』2000年。
内閣府男女共同参画局『配偶者からの暴力の加害者更正に関する調査研究』2003年。

中野麻美・飯野財『全図解 セクハラ・ストーカー・ちかん』自由国民社、2003年。
中村正『ドメスティック・バイオレンスと家族の病理』作品社、2001年。
日本弁護士連合会『家族、暴力、虐待の構図』読売新聞社、1998年。
福島章『ストーカーの心理学』PHP 研究所、1997年。
吉廣紀代子『僕が妻を殴るなんて』青木書店、2001年。
ドナルド・G・ダットン『なぜ、男は愛する妻を殴るのか?』作品社、2001年。
ティモシー・ペイネケ『レイプ・男からの発言』筑摩書房、1993年。

・フェミニズム・男性研究関連

伊藤公雄『男性学入門』作品社、1996年。
井上輝子、上野千鶴子、江原由美子『男性学』岩波書店、1995年。
上野千鶴子『差異の政治学』岩波書店、2002年。
金井淑子、細谷実『身体のエシックス/ポリティクス』ナカニシヤ出版、2002年。
かながわ女性ジャーナル19号『男にとって男女共同参画社会とは?』かながわ女性センター。
川人博、高橋祥友『サラリーマンの自殺』岩波ブックレットNo.493、1999年。
関智子『「男らしさ」の心理学 熟年離婚と少年犯罪の背景』裳華房、1998年。
多賀太『男性のジェンダー形成』東洋館出版社、2001年。
中村正夫『男たちの脱暴力』朝日新聞社、2003年。
メンズセンター編『「男らしさ」から「自分らしさ」へ』かもがわ出版、1996年。
メンズセンター編『男たちの「私」さがし』かもがわ出版、1997年。
ヴィルフリート・ヴィーク『男という病』三元社、1998年。

・AC、依存症、家族研究関連

秋山さと子『「家族」という名の幻想』双葉社、1990年。
大日向雅美『メディアにひそむ母性愛神話』草土文化、2003年。
緒方明『アダルト・チルドレンと共依存』誠信書房、1996年。
岸田秀『母性神話』新書館、1995年。
厚生省『平成10年度版 厚生白書』
斉藤学『「家族」という名の孤独』講談社、1995年。
斉藤学『「家族」はこわい』日本経済新聞社、1997年。
斉藤学『インナーマザーは支配する』新講社、1998年。
斉藤学、久田恵『子別れレッスン』学陽書房、1999年。
斉藤純一編『親密圏のポリティクス』ナカニシヤ出版、2003年。
斉藤純一『公共性』岩波書店、2000年。
佐藤紀子『新版・白雪姫コンプレックス』金子書房、1995年。
芹沢俊介『母という暴力』春秋社、2001年。
田中千穂子『ひきこもりの家族関係』講談社、2001年。
土井健郎『「甘え」の構造』弘文社、1971年。
土井健郎『「甘え」の周辺』弘文社、1987年。
土井健郎『「甘え」さまざま』弘文社、1988年。
西山明『アダルト・チルドレン』三五館、1995年。
西山明、信田さよ子『家族再生』小学館、2000年。
日本家族心理学会『子育て臨床の理論と実際』金子書房、2002年。

日本社会学会『社会学評論204』有斐閣、2001年。
日本社会学会『社会学評論213』有斐閣、2003年。
日本心理学会編集『21世紀の家族像』金子書房。
信田さよ子『コントロール・ドラマ』三五館、1997年。
信田さよ子『愛情という名の支配』海竜社、1998年。
信田さよ子『依存症』文芸春秋社、2000年。
信田さよ子『子供の生きづらさと親子関係』大月書房、2001年。
信田さよ子『脱常識の家族づくり』中央公論社、2001年。
信田さよ子『愛しすぎる家族が崩れるとき』岩波書店、2003年。
博報堂生活総合研究所『調査年報1998 連立家族』1998年。
福田あけみ・遠藤優子編『嗜癪問題と家族関係問題への専門的援助』ミネルヴァ書房、1998年。
山田和恵『今、おかあさんが危ない!』大和書房、1993年。
『思想』2001年第6号、岩波書店。
J・スウィガード『バッドマザーの神話』誠信書房、1995年。

18 - 19世紀のヘッジ・スクールにみるアイルランドの民衆教育

石 垣 里 枝 子

はじめに

本論文の目的は、第一に18 - 19世紀のアイルランドで広く民衆教育を担っていたヘッジ・スクールについて、その興隆の背景や全体像およびその時代の変容を捉えることにある。第二に、他の地域の民衆教育との比較や教育調査、人口調査といった一次史料による、より客観的な分析の視点を大切にしつつ、イギリスやヨーロッパ大陸との関係のなかにあったアイルランドの教育文化、民衆像を論じ、ヘッジ・スクールの再評価を試みることである。

構 成

はじめに

第1章 ヘッジ・スクールをどう捉えるか

- 1 ヘッジ・スクールの成立
- 2 ヘッジ・スクールとその時代 歴史的背景
- 3 19世紀はじめのヘッジ・スクールへの評価と国民学校制度
- 4 ヘッジ・スクールの研究動向 ダウリングからマクマナスへ

第2章 18世紀後半から19世紀前半のアイルランド民衆社会とヘッジ・スクール

- 1 アイルランドの社会変容 人口・経済・社会階層
- 2 ヘッジ・スクールとカトリック教会
- 3 子どもたちを通わせた親たちの心性
- 4 カリキュラム・教本・非宗派性

第3章 ヘッジ・スクールの教師像

- 1 描かれた教師像
- 2 教師の修業過程
- 3 教室のなかの教師 教育内容・教授法
- 4 教師の収入と共同体のなかでの役割
- 5 ヘッジ・スクール教師の具体像

第4章 マンスターのヘッジ・スクール

- 1 地域としてのマンスター
- 2 人口調査からみたマンスターの教育状況
- 3 19世紀前半の教育調査報告とマンスターのペイ・スクール
- 4 マンスターから大陸へ

おわりに

要 旨

第1章 ヘッジ・スクールをどう捉えるか

ヘッジ・スクールは、1695年から18世紀初頭の刑罰法によってカトリックの教育活動が制限されていくなかで、非合法の教育手段として徐々に定着していった。19世紀初頭、教育調査が行われた時代には

アイルランド全土に広がり、民衆の教育機関として重要な役割を担っていた。ヘッジ・スクールという名称は、垣根の陰に隠れて教師と子どもたちが集まって学校活動が行われたことに由来するが、18世紀後半からのカトリック救済法によってカトリックの教育が認められて以降、ペイ・スクールとも呼ばれるようになる。

ヘッジ・スクールは、政府や教育団体の管理、財政支援を受けることなく、親たちの教育への熱意と、親たちが支払った授業料によってのみ支えられていた。教師は公の養成や認可を受けた者ではなく、教育内容には古典も含まれ多様であった。

ヘッジ・スクールの時代のヨーロッパは激動を迎えていた。大陸カトリック諸国との対立を抱えていたイギリスは、アイルランドで多数派のカトリックを支配するため、宗派主義的政策を取り、刑罰法によりカトリックの権利を制限していった。しかし、アメリカ独立革命、フランス革命、アイルランド国内の反乱といった不安定要因は、イギリスに帝国維持政策のための非宗派主義への方向転換を促し、カトリック解放、イギリス・アイルランド連合王国成立、国民学校制度導入といった動きに帰結する。

連合王国成立前後、アイルランドの教育状況を調査した政府にとって、また、カトリック解放の動きのなかで、教育に大きな力を復権しようとしていたカトリック高位聖職者たちにとって、全土に広がっていたヘッジ・スクールは、不適格な教師による、雑多で劣った教育内容の、国民学校にとってかわられるべき存在であった。そのため、アイルランド独立以降のヘッジ・スクール研究は、有力な教育機関となりえなかったイギリス系の学校への批判や、当時の政府や教会のヘッジ・スクール批判に対する反論として展開されていった。そうしたなかで、キルディア・プレイス協会の教育活動の意義を認めようとしたP.J.ダウリングや、教師の反乱への関わりをより深く掘り下げ、教本資料の徹底的な分析によりヘッジ・スクールの教育内容にアプローチしたA.マクマナスは、より客観的な研究へ大きく貢献した。本論分では人口調査、教育調査の数値や当時の社会経済的状況、民衆社会の変化等を分析することによって、さらに客観的な考察を試みる。

第2章 18世紀後半から19世紀前半のアイルランド民衆社会とヘッジ・スクール

18世紀後半から大飢饉前の人口急増、1815年までは進展を示した経済成長は、ヘッジ・スクール増加の背景となった。イギリスとの関係も密接化し、商業教育および英語教育を求める声の増加、出版産業の発展等をもたらした。ヘッジ・スクールの普及と出版文化の拡大は識字率にも影響を与えたに違いない。さらに経済的変化やカトリック救済法による経済活動や専門職従事への制限の緩和は、カトリック中産層を成長させた。多くの民衆は貧しいまま取り残されたが、経済力を持った社会層が成長し、ヘッジ・スクールと親たち、教師たちのなかに入っていったのである。

刑罰法の厳しい時代にあっては、ヘッジ・スクールの教師と教区聖職者は協力関係にあった。しかし、18世紀後半、高位聖職者は教区学校の設立をはじめとするカトリック復興に財政的支援を獲得するため、また民衆教育により優位な位置を得るため、政府の国民学校導入の動きに歩み寄り、ヘッジ・スクールとその教師を批判する立場を明確にする。一方、人口増加にカトリック復興の動きは追いつかず、ヘッジ・スクールが民衆教育の中心的担い手となり、教会の教育活動の遅れを補うこととなった。

一方親たちの教育観はどうであったのか。当時の貧しい階層の収入は、例えばキルケニー州の事例でも、5人家族で概算年26ポンドである。最低限の生活必需品への支出を計算すると、残額はほとんどなく、たとえわずかな授業料であっても、捻出することは非常に困難だったことが伺える。しかしながら、学問の才能のある子どもに対しては、労働を免除し、良い服を与えてまで教育を受けさせようとした。このような人々の教育を求める心が、ヘッジ・スクールの存続させたことは否めない。多くの記録が、親の子どもへの愛情、子どもの教育を求める心を記録している。

親たちは教師の道徳性や人格の高潔さよりも、子どもをひきつける能力や実際に教えられる教授能力の高さを評価した。教室内では自由な雰囲気好まれ、また18世紀後半からの経済、商業活動の進展は、

簿記や測量法等実用的教科、英語教育を求める声を増加させた。いわゆる3Rだけではなく、より高等な教育を受けるための古典教育も求められていた。こうした教育内容、また使用された教本の範囲の広さ、多様性は、変化する時代を生き抜こうとする、また少しの社会的上昇であっても子どもにその機会を与えようとした民衆の志向を映し出している。さらにヘッジ・スクールのなかには利益主義を理由としながらも、宗派的混合教育を行っていた学校もあった。このことは親たちが教室内でさまざまな子どもたちが自由な雰囲気の中で雑多に学ぶことを認めていたことの反映であろう。

第3章 ヘッジ・スクールの教師像

絵画や小説のなかの教師像は、熱心な生徒たちに囲まれた教師、術学的で厳しい教師、貧しい階層の通った教室内の風景、大陸へ渡る教師、アイルランド語で教える教師等、アイルランドでのヘッジ・スクールに対する一般的なイメージを示している。

教師の修業過程はユニークである。学問の才能のある子どもは、「貧しい学生」としてアイルランド中を遍歴し、ヘッジ・スクールで学びながら教師としての学識を向上させた。ひとつの学校で学び終わると、その学生は教師と公開の学識試合を行った。遍歴学生の文化は中世ヨーロッパに長期にわたって存在し、また公開口述試験はフランスのコレージュの伝統であったことから、ヨーロッパ大陸との共通性が見出される。いずれにしても教師は仕事を奪われる可能性のある競争のなかに生き、教師として修業によって名声を得て、親の心をひきつけることが何よりも重要であった。

教えられた内容は3Rに加え、歴史、天文学、簿記、古典、占星術、測定法、勘定書、文法、ダンスから恋文の書き方までさまざまであった。教授のレベルを論ずることは難しいが、同時代のキルディア・ブレイス協会の学校より幅が広く、イギリスのデйм・スクールや寺子屋との共通性もある。これは親たちが求めた教育内容に柔軟に対応したことの結果であろう。教室内で、教師は子どもたちに取り囲まれ、それぞれの進度に合わせて課題を出したが、学びの方法は口述反復が中心であった。しかし教室内の巡視による生徒の観察や、褒賞によって学びの動機付けを行うなど、現代と共通の教師による工夫もあった。

教師の収入は少なく、一四半期に2シリング2ペンスから11シリングというわずかな額か、物納による授業料によるものであった。また、季節によって子どもたちの出席は減少し、収入は不安定であった。多くの教師が代書業、測量といった副業で収入を得たり、聖職者の補佐などの役割を担った。貧しくはあったが、教師は共同体のなかで、その学識から尊敬される立場にあったと考えられる。こうした教師像は、イギリスやフランスの民衆の教師像とも共通する特徴である。

数学者として名声の高かったジェームズ・バゴットは、ユナイテッド・アイリッシュメンやロバート・エメットの蜂起と関わり、その指導的地位にいた反逆の教師であった。また、ピーター・ガリガンは優れたアイルランド語学者であり、マニユスクリプトに教師としての学びの姿やアイルランド語への情熱が示されている。しかし彼は貧しさからプロテスタント系団体の学校でも教えざるを得なかった。ハンフリー・オサリバンはアイルランド語の保存に貢献した学者教師であっただけでなく、商人として成功し、経済力から地域の貧しい人々を助ける活動を行ったり、政治や自然、地域社会を観察し、記録を残した教養人であった。このように、ヘッジ・スクールの教師像はさまざまである。

第4章 マンスターのヘッジ・スクール

マンスターはアイルランドの4地方のなかで、コナハトと同様にカトリックの占める割合が高い地域であり、とくに多くの商業港を有し、大陸カトリック諸国への窓口であった。また、伝統的に優れたヘッジ・スクールの教師が多く存在した、あるいは古典教育が盛んであったと伝えられており、多くの貧しい遍歴学生がマンスターのヘッジ・スクールを目指したという。

人口調査報告によれば、マンスターは大飢饉以前には人口数、増加率とも高い数値を示している。ま

た同様にカトリックの割合の高かったコナハトを比較して、就学率は高い。(資料①)これは経済力の違いによるものと考えられるが、ペイ・スクール(ヘッジ・スクール)数が多かったマンスターでは、その教育的役割が大きかったと判断できよう。人口調査が示す識字率は、カトリックが多かった地方、マンスターとコナハトで低かったことを示すが、18世紀末から19世紀前半、識字率は上昇したことが推測され、この時期の学校の多くがペイ・スクールであったことから、識字率上昇に一定の役割を担ったと考えられる。

次に19世紀前半の教育調査が示すペイ・スクールの実態であるが、1825年調査報告によれば、マンスターは他の地方と比較して最もペイ・スクールに通う生徒が多く、学校全体に占めるペイ・スクールの割合も高かった。マンスターのペイ・スクールの教師の80%近くはカトリックであり、平均年収は23.5ポンドで、(資料②)下層農業労働者の年収とほぼ同様である。多くは男女共学で、またカトリック、プロテスタント双方の生徒を持つ学校は40.5%であったが、聖書教育実践は他の地方と比較して割合が低かった。1835年調査報告は、マンスターでヘッジ・スクールという名称のもとに運営された学校の減少を示すが、これは社会、経済的变化のなかで、ヘッジ・スクールが、3R以上の多様な科目を教え、中産層の子弟も通ったペイ・スクールと切り離されて分類されたことによるものと推測され、中産層の成長した地域であるマンスターにおけるヘッジ・スクールの変化を示している。

通歴学生がマンスターを目指したこと、マンスターでヘッジ・スクールが盛んであったこと、ヘッジ・スクールで古典教育が行われたことの背景として、マンスターの港が古くから大陸と商業的な関係を持ち、大陸へ渡る航路に大きな影響力を持つ商人層が存在したこと、古典は教会の言語であり、古くから商業取引や婚姻、移民等で大陸カトリック諸国と関係をもっていたアイルランドの人々にとって重要な言葉であったことがあげられる。古典の意義や大陸で従軍した人々の流れ、大陸のアイリッシュ・カレッジとアイルランドを結ぶネット・ワーク、学生の流れに関するさらなる考察は、ヘッジ・スクールが島と大陸に渡る地域を生きるための教育を提供したことを検証するための方法となるであろう。

おわりに

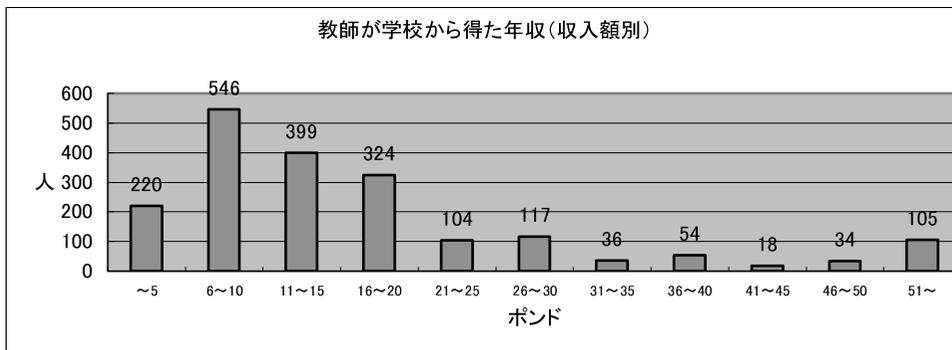
ヘッジ・スクールの教育内容や教師像は多様性あるものであった。アイルランド独自の学校であり、伝統文化を担い、またアイルランドの近代教育の礎として大きな役割を持ったことも間違いない。その一方でイギリスやフランス、スペインをはじめとする大陸の教育、文化、政治と大きな相互関係を持つものであり、その広がりのなかでヘッジ・スクールの意義をより客観的に捉えなおし、さらに教本や大陸との関係を深く考察していくことは、日本のアイルランド教育、文化、社会史研究にとって大きな意義を持つものである。

資料①人口に対する生徒数の割合

	生徒数 / 総人口	生徒数 / 5 ~ 15才人口
レンスター	6.5%	26.2%
コナハト	4.2%	15.9%
マンスター	6.7%	25.5%
アルスター	5.2%	20.5%

Abstract of Answers and Returns made pursuant to the Act for Taking an Account of the Population of Ireland [Census of 1821], 1824, (577.), xxii.411., p.379. および W.E. Vaughan, & A.J. Fitzpatrick (ed.), Irish historical statistics : population, 1821-1971, Royal Irish Academy, 1978, p.86の数値により算出し、作成。

資料②マンスタアの教師の年収



Second Report of the Commissioners of Irish Education Inquiry, 1826-27, (12), xii, 1, Appendix. 報告書の数値より計算。

日本の女性の地位向上における女性NGOの活動と国連

国連加盟前後を中心に

榎本春子

概要

近年、時代の潮流として「市民活動」が脚光を浴び、時代の閉塞感、行政の行き詰まりを打開する新しい動きとして、NGO/NPO活動が急速に広がり、日本においても1998年に特定非営利活動促進法（NPO法）が施行された。しかし約半世紀前の日本では政府の民間団体に対する理解はほとんどなく、国連、NGOという概念さえ一般的ではなかった。そのような時代、日本は1956年に、国際連合への加盟が承認され、国際社会へ復帰するが、その翌年からすぐに国連総会への日本政府団に女性NGOが参加している。こうして日本の女性の地位の向上は、国連の活動と共に推進され、特に当初より、女性NGOが政府代表団に加わることなどにより、多大かつ不可欠な役割を果たしてきた。この女性NGOこそが、その後の日本の女性の地位向上を切り開いていったと言っても過言ではない。その中心的な役割を担ったのが、「国連NGO国内婦人委員会」である。戦前より女性参政権運動などを繰り返していた日本の女性指導者達は、占領軍の女性政策を好機と捉えた。そして国際連合の特別協議的地位を取得した国際NGOとの関わりから、日本支部として戦後活動を再開した大学婦人協会、日本婦人法律家協会、日本婦人有権者同盟、日本基督教女子青年会（日本YWCA）、日本基督教婦人矯風会、日本婦人平和協会、日本看護協会の7団体により同委員会を構成した。

今から半世紀前、なぜ日本の女性NGOがこうした大役を担い得たのか。その活動の発端は何だったのか、誰の発案であったのか、現在以上に男尊女卑、お上意識の強い「官」主体の日本において、一体どのような経緯から生まれた組織団体であったのか。先行研究調査、主に各団体の戦後資料発掘などにより分析、その設立に至る経緯、目的、意義を検証した。

目次

はじめに

第1章 国連の女性の地位向上への取り組み

第1節 国連の主要機関とNGO協議制度

第2節 国連の女性政策の歴史的概観とその成果

第2章 日本の女性の地位と国連

第1節 日本の女性の地位向上 終戦直後を中心に

第2節 国連加盟時の日本の国連への関わり

第3章 米国の占領政策と女性の民主化

第1節 GHQの占領政策

第2節 女性政策の主軸エセル・ウィードと日本の女性たち

第3節 ルル・ホームズと大学婦人協会

第4節 憲法に女性の権利を加えたGHQ女性

第4章 女性NGOの原点 国連NGO国内婦人委員会

第1節 設立の経緯と目的

第2節 委員会を構成する女性NGO

第3節 国連へ参加した日本の女性たち おわりに

第1章では、まず国連の女性の地位向上への取り組みを概観し、国連の主要な機関の活動について取り上げた。NGOと深い関係がある国連経済社会理事会NGO協議制度の意義、役割、成果などについても考察した。さらに「女性の地位委員会」を中心に国連の活動とその成果を紹介し、NGOが果たす役割を論じた。1946年、第1回国連総会において、アメリカ合衆国政府国連代表、エレノア・ルーズベルトの提唱により、女性の地位委員会が設置された。国連が推進した様々な目標の中で、女性の権利を向上させ確固たるものにするための活動ほど多くの支持を得た例はこれまでにないであろう。国連の経済社会理事会の機能委員会の一つとして設置された同委員会は、世界の女性の地位を上げる事を唯一の目的として設置されたものであり、この委員会が調査研究、討議、決定した事が国連経済社会理事会に送られ、総会第3委員会、そして最後に国連総会本会議で決定され宣言となり、あるいは批准を必要とする条約となる。

国連は1975年を国際婦人年と指定し、メキシコシティで開かれた国際婦人年世界会議は、「平等・開発・平和」というテーマの下、多くの女性たちが結集した。国連とNGOの協力関係をさらに拡大し、その後の女性のための国連活動の基礎となったとされている。その後、1980年のコペンハーゲンでの第2回世界女性会議において、女性にとっての国際人権章典とも言える「女性差別撤廃条約」の署名が行われた。日本は女性NGOのロビー活動が奏功し、1985年に漸く批准し、世界で72番目の条約加盟国となった。国連による世界会議や、サミットの連続した開催、及び同時開催されたNGOフォーラムなどにおいて、その全てに女性の問題が取り上げられ、女性の地位向上の力を結集させる媒体となったといえる。1995年、国連史上最大規模の第4回世界女性会議が北京で開かれ、NGOフォーラムには47,000人のNGOメンバーが参加した。1985年の「男女雇用機会均等法」、1999年の「男女共同参画社会基本法」などの成立も、これらの一連の動きがその原動力とも言える。このように、女性の地位委員会は世界女性会議を担当し、女性問題のメインストリーム化に多大な貢献をし、各国の政策へと反映されていくのである。ニューヨークでの国連女性2000年会議では、ジェンダーに基づく差別を最終的に撤廃する事を掲げた成果文書が採択され、21世紀の最も重要な戦略の一つとされた。

第2章では、日本における女性の地位向上の歴史に目を向け、終戦直後、それまで女性参政権運動を繰り広げてきた指導者たちの動きを、市川房枝を中心に追った。終戦後わずか10日後に「戦後婦人対策委員会」を発足させ、占領軍に与えられる前に、自らの手で婦人参政権を獲得したいという女性たちの強い意志が伺えた。また市川の3年8ヶ月に及ぶ公職追放時における葛藤、また参政権獲得後の女性の地位向上にかける力強い復活の様子などを知る事ができた。市川は追放解除後、日米知的交流委員会の招待でアメリカに行き、1952年、ニューヨークでの国連総会最終日に「婦人の政治的権利についての条約」が第3委員会から回付され、反対なしの圧倒的多数で可決されたのを目の当たりにした。また、アメリカの女性運動の実態を間近に経験し、帰国後は日本の女性の地位向上への取り組みを一途に歩み続けた。

国連の女性の地位委員会に、日本は国連加盟以前の1950年から早くも積極的に参加し、労働省婦人少年局の高橋展子（後のデンマーク大使）と弁護士の高米愛が非公式オブザーバーとなった。国連加盟後の初選挙でトップ当選し委員国になり、その後2回を除き常に委員国に選ばれているのはその成果である。その後、代表は藤田たき（津田塾大学学長）、谷野せつ等が務めた。長期にわたり代表を務めた矢野は労働省婦人少年局長としては官の立場、同時に日本基督教女性青年会のメンバーとして、NGOの立場も理解していたと言える。

第3章では、日本の民主化と非軍事化を最大目的とした占領軍の日本改革政策において、特に女性への関わりが多かった占領軍・民間情報教育局(CI&E)について述べた。中心となった米国女性そしてCI&Eで働いた日本の女性達、および戦前からの女性指導者との関係性について検討した。日本で初めての女性大使となった高橋展子は当時CI&Eで、通訳などを担当していたが、他の6名の日本女性達と共に、水面下では次第に占領軍の女性政策担当者と日本の女性指導者達とを結びつけて行くという役割も担うようになった。

GHQ・CI&E所属のエセル・ウイードは全占領期7年近くを日本で過ごし、女性政策のほぼ全てに関わり、女性の地位向上に果たした貢献度は高かった。女子専門学校の大学昇格、男女共学制、さらに、NGOとしての大学婦人協会設立への多大な力となったルル・ホームズも、その大きな影響力が伺える。また、憲法作成時において、女性の権利条項を加えることを強く提唱した、ヘアテ、シロタ・ゴードンの存在も大きい。

占領軍の女性政策を担当した米女性たちは、公私にわたり民主化政策を進め、日本の女性リーダーの育成に貢献した。国を超えた、女性という共通項を基盤とした、献身的な関わりや助力により、日本の女性指導者たちは、次第に国内外へと視野を広げ、こうして成長した日本の有識女性たちが女性NGOの中核となり、また政府の要職に就くことにより、女性の地位の向上に力を注いだのである。1947年、労働省が新設され、その一局として日本の女性の地位を向上させる責任を委ねられた「労働省婦人少年局」が誕生するが、これは、日米双方の女性への圧力の末ようやく生み出されたものであった。占領軍及び日本の女性たちが互いに連携し、連絡を取り合い、ゆるやかな「女性政策同盟」を結び、その設立にかけた闘いは素晴らしいものであり、当時の日本政府の政策を知る上でも興味深いものであった。更に結果的に見ても、労働省婦人少年局が女性の地位向上に果たした役割は多大であり、労働省婦人少年局長となった女性達は、山川菊枝、藤田たき、高橋展子、赤松良子など、その後日本の女性の地位向上をリードしていった人々であった。

第4章では「国連NGO国内婦人委員会」の果たした役割について、その構成、及び構成団体の中でも国連との関わりが長いNGOについて、そして多大な貢献をした人物を中心に述べた。特に経済社会理事会協議資格を古くから得ていたYWCA及び日本YWCAの歴史、両者の関連性について、そして28年間という長い歳月を日本YWCA活動の発展につくしたエマ・カフマンについてもその足跡を辿った。また、国連に政府代表、あるいは政府代表代理として、実際に女性の地位委員会及び第3委員会に出席した藤田たき、緒方貞子、渡辺華子、中村道子らの証言などを通して、その成果を考えた。

結 論

約半世紀前の日本では政府の民間団体に対する理解がほとんどなく、「国連」「NGO」という言葉さえ一般的ではなかった。現在でも、日本においては「国連」といえば政府の集まりというイメージが強く、発展途上国や紛争解決のためのもので、日本は資金援助等により国際貢献するものという、「国外問題解決の国際組織」として遠い存在であるという観は否めない。まして現在以上に男尊女卑、お上意識が根強かった日本社会において、国連への女性登用への道を切り拓いていくことは困難を極めたであろう。その時代に国連の重要性を認識し、女性の地位向上のため、NGOとしての活動の道を開拓しようとした先駆者達が存在した事実と、その先見性は素晴らしい。「国連NGO国内婦人委員会」設立には、YWCAのカフマンから市川房枝への国連女性代表登用への助言、そして戦後、国連に協議的資格を持つ国際NGO日本支部として活動を再開していった女性NGOの結集が契機となった。

国連に協議的資格を持つ国際的NGOの一員として国連の場を中心に国際的な連携を深め、他方、国内的には国連総会や女性の地位委員会の日本政府代表団に参加するという両面性を持ちつづけた女性た

ちの英知は賞賛に値する。国連の政策協定の当初の段階から参加することの意義を十分に認識していた「国連NGO国内婦人委員会」の活動は、時代をリードする、ある面で選ばれた女性エリート達の活動であったとも言えよう。

あの時代、政府はなぜ女性NGOを受け入れたのか。「国連の意義」をどこまで把握していたのか。民主化と非軍事化を目標に占領を開始したアメリカの外圧がその要因の一つであったことは確かである。民主化路線を歩んでいる事を実証するためにも、国連という舞台に日本の女性を登場させることは「外を意識する」日本政府として必要であった。

現在活動する多くの女性NGO組織の原点として、「国連NGO国内婦人委員会」の役割は偉大であった。同委員会は国連総会政府代表団に女性NGOを代表として推薦する活動を続け、その活動は、日本の国連外交の特色ともいえる。1975年、国際婦人年には国連NGO国内婦人委員会が中心となり、全国組織のNGOなどに呼びかけ、41団体が中心となり「国際婦人年日本大会」を開催、また、「国際婦人年連絡会」を結成するなど、国連の提唱する行動計画、女性の地位に関する問題に常に取り組んできた。

国連NGO国内婦人委員会をたびたび訪れることで、同委員会の多くの歴史的資料を閲覧する機会に恵まれた。1975年以降、国際婦人年連絡会結成以後の資料については、市川房枝記念会出版『連帯と行動』作成の為、また時代的にも新しく資料整理がなされていた。しかし、残念なことにそれ以前の資料に関しては、逐次進めているということではあったが、特に終戦直後の資料に関しては、未整理のものが多く、公開されているものは非常に少なかった。いずれ同委員会の初期議事録資料等を閲覧する事により、女性の地位向上に果たした実際の功績をより詳しく明らかにする事ができればと希望している。市川房枝自ら、生前に「終戦による占領軍の婦人対策調査」を特に事業計画に加えていたが、進捗することなく他界され、これらも未整理状態である。

占領時、GHQ内にゆるやかな「女性同盟」ができ、CI&Eのウイードを中心に占領側のアメリカ女性と占領される側の日本女性との間に「女性」と言う共通項を基盤に、例えば労働省婦人少年局設立及び廃止反対運動など、女性の民主化へ向けてのつながりが生まれていったことも特筆に値する。GHQ・CI&E関係者文書資料はマイクロ化され、関係資料としてはエセル・ウイード、ルル・ホームズ、アイリーン・ドノバンなどがあつた。教育者としてCI&Eの一員に加わり、日本の教育改革、とくに女子専門学校の大学昇格、男女共学などを推進、日本大学婦人協会の設立に尽力したルル・ホームズ、国連NGO国内婦人委員会設立の発端になる助言を行ったYWCAのエマ・カフマンなど、多くの女性たちの国を超えた行動力、奉仕の精神に敬服する。

市川は生前「占領政策には功罪ともにあるが、こと婦人問題に関しては、その民主化への実現と言うことで大いに評価しなければならない」と言っていた。そして、自らアメリカ大使館やGHQに関係のあつた人々を尋ねては、この間の情報収集に歩いていたということである。本当の意味での自発的運動が起こりにくい日本で、女性たちを持続的にリードしていった市川の組織力は大きい。「国連NGO国内婦人委員会」から、1975年「国際婦人年連絡会」結成、その後も一途に女性の地位向上へ向けての道を頑ななまでに歩んだ。

1928年、ホノルルでの第一回汎太平洋東南アジア婦人会議での初めての出会い以来、強い信頼関係を結んだ市川房枝、藤田たきは、共に多くの女性達と、時代を切り拓いていったと言える。藤田はNGOの女性という立場からは、婦人有権者同盟、大学婦人協会、YWCAにも関わり、また労働省婦人少年局長としても活躍し、その知性で市川を支えた。第1回の国連総会に女性NGO代表として選出され、その大役を果たし、抜群の語学力と、その人間性で多くの人との繋がりを持ち続け、国連総会には3度、女性の地位委員会へは7回出席とその貢献度は高かった。国連NGO国内婦人委員会により推薦され、国連に参加した女性達は高橋展子、緒方貞子、久米愛、伊東すみ子、谷野せつと、そうそうたるメンバーが続くが、国連の掲げる理想と日本の現実との乖離に苦悩しながらも、多くの女性NGOをリードするとともに、少しずつ、そして確実に時代を変えていった。

松井やよりの遺作となった『愛と怒り闘う勇氣』にこんな一節があった。「行動して欲しいということ。行動することが日本ではなかなかできにくい。女性の講座をやると、みな本当に熱心に勉強する。ある意味では日本の女性というのはとても勉強熱心で、学習が好きで真面目である。けれども、学んだことをそのまま墓場に持って行ってしまったら、一体何のために学ぶのか。学んだことを生かして行動できるのか」

現在では、情報技術（IT）の発展による変化は大きく、女性運動としてのNGOの活動の形態、組織のあり方も当然異なってきた。世界各国で、多くの女性達が瞬時に情報を交換することが可能となり、連携の輪を広めている。「種を蒔き肥料を培うのが私たちの仕事、収穫は後から来たものがする」と市川が1934年『婦選』に書いたように、連帯と行動はこれからも続いていくであろう。

第 3 部 研究報告

カナダ先住民の虚像と実像

秋吉啓子

はじめに

多民族国家カナダにおける先住民人口は3パーセントほどで、決して多い数ではない。しかし、かつて「滅びゆく民族」と考えられていた人々が近年はむしろ増加傾向にあり、現在その数はおよそ100万人、アメリカやオーストラリアの先住民比率よりも高いと報告されている¹⁾。政府の広報活動の中で先住民のことが積極的に取り入れられ、各地の博物館でその歴史が紹介され、また、先住民の議員の活躍が報道されるなどの事象からは、その立場が以前より好転しているとの見方もできよう。

しかし、カナダ先住民の歴史・現在の立場を知ろうと様々な情報・文献をたどっていくと、1867年建国という若い国家カナダの中で、先住民が置かれてきた特異な状況が浮かび上がってくる。過去から現在に至るまで、先住民はヨーロッパ系カナダ人から、あるときは侮蔑・敵意を持って、また、あるときは敬意・好感を持って捉えられてきたが、そのいずれもが、実態とはかけ離れたイメージであったり、固定観念から生まれた印象である場合が多い。そして非先住民が先住民について語る時、その姿勢が先住民に好意的で彼らに寄り添ったものであるとしても、そこには「他者イメージ」が付きまとう。また往々にしてヨーロッパ系が先住民よりも優位な立場を獲得しているという事実が前提となっている。

エドワード・W・サイドは『オリエンタリズム』の中でヨーロッパ人にとってのオリエンを歴大な文献・事例をもとに考察しているが、そこで語られるオリエン（東洋）はヨーロッパ人にとっての「他者」であり、西欧が常に優位にあるという意識に基づいた自分たちの「想像」の中の存在である。序説の中で、サイドは次のように述べている。

オリエンタリズムは、依拠すべき戦略として、融通無碍に優越的位置を制することを常道としていた。そのため、西洋人は東洋とのありとあらゆる可能な関係系列のなかで、常に相手に対する優位を保持することができた。(中略) 東洋に関する知識の概括的見出し語のもとに、また18世紀末以来の東洋に対する西洋の覇権の傘の下で、アカデミーにおける研究、博物館の展示、植民地省の再編、人類と宇宙に関する人類学的・生物学的・言語学的・人種的・歴史的命題の理論的解説、開発・革命・文化的パーソナリティー・民族的または宗教的特質に関する経済学的・社会学的理論の実例など、これらもろもろのいずれにも適合するひとつの複合体としてのオリエンが出現した。さらに、想像力がオリエン的事物を吟味する場合には、多少なりとも排他的に統治者たるべき西洋の至上性の意識を土台としていた。そこでの西洋の揺るぎなき中心性の内側から、オリエンタルな世界が出現したのである²⁾。

カナダ先住民の置かれてきた状況を考えてとき、サイドの語る西洋人をヨーロッパ系カナダ人に、オリエンをカナダ先住民に読みかえてみると、その関係性にかなりの部分で符合する点があることに気づく。

もちろんカナダにおける先住民の捉えかたは様々であり、ヨーロッパ系との関係を上下で括ることは適切ではない。移民国家における植民者側の心情が複雑であり、自らのアイデンティティを先住民に求める例もあることをベネディクト・アンダーソンは『想像の共同体』の中で述べている。

スペイン語を話すメスティソのメキシコ人は、かれらの先祖を、カスティリア人征服者にではなく、なかば消滅したアステカ人、マヤ人、トルテック人、サボテック人にたどる。ウルグアイの革命的愛国者たち(トゥバマーロス)はかれら自身クレオールであるにもかかわらず、クレオールの圧制に対して立ち上がり、1781年、言語に絶する拷問のすえに死んだ最後の偉大な原住民反逆者、トゥバック・アマルーの名をとった。これらすべての愛着の対象が「想像された」ものであること

匿名の、顔のないタガログ人同胞、皆殺しにされた部族、母なるロシア、タナ・アイル これは、あるいは矛盾したことのようにみえるかもしれない。しかし、アモール・パトリアエ（祖国への愛）は、この点で他の愛と異なるわけではなく、愛にはいつも、どこかたわいない想像力がはたらいている³⁾。

注目すべきは、ここでもまた、対象になっているのが「想像」の産物であることだ。敵意を持つ場合も、愛着を持つ場合も、人間が「他者」を考えるととき実像とは別の「イメージ」を抱いてしまうのは避けがたいことなのだろう。

カナダ先住民が住んでいる地域は、文明博物館（Canadian Museum of Civilization）の資料によると、オンタリオ州の22パーセント（先住民のうちこの州に住んでいる人の割合）を筆頭にカナダ各地に広がっている⁴⁾。先住民の多くがカナダの北方地域に居住しているという見方があるが、実数を見るとそうとは言えないことが分かる。しかし、先住民を北方と結びつけて考えることが多いのも事実で、実際、北方準州の人口に占める先住民の割合を見ると、南の10州に比べ、遥かにその比率は高い。3つの準州はいずれも総人口が5万人に満たないが、先住民の州人口に占める割合は、ユーコンが25パーセント、ノースウェストが48パーセント、ヌナブトが80パーセントである⁵⁾。また、北方地域は広大な自然が残されている地域で、そこに生息する動物と、過去において狩猟生活をしてきた先住民が、つながりを持って語られることで、北方地域における先住民というイメージが強まったとも言えよう。

実像とは別の先住民の「イメージ」はどのようにして生まれ人々の意識の中に定着していったのか、都会に住む人たちの北方地域に対する謎めいたあるいはロマンチックな印象は実際とはかけ離れたものなのか、さらに、多文化主義を標榜するカナダ社会において先住民の人々が固定観念から解放され自由を享受できる道は開かれていくのか。修士論文の作成に当たっては、以上の疑問点を念頭に置きながら文献・資料を読み解き、答えに近づく試みをしていきたいと考えた。本稿は論文の一部を構成し、カナダ先住民の虚像が作り上げられていった過程を検証したものである。

1. 呼称に見られる混乱と決意

「コロンブスのアメリカ発見」という表現が不適切だとされ「アメリカ到達」に改められるようになって久しい。周知のようにアメリカ大陸には何千年も前から人々が住んでいたものであり、1492年に「発見」されたのではないし、先住民を「インディアン」と呼ぶのは誤りであるとの認識が一般的になっている。

カナダにおいても長い間、ヨーロッパ人の入植以前から住んでいた人たちが「インディアン」と呼ばれてきたが、現在はその表現を改める流れが大勢となっている。しかし、新たな名称として認められているものが何かとなると、公的な場所における表示・研究書・文献などを見ても統一されていない。法律上の用語にしても、「登録インディアン（registered Indian）」の名称は現在も使われており、政府機関としての「インディアン問題および北方開発省（Department of Indian Affairs and Northern Development）」も存在する。先住民自身が、自ら「インディアン」と名乗る場合も少なくない。ただし、先住民以外の人々が現在の先住民について語るときは、「インディアン」以外の名称を用いるのが一般的である。いずれにせよ、統一的な呼び名がないため、場面により様々に表現されているのが現状である。そして先住民の研究者が自説を展開する際は、前置きとして呼称についての説明をしている例が多い。説明の中で著者自身の先住民に対する姿勢・問題意識を提示しているとも言えるのである。エドワード・ヘディカンは著書『先住民問題の理解（*Understanding Aboriginal Issues*）』の序論で次のように述べている。

先住民（Native people）を指す様々な呼び名が大変な混乱と誤解を招いてきたことは多くの人の知るところである。従ってまずこのことについてはっきりさせておくのが本論の始めにあたり有用であろう。本書の中で、私は広い意味の先住民に対してアボリジナル（Aboriginal）という言葉を使う

ことにした。1982年憲法第35項には次のような記載がある。「この法において『カナダの先住民 (aboriginal peoples of Canada)』に含まれるのはカナダのインディアン、イヌイト、メティスである。」私の用法はこれと少し異なり大文字で始まるアボリジナルである。この言葉は形容詞として用いられることが多く大文字の記述は一般的ではない。しかし、私はアボリジナルの人々の願い、民族のアイデンティティに敬意を払って大文字を使うことにした⁶⁾。

呼称に対する著者の思い入れと気の使い方がよく表れている一節であるが、ヘディカンにはさらにオックスフォード辞典のアボリジナルの説明を引用しこの語の正当性を主張している。オックスフォード辞典に載っているアボリジナルの記述は「歴史の黎明期から、あるいは、植民者の到着以前から土地に住み続けてきた」となる。ヘディカンはこの意味するところは憲法法の内容ともよく適合していると述べている。一方ダニエル・フランシスは『想像上のインディアン (*The Imaginary Indian*)』の序論でこう書いている。

先住アメリカ人 (indigenous Americans) に対する正しい用語に関しては、近年多くの議論がなされている。インディアンと呼ばれることに異議を唱える人もいれば、唱えない人もいる。インディアンに代わる用語としては、アボリジナル (aboriginals)、ネイティブ (Natives)、アメリンディアン (Amerindians)、ファースト・ネーションズ (First Nations) などがあり、他にも私の知らない表現があるであろう。本書において私は、非先住民 (non-Natives) が先住民 (Native people) に対して抱くイメージを語る場合はインディアン、現実の先住民 (Native people or aboriginals) に言及する場合はネイティブ (Natives) と呼ぶことにする。同様に非先住民の呼称もやっかいである。インディアンに対応する言葉としては白人 (White) が便利な言葉だが、意味が限定的なことも確かである。多文化主義の現在、ヨーロッパ系カナダ人 (Euro-Canadian) という表現も用いられるが、何ともぎこちない用語である。私がこれらの言葉を使うことを読者の方々にはご容赦いただきたい⁷⁾。

フランシスも先住民の呼称にかなり神経を使っていることが窺える。因みにこの2冊の研究書が出版された時期は、1995年と1992年である。これに遡ること10年ほど前に先住民の歴史と現状についての本『カナダ・インディアンの諸部族 (*Indian Peoples of Canada*)』がパーマー・パターソンによって書かれ、1982年に出版されているが、本のタイトルがそうであるように、特にこだわることなく先住民についての記述でインディアンという呼称を使っている。パターソンの場合は、先住民に関わる制度や立場に言及する際にむしろネイティブやアボリジナルという用語を使用している。例えば、「先住民の権利 (native rights)」や「先住民としての立場 (their aboriginal status)」などの表現が見られる⁸⁾。また、アラン・D・マクミランの著書『カナダの先住民とその文化 (*Native Peoples and Cultures of Canada*)』の初版が1988年に、改訂版が1995年に出ているが、初版の前書きの冒頭で著者は、「近年カナダのファースト・ネーションズに対する人々の意識は一段と高まっている」と述べ、改訂版の前書きでは、国勢調査による先住民の人口増加に言及し、「先住民 (aboriginal peoples)」「先住民人口 (aboriginal population)」といった用語を使っている⁹⁾。呼称の変化について即断はできないが、1980年代の様々な差別撤廃の潮流の中で、先住民への配慮といった視点から新たな呼称が求められてきたと言えそうである。

2. 「滅びゆく民族」と見なされた先住民

先住民に関わる史実を詳述することは本稿の目的ではないので、ごく簡単に歴史を概観すると、カナダ先住民とヨーロッパ人との接触は16世紀の毛皮交易から始まる。最初に進出したのはフランス人だが、後にイギリス人が勢力を伸ばし、1670年にイギリスは毛皮交易のための独占的特許会社であるハドソン湾会社を設立、以後、北方地域に住んでいた先住民から毛皮を獲得、先住民は生活用品や狩猟に役立つ道具などを入手するようになる。ヨーロッパ人の入植は年を追って増え、1867年にカナダ連邦成立、鉄道建設も進み、急速に近代化されていくことになる。

移民国家カナダが発展するにしたがい、先住民は必然的に少数民族として周辺化されていく。その過程で先住民は様々な形で研究、小説、芸術、さらにはエンターテインメントの対象となってきた。その目的も学問的関心によるものから商業的野心によるものまで種々雑多であるが、いずれの分野においても、「インディアンは絶滅するもの」という共通の捉え方が見受けられる。マクミランは、1932年に発行されたダイヤモンド・ジェネスの『カナダのインディアン (The Indians of Canada)』が先住民の伝統的生活様式を記した優れた本だと評しながら、ジェネスが先住民を絶滅する運命にあると結論づけた点について、その予測は「幸いにも」間違いであったと述べている¹⁰⁾。ジェネスの考えでは、先住民は消滅するか、ヨーロッパ系カナダ文化に吸収されて20世紀の終わりにはほとんど生き残っていないことになるのである¹¹⁾。一方ヘディカンは、人類学の研究が陥りがちな問題点として、「意図しているにないにかかわらず、[[北米の人類学で] 伝えられるものが、インディアン文化は消滅するか、少なくとも、大々的に変貌してしまうという印象なのである」と述べている¹²⁾。さらに気をつけるべきこととして、「人類学は、保護者的な立場で先住民の利益を代弁しようとする一方、彼らを社会の主流派に適応させる道を探そうと試みたりする場合がある」と指摘している¹³⁾。実際には、「先住民は、昔とは変わりつつも新たな文化的バイタリティーをもって現在なおしっかり存在している¹⁴⁾」のである。

1845年に画家のポール・ケイン (Paul Kane) はトロントを出発、五大湖からマニトバを経て太平洋岸にいたるまで3年間にわたるスケッチ旅行を行った¹⁵⁾。ケインの目的は、「インディアンが消滅してしまう前にその伝統的慣習・風貌をキャンパスに保存しておく」ことであった¹⁶⁾。ケインの絵は、オタワの国立美術館・文明博物館などに展示されており、また、ほとんどの歴史の教科書に先住民の様子を示すため彼の絵が掲載されていて、カナダの人々にはなじみの深いものである。彼の作品は、インディアンのダンス、槍を持って立つ酋長、バッファローの狩りなど、当時の先住民が周りの景色とともに緻密に生き生きと描かれていて見ごたえがあるが、問題は、真に迫ったその描写が必ずしも真実ではないということである。旅行者として先住民を眺め、近い将来絶滅するだろうという意識を土台に、エキゾチックなものへの嗜好を満たす絵を作り出したのではないかという批判が、近年ケインに対して投げかけられている。「高貴な野蛮人 (noble savage)」を記録する¹⁷⁾ことを目指していたケインは、実際に目にした先住民に対して差別意識や嫌悪感を持ったにもかかわらず、作品では当時のビクトリア朝的趣味に合わせ、優雅でロマンチックな文明化されていないインディアンを描き出したのである¹⁸⁾。また、彼は先住民の言語は話さず、その習慣・文化についても表面的な理解しかしていなかったと指摘されている¹⁹⁾。1859年に出版されたケインの旅行記『北米インディアンと共に過ごした画家の放浪の旅 (Wanderings of an Artist among the Indians of North America)』はベストセラーとなり、その後4年間にフランス語、デンマーク語、ドイツ語に訳されたほどの人気を博したが、その中には次のような先住民に対する蔑視や差別的感情が表れた記述がある。

彼らの言語は野蛮で、舌や唇をきちんと使わない不快で耳障りな音をつばきを飛ばしながら発する。

また、彼らは不潔で、シラミと一緒に暮らしており、娯楽のひとつとして、お互いの頭からこの気味の悪い虫を取り合っている²⁰⁾。

自分が理解できない言語に対してこのような表現をすること自体、明らかな差別だが、他にもケインはアルコールに溺れる先住民への不快な思いを述べるなど、彼の先住民に対する眼差しは、彼らを「他者」として下に見るものであった。しかし、彼の描く絵の世界は、「白人と接触する以前の文明に汚されていないインディアンたち」でなければならず、ケインはたくさんのスケッチをもとに旅行の後、次々と人々に感銘を与える作品を生み出したのである。したがって後年、彼の作品のいくつかが全くの作り物であったことが判明したのも不思議なことではない。インディアンの母子を描いた『フラットヘッドの母と子 (Flathead Woman and Child)』はチヌック族の子供のスケッチとカウリ族の大人の女性のスケッチをひとつの絵にまとめたもので、当時のブルジョワ階級が親子の絆や情愛を重視するようになった風潮を反映しているとヘザー・ドーキンズは指摘している²¹⁾。また、彼の最も有名な絵画のひとつである『ア

シニボイン族のバッファロー狩り (Assiniboine Hunting Buffalo)』は実際には、馬に乗って牡牛を追う二人の若者を彫ったイタリアの版画をもとに描いたものだったのである²²⁾。

ドーキングズは「ポール・ケインの作品はその帝国主義的かつ人種差別的言説がある以上公式の伝記的レベルで捉えることはできない」と厳しい指摘をしているが²³⁾、先住民を描いた他の画家や、彼らと関わった様々な人たちが、その立場のいかに問わず「滅びゆく民族」という認識を持っていたことは確かである。実際、18世紀後半から20世紀前半にかけて、天然痘、インフルエンザ、結核など、白人が持ち込んだ病気が先住民の間で何度か大流行し、多くの死者を出したこともあり²⁴⁾、第二次世界大戦まで先住民のカナダ人は「インディアンは消え行く運命」だと考えていたのである。ケイン以降、時代が進むと「滅びゆくインディアン」のイメージは、消えていくものを前に何もできないという罪の意識を持つセンチメンタリストにアピールする一方、政府の政策を恥ずべきものとして糾弾する批評家をカブつけた。また、人種差別主義者にとっては、自分たちの生活様式の優位性を再確認する格好の材料となった²⁵⁾。いずれにしても、対象を「滅びゆくもの」英語での表現では、vanishing、disappearing、dying out、さらにはextinction と定義したこと自体に、植民者的意識が潜んでいたことは否定できないだろう。

現実の先住民は消えてしまうどころか、第一次世界大戦を契機に、政治活動にも積極的に関わるようになった。大戦後、カナダで最初の先住民の組織、カナダインディアン連盟 (the League of Indians of Canada) が設立され²⁶⁾、政府に対し、教育の改善、狩猟や漁業の権利確保、土地の請求など様々な要求を突きつける活動を始めたのである。しかし、ステレオタイプなインディアンのイメージは簡単に払拭されるものではなかった。

3 . エンターテインメントに現れた先住民

アメリカで西部劇が一世を風靡するずっと以前に、人々を喜ばせたカウボーイとインディアンのショーがあった。そのショーを企画したのが、バッファロー・ビル (Buffalo Bill) と呼ばれたウィリアム・F・コーディ (William F. Cody) である。コーディは1846年生まれのアメリカ人で、南北戦争に参加、その後鉄道建設の工夫に肉を調達するため歴大な数のバッファローを殺し、その経歴からバッファロー・ビルと呼ばれるようになった人物である。また、実際に先住民と闘い、イエロー・ヘアというシャイアン族の酋長を殺した経歴を持つ。大衆小説家がコーディをモデルにした本を書いたことから有名になり、彼はこれを利用してショーを披露することを思いつく。ちょうどその頃1885年に、スー族最後の酋長と言われたシッティング・ブル (Sitting Bull) がカナダにやって来てコーディのショーに参加することになる。

バッファロー・ビルのワイルド・ウェスト・ショー (Buffalo Bill's Wild West Show) と銘打ったこの見世物は大変大がかりなもので、トロントでの興行を行うために、18両の列車を使い、150人のカウボーイ、インディアン、メキシコ人、それに何頭もの動物を運んだとグローブ紙が伝えている²⁷⁾。さらに、ショーの会場に向かう一行の様子を「馬上のバッファロー・ビルはハンサムで格好よく、この興味深いパレードを一目見ようと沿道に集まった大観衆を熱狂させている」と記し、「このショーに登場する人々は、そのために訓練された俳優ではなく、ほとんどの人たちが実際の場面で経験したことを観客の前で再現するために集められたのだ」と「本物のインディアンやカウボーイ」が演じるワイルド・ウェスト・ショーを絶賛している。ショーは、馬の曲乗り、バッファロー狩り、インディアン・ダンス、競馬、早撃ちなど、いろいろな出し物を含んでいたが、一番の目玉は、バッファロー・ビル率いるカウボーイとシッティング・ブルたちインディアンの戦闘場面だった。また、宣伝によると実際にブラックヒルズで使われていた駅馬車を使い、インディアンから襲撃された人々をバッファロー・ビルたちカウボーイが救い出すという筋書きの活劇が演じられた。スー族がカスター率いる騎兵隊を全滅させたことで有名

な「リトルビッグホーンの戦い」も題材に使い、戦いが終わった後の舞台にバッファロー・ビルが登場し、「遅すぎたか！」と嘆くシーンも演出されたのである²⁸⁾。

いったんはスー族の居留地として保証したブラックヒルズの地を、金鉱が見つかったために取り戻そうとした合衆国側の策略がきっかけで勃発したのが「リトルビッグホーンの戦い」であり、シッティング・ブルはこの戦闘に勝利したものの、結局その後の掃討戦に屈し、ブラックヒルズの地を追われたのである²⁹⁾。その彼がカナダでのワイルド・ウェスト・ショーで悪役側のインディアンを演じることになるのだが、そのことに抵抗感はなかったのか気になるところである。また彼以外にも大勢の先住民がショーに加わっているが、その理由は様々だったようである。ひとつには、たとえ観客の前での演技にせよ、自分たちが誇りを持って行ってきた伝統的な技、馬乗りや槍投げができるいい機会であると受け入れたこと。また、居留地から一時的にせよ厄介払いをしようとした政府職員に参加を促されたこと。そして当然ながら、支払われるお金に惹かれたことがある³⁰⁾。先住民を巻き込んでこのショーはかなりの期間人気を保ち、ニューヨーク公演を始め、ロンドンなどヨーロッパへも遠征したが、当時のカナダの観客はこのショーをどんな思いで見っていたのだろうか。ワイルド・ウェスト・ショーを真似た企画も含め、このようなショーは第一次世界大戦頃まで行われ、一部は1930年代まで続いたが、観客側の受け取り方も時代と共に変わっていったと思われる。

シッティング・ブルがショーに加わった1885年夏は、政府に対し先住民を率いて「反乱」を起こし逮捕されたルイ・リエル (Louis Riel) が獄中にいた時期で、世の中は騒然としていた³¹⁾。人々にはショーの中でインディアンが制圧されるのを見て安心したい気持ちがあり、それが初期のワイルド・ウェスト・ショーの人気を高めていたと思われる。世紀が変わり、先住民の「脅威」がなくなるにつれ、人気もかげってくるが、この時期になると観客の気持ちもフロンティア消失に対するノスタルジアへと変化していった。いずれにしても、実生活で先住民との接点がないカナダ人は、生活人としての普通の先住民の姿を見ることはなく、演じられたインディアンのイメージが彼らの中に定着していったのである。

ジョン・ウェイン主演の『駅馬車』に代表されるハリウッドの西部劇は1960年頃まで何本も製作され隆盛を誇ったが、そこに登場する「インディアン」が白人側の固定観念で作り上げられた差別的なものであったということは、その後の共通認識となっている。偏見に対する反省を土台に以前とは違う視点での「新しい西部劇」が1990年以降作られるようになり、ケビン・コスナーの『ダンス・ウィズ・ウルブズ』はアカデミー作品賞・監督賞を獲得、多くの人々の注目を集めた。以前の西部劇が先住民を凶暴、残忍、野蛮なイメージに固定していたとすれば、新しい西部劇の先住民は自然を大切に知る知恵のある人々として描かれている。しかし、いずれの場合も、先住民は「過去」の人であり、「辺境」の地に住む文明から遠い存在である。映画は決して現実の先住民を描いてはいるのではなく、白人側の気分を反映した創作なのである。「獐猛な戦うインディアン」を見て文明人としての自分たちの優越性を味わうにせよ、「自然と共生するインディアン」を見て環境を大切に思う自分たちの意識の正当性を確認するにせよ、そこには、あとからやって来た植民者としての自分たちを正当化したい潜在意識が隠れていると言えよう。

4．有名になった先住民

演じられる先住民ではなく、先住民が人々の前で自らの言葉で語り、世間の注目や共感を集めた例として、ポーリン・ジョンソン (Pauline Johnson) が挙げられる。ジョンソンは詩人として活躍し、1961年の生誕100年には記念切手が発売されており、また、現在も子供たちが彼女の詩を学校で習うなど、カナダでは広く知られている³²⁾。

彼女はオンタリオ州のインディアン居留地で生まれた。父はモホーク族の酋長、母はイギリスのプリストル出身の白人女性で、この結婚はお互いの家族から大反対されたようである。母の影響で子供の頃

からイギリスの古典、特にロマン派の作家やシェイクスピアの作品に親しんでいたジョンソンは、10代後半から詩を書き始め、その作品がトロントの雑誌に掲載されたりしていたが、30歳までの彼女は無名の詩人だった³³⁾。ジョンソンの人生に大きな転機をもたらしたのは、1892年1月にトロントで催されたヤングリベラルズクラブでの詩の朗読会だった。会の主催者フランク・イェイ (Frank Yeigh) がジョンソンのクラスメートで彼女の詩を読んでいたこともあり、この夜の会への参加を依頼したのだが、その後の成り行きはふたりが予想もしていないものであった。ジョンソンが朗読したのは「インディアンの妻の嘆き (A Cry from an Indian Wife)」という詩で、1885年の「メティスの反乱」に加わった夫への思い、白人によって奪われた土地への嘆きが謳われたが、朗読が終わると聴衆から熱狂的な拍手が起こりアンコールを求められた。そこで改めて読んだ詩が、囚われの身となったモホーク族の強い意志と悲哀を謳う「レッドマンの死 (As Red Men Die)」であった。再び聴取は大喝采を送り、彼女はトロントの文学界に大旋風を巻き起こしたのである。グローブ紙の評者は、「かつてこの国を所有していた人々、我々の文明の前に力を失っていった人々の声が、その子孫であるこの才能ある洗練された柔らかな声の持ち主によって語られた」と述べている³⁴⁾。

この成功に触発されたイェイは、一緒に詩の会を開催しようとジョンソンに持ちかけ、以後「インディアン女流詩人」によるリサイタルが各地で開かれる。過密なスケジュールの中、ジョンソンはハリファックス、ニューファンドランドからプリティシュコロンビア、さらにはアメリカのボストン、ニューヨーク、そしてイギリスのロンドンへも足を伸ばす。批評家たちは彼女を賞賛し、ニューヨークサン紙は、「この大陸の文学界において類まれな人」と記し、他にも「カナダ文学におけるもっとも人気のある作家」「カナダ先住民の声」「最高の女流詩人」など多くの賛辞を浴びることになる。ジョンソン自身は、自分の人気が「インディアン」であることのエキゾチズムの上にあると感じ、「モホークのプリンセス」「インディアンの声」と呼ばれていることについて、「ヨーロッパ人」のヒロインが登場する物語などないのに、と語っている³⁵⁾。

ジョンソンが人々の人気を集めた理由として、ひとつには、前節でも述べた時代背景が考えられる。カナダの先住民は「平定」され、居留地に住むようになって、フロンティアはほぼ消滅、白人の側にセンチメンタルになる余裕が生まれてきた時期であった。もうひとつの理由は、ジョンソンが「白人好みのインディアン」だったことがある。パフォーマンスを行う際、彼女は2種類の衣装を用意していた³⁶⁾。前半ではイギリス風のイブニングドレスを着、後半でインディアン風の衣装を身に着けたのである。バックスキンのドレスにウサギの毛のアクセサリー、銀のブローチをつけ、ハンティングナイフを下げたジョンソンを人々は好んで「モホークのプリンセス」と呼んだ。彼女の語った言葉としてよく引用される「私の目標、私の喜び、私の誇りは、私自身の民族の栄光を歌うことです」という一文があるが、自分の目的をかなえ、自作の詩を発表するために、彼女は一種の妥協をして白人たちの期待に応えるパフォーマンスを続けたのである。当時、英語を読み書きする先住民は少なく、ほとんどの先住民は社会の片隅に追いやられており、白人たちとの接点もほとんどなかった。そのような時代に、目鼻立ちの整った上品な容貌の「インディアン」を人々は歓迎したのである。見方を変えれば、ジョンソンの生い立ちそのものが、「インディアン」と「白人」のハイブリッドで、彼女自身白人社会を肯定的に捉えていたところがあり、彼女のそのような面が広範な人気のもとになったとも言えよう。

「私の櫂が歌う歌 (The Song My Paddle Sings)」という詩は、カヌーと一体になって自然の中の川を下っていく様子が生き生きと描かれていて、現在でも子供たちの本に定番として載っている有名なものだが、自然と親しい関係を持っていた先住民としての側面が、ジョンソンの詩の人気を高めていたことも、見逃すことはできない。彼女は、1913年に病死するが、その後、自然との共生・自然保護の推進者として有名になった「インディアン」にグレイ・アウル (Grey Owl) がいる。彼は、1931年に『最後のフロンティアの男たち (Men of the Last Frontier)』という本を出版し、野生のままの自然 (wilderness) の大切さを訴える。オンタリオ州北部でわな猟師 (trapper) をしていたが、イロクワ族の妻の影響で自

然保護に情熱を傾けるようになったのだと、自分の出自を説明していたグレイ・アウルのこの本が出版されるや、「産業化が進む文明社会の恐るべき破壊力の前に野生空間はあつという間に消えようとしている」³⁷⁾という彼の警鐘は人々の心に強く響き、アメリカ、ヨーロッパ両方で大変な評判になる。作家活動の他、精力的に講演会を行ったグレイ・アウルは、イギリスでもたくさんの講演をこなし、バックingham宮殿でロイヤルファミリーを前に話す機会を与えられたほどだった。

バックスキンのジャケットを着てモカシンの靴を履き、黒い髪を二本の三つ編みにして後ろに垂らしていた彼の姿は、聴衆の目にはまさに「北米インディアン」を体現したのものとして映ったのである。ニューヨークタイムズ紙は「グレイ・アウルは縫いぐるみのインディアンではない、本物だ」と記した。また、イギリスで彼の本を出版したロバート・ディクソン (Lovat Dickson) は不況の時代にグレイ・アウルが人々に与えた印象を次のような賛辞として述べている。

森から届いたこの声はいつか我々を呪いから解き放ってくれた。ヒトラーのわめき散らす叫び声や、近代科学技術の執拗な騒音とは対照的に、グレイ・アウルの言葉は、我々の心に忘れられない魅惑的な世界を浮かび上がらせた 人間と動物が愛と信頼で結ばれて暮らしていた涼しい静かな場所を³⁸⁾。

わな猟師から自然主義者への変身を遂げた過程を描写した『野生の巡礼者 (Pilgrims of the Wild)』が出版されると、これもすぐにベストセラーとなった。カナダの行政府は、野生動物保護や国立公園運営にグレイ・アウルの知名度を利用しようと考え、公園部 (the Parks Branch) がビーバー保護のために活躍する彼の姿を映画に撮って、国中の学校・クラブ・団体に放映した。また、彼は「公園動物保護司 (caretaker of park animals)」として、マニトバ州のライディング・マウンテン国立公園で、後にサスカチュワン州のプリンス・アルバート国立公園で仕事をすることになり、彼の存在は、公園への観光客を集める牽引力になると同時に、人々の動物保護への関心を高める役割を果たしたのである。

1938年、グレイ・アウルが肺炎で亡くなってまもなく、人々は、彼が実際にはインディアンではなく、イギリスからの移民で本名はアーチャー・ベラニー (Archie Belaney) だったことを知らされる。家庭的に恵まれなかった彼は、森の中で何時間も野生動物を相手に過ごす孤独な少年時代を送っていた。北米先住民に興味を持ち、「インディアン」についての本を何冊も読んでいたこの少年は、1906年、17歳のときに、野生生活をする男 (wilderness man) になろうとイギリスからカナダへ渡ったのである。オンタリオ州北部で暮らし始めたベラニーは、木こりやわな猟師の技術を習得、髪を伸ばし、皮の服を着て、先住民女性と結婚し、「インディアン」になったのである。その後の歩みはグレイ・アウルとしての彼が自伝の中で書いているものと重なっていて、2度目の結婚相手となったイロクワ族の妻との生活の中で、ビーバー狩りをやめ、動物の味方になる決心をする。彼が、偽のインディアンであることに先住民は気づいていたが、自分たちのために行動し、政府役人とのパイプ役もしてくれる彼を支持していたようである。彼自身は、自然保護の活動をし、自分の主張を訴えていく上で「インディアン」であることは大いに助けになったので、髪を黒く染め、インディアンらしく振る舞うという芝居を最後まで続けたのだった。

グレイ・アウルが「偽者」だったことについては、その後の論調を見てもあまり問題にされていない。彼が働いていたプリンス・アルバート公園の長官J. A. ウッド (J. A. Wood) は、「私は彼がイングランド人だろうがアイルランド人だろうがスコットランド人だろうがあるいは黒人だろうが気にしない。彼は偉大な精神を持った偉大な男で、偉大な目標を持ち続けていた。」³⁹⁾と述べ、彼の活動を高く評価している。カナダ政府がホームページで紹介している「カナダのヒーロー」の中でも、グレイ・アウルは「偽りの役を演じていたが、彼の自然保護への思いは本物で、世界中の人々に影響を与えた」⁴⁰⁾と記されている。

では、先住民側から見た場合、グレイ・アウルの果たした役割はどう評価されるべきなのか。功罪ともにあるというのが、妥当なところかと思われる。彼の活動によって、先住民が何千年も前から「森林

の保護者」「動物の管理人」として自然との共生生活を送ってきたこと、先住民の知恵が自然破壊を食い止めるために役に立つということ、などが広く認知されるようになった。実際、狩猟生活をしてきた先住民は、獲物を獲り過ぎないように、必要以上に大人数で行う狩りは避け、適正な規模の狩猟でグループの構成員が生活していける分だけを確認するというやり方を長い間続けてきたのである。獲った動物については、すべての部位を無駄なく活用し、まさに省資源を実践してきた人々であった。また、植物にも精霊が宿っているとして敬う気持ちを持っていた先住民は、バスケットを作るために樹皮や木の根をとるような場合も、祈りを捧げたという⁴¹⁾。このように考えると、グレイ・アウルは、先住民の生き方が肯定的に捉えられるための推進役を果たしたと言えるのである。しかし、一方、彼の主張が、先住民を「森林」「荒野」「自然」「環境」という分野に限定して捉える固定観念を生み出したことも否めない。「インディアン」らしく見えるように、髪を黒く染め、肌をヘンナ染料で赤褐色に変え、羽根の髪飾りをつけて人々の前に現れたグレイ・アウルの「変装」⁴²⁾がステレオタイプな先住民のイメージを強めてしまった面もあるだろう。都会に住み、ごく普通のカナダ人として暮らそうとしている先住民にしてみれば、固定的なイメージで括られることが不愉快であることは想像に難くない。

ポーリン・ジョンソンもグレイ・アウルもヨーロッパ系カナダ人にとっては「他者」としてのインディアンであり、サイドの表現を借りれば、「西洋の揺るぎなき中心性の内側から」眺める対象物としての先住民であった。そしてふたりとも、結果的に、ヨーロッパ系の人たちの想像上のインディアン役を見事に演じたのである。

5 . 生活する先住民のメッセージ

ウィニペグに住む先住民親子の実体験をもとに1993年に製作された短編映画がある。『アンジェラのために (For Angela)』⁴³⁾というこの映画は、母親のロンダ・ゴードン (Rhonda Gordon) と小学生の娘アンジェラがバス停で白人の中学生3人と出会ったことから話が始まる。少年たちはふたりを見て、「ひとり、ふたり、3人のインディアン・・・ (One little, two little, three little Indians...)」とからかう調子で歌い始める。ふたりは少年たちを無視してバスに乗り込むが、同じバスに乗った少年のうちひとりには特に執拗で、「英語、話せるの」などと露骨に嫌がらせをする。バスの他の乗客たちは落ち着いた様子を示しながらも、特に反応はせず、ふたりも無言のまま通す。その夜、アンジェラは母親に何か言いたげな素振りを見せるが、家に仕事を持ち帰っていて忙しいロンダは、娘に注意を払う余裕はなく夜更けまで机に向かう。ふと気になって洗面所の方へ行った彼女は、そこにアンジェラの髪が散らばっているのに気づき愕然とする。アンジェラは後ろ髪を太い一本の三つ編みにしていたが、それを自分でぱさぱさ切り落としていたのである。アンジェラの辛い気持ちを痛感したロンダは、行動を起こす。娘の心を傷つけた少年を突き止めるため、娘と一緒に中学を訪れ、学校側の了解のもと、校内を見て回るのである。見つけられた少年は、最初、ふたりを知らないし見たこともないと、言い張るが、ロンダは娘に起こったことを冷静に少年に説明し、ようやく、少年も自分のしたことを認める。映画の最後にロンダ本人がアンジェラと共に登場し、いまだに存在する先住民に対する偏見について話をする。その中で、彼女は、現在でも先住民というと、「ビーズ (beads)」と「ブレイズ (braids) = 三つ編み」だけのイメージで見られる人が多いと語っている。

現在、人種差別的言動がいけないという認識は人々の間に浸透しているはずであるし、少なくとも常識的な大人が不適切な態度をとることはないと思われる。しかし、この映画のような出来事が実際に起こっていること、自分の気持ちを隠さずに行動しがちな未成年がこうした偏見を表に出したことを考え合わせると、多民族国家を誇っているカナダでもまだまだ人種差別意識が根深く存在していることが窺える。侮蔑的な偏見だけでなく、固定観念による偏見も当事者にとっては不快なものである。カナダのおみやげ物屋、民芸品店でよく見かけるものに、先住民の手によるものとして売られているビーズをあ

しらったバッグ、衣類、装飾品がある。もちろん、伝統的工芸を生業にしている先住民もいるわけで、その技術を継承し、製品として販売することはいいのだが、一部の先住民の職業が現代の一般的生活人としての先住民にまで敷衍されることは問題である。ゴードン母娘のようにごく普通の都会生活を送っている先住民にとって、少数民族であるがゆえに注がれるバイアスのかかった視線は不愉快極まりないものであろう。

一方、現在のカナダ先住民の中にも、自分たちの伝統的生活様式・技術が過去のものとして消えてしまう前に、それを保存し伝達していこうと願って、行動する人たちがいる。ドキュメンタリーフィルム『最後のムース皮の船 (The Last Mooseskin Boat)』⁴⁴⁾は、1982年にナハニの北方に住む先住民デネーが協力して船を作る様子を記録したものである。かつてこの地域のデネーは春になると、川を下って取引の場所に物資を運ぶため、身近な材料で毎年船を作っていた。ムースを獲り、剥いた皮を広げて干し、森の木で作った枠を取り付けて、頑丈な船を作り上げるのである。時代が移りこのような船もすたれてしまった折、伝統技術を記録に残そうと年長の先住民の指揮の下、若手の人たちが協力して「最後の船」を作ったのである。この船は現在イエローナイフのノーザン・ヘリテージ・センターに展示されているが、長さ13.1メートル、幅2.3メートルあり、かなり大きなものである。ここには他にも、樺の木で皮で作ったカヌーやカヤックなどが保管されている。このような自然のままの材料を使った船は1940年代以降、めっきり作られなくなったとのことで、今は博物館の展示品としてかろうじて昔の姿をとどめているのである。

このような現象はカナダ先住民の文化に限ったことではない。50年、100年前の生活・文化が変化し、消滅していくのは、当然のことである。その中であって、伝統を保存しようと努力する人もいれば、現在の生活をするのに一生懸命な人もいる。どんな民族であろうと、どこの出身者であろうと、それぞれが大切にしているもの、守りたいものは千差万別なのである。都会で暮らすゴードン親子は、偏見を排除し、自分たちの尊厳を大切に、生活を続けていきたいと願っているし、船を作ったデネーは、自分たちの伝統文化を保存したいと願い、記録をフィルムに収めたのである。船を作るときに彼らの服装は、ジーンズにシャツという作業に適したものであって、当然のことながら、「ヨーロッパ系」の人たちに見せるための伝統的な服など着ていない。多数派のヨーロッパ系カナダ人が、現代の先住民に対しても、過去のイメージを重ねて見ているとしたら、その視線は自分たちの外にいる「他者」に向けられたものであり、見ているつもりの対象は「想像された」ものなのである。先住民のメッセージに耳を傾け、「虚像」ではない「実像」の彼らに目を向けることが、今いっそう求められているのではないだろうか。

[注]

- 1) Alan D. McMillan, *Native Peoples and Cultures of Canada*, Vancouver/Toronto : Douglas & McIntyre, 1995, p. xi. および、日本カナダ学会・カナダ総領事館共催「カナダ講座」資料 (2004 / 8 / 27) による。
- 2) エドワード・W・サイド著、今沢紀子訳『オリエンタリズム』平凡社、1986年、8頁。
- 3) ベネディクト・アンダーソン著、白石さや・白石隆訳『増補 想像の共同体』NTT出版、1997年、250頁。
- 4) 筆者が2004年7月24日、当博物館で確認した展示資料による。
- 5) 人口構成、政府機関については次の文献とホームページを参考にした。
Hancock, Lyn. *Northwest Territories*. Toronto: Grolier Limited, 1993.
Government of Canada Official Website_Provinces and Territories,

www.canada.gc.ca/othergov/prov_e.html 2004/07/14

- 6) Edward J. Hedican, *Understanding Aboriginal Issues*, Toronto Buffalo London: University of Toronto Press, 1995, p. 5.
- 7) Daniel Francis, *The Imaginary Indian*, Vancouver: Arsenal Pulp Press, 1992, p. 9.
- 8) Palmer Patterson, *Indian Peoples of Canada*, Toronto: Grolier Limited, 1982, p. 79.
- 9) McMillan, *op. cit.*, p. xi.
- 10) *Ibid.*, p. x.
- 11) *Ibid.*, p. ix.
- 12) Hedican, *op. cit.*, p. 40.
- 13) *Ibid.*, p. 40.
- 14) *Ibid.*, p. 27.
- 15) Website of Modern American Poetry_Paul Kane By Diane Eaton and Sheila Urbanek, www.english.uniuc.edu/maps/poets/a_f/alexie/kane.htm 2004/09/19
- 16) Francis, *op. cit.*, p. 16.
- 17) *Ibid.*, p. 16.
- 18) Website of Modern American Poetry. *op. cit.*,_Kane and Imperialistic Discourse by Heather Dawkins.
- 19) Francis, *op. cit.*, p. 21.
- 20) Website of Modern American Poetry. *op. cit.*, Heather Dawkins.
- 21) *Ibid.*, p. 5.
- 22) Francis, *op. cit.*, p. 21.
- 23) Website of Modern American Poetry. *op. cit.*, Heather Dawkins.
- 24) 新保満 / ストラザーズ、シンサ・アン 『変貌する先住民社会と学校教育』御茶の水書房、1999年、24頁。
- 25) Francis, *op. cit.*, p. 57.
- 26) Patterson, *op. cit.*, p. 68.
- 27) Francis, *op. cit.*, p. 87.
- 28) *Ibid.*, p. 93.
- 29) NHKホームページ www.nhk.or.jp/daishizen/daisougen/fk_bh_01.htm 2004/09/04
- 30) Francis, *op. cit.*, p. 95.
- 31) 時代背景については、次の2文献を参考にした。
綾部恒雄編 『もっと知りたいカナダ』弘文堂、1989年。
Gillmor, Don. *Canada: A People's History*. Toronto: McClelland & Stewart Ltd, 2001.
- 32) Website of Voices from the Gaps, University of Minnesota_Emily Pauline Johnson, voices.cla.umn.edu/newsite/authors/JOHNSONemilypauline.htm 2004/09/22
- 33) *Ibid.*, p. 2.
- 34) Francis, *op. cit.*, p. 113.
- 35) *Ibid.*, p. 119.
- 36) Website of Voices from the Gaps, *op. cit.*
- 37) Francis, *op. cit.*, p. 133.
- 38) *Ibid.*, p. 131.
- 39) *Ibid.*, p. 138.
- 40) Website of Library and Archives Canada_Heroes of Lore and Yore, www.collectionscanada.ca/2/6/h6-230-e.html 2004/09/23

- 41) Patterson, *op. cit.*, pp. 14 18.
 42) Francis, *op. cit.*, pp. 136 147.
 43) Daniel Prouty (Writer/Co-director) , *For Angela*, National Film Board of Canada, 1993.
 44) Raymond Yakeleya (Director) , *The Last Mooseskin Boat*, National Film Board of Canada, 1982.

[参考文献・資料]

<邦文文献>

- 綾部恒雄編『もっと知りたいカナダ』弘文堂、1989年。
 アンダーソン、ベネディクト 白石さや/白石隆訳『増補 想像の共同体』NTT出版、1997年。
 サイド、エドワード・W. 板垣雄三/杉田英明監修、今沢紀子訳『オリエンタリズム』平凡社、1986年。
 新保満/ストラザーズ、シンサ・アン『変貌する先住民社会と学校教育』御茶の水書房、1999年。

<英文文献>

- Francis, Daniel. *The Imaginary Indian*. Vancouver: Arsenal Pulp Press, 1992.
 Gillmor, Don. *Canada: A People's History*. Toronto: McClelland & Stewart Ltd, 2001.
 Hancock, Lyn. *Northwest Territories*. Toronto: Grolier Limited, 1993.
 Hedican, Edward J. *Applied Anthropology in Canada: Understanding Aboriginal Issues*. Toronto Buffalo London: University of Toronto Press, 1995.
 McMillan, Alan D. *Native Peoples and Cultures of Canada*. Vancouver Toronto: Douglas & McIntyre, 1995.
 Patterson, Palmer. *Indian Peoples of Canada*. Toronto: Grolier Limited, 1982.

<邦文資料>

- 日本カナダ学会・カナダ総領事館共催「カナダ講座」資料、2004 / 08 / 27
 NHKホームページ www.nhk.or.jp/daishizen/daisougen/fk_bh_01.htm 2004/09/04

<英文資料>

- Government of Canada Official Website_Provinces and Territories,
www.canada.gc.ca/othergov/prov_e.html 2004/07/14
 Website of Modern American Poetry_Paul Kane By Diane Eaton and Sheila Urbanek,
www.english.uniuc.edu/maps/poets/a_f/alexie/kane.htm 2004/09/19
 Website of Voices from the Gaps, University of Minnesota_Emily Pauline Johnson,
voices.cla.umn.edu/newsite/authors/JOHNSONemilypauline.htm 2004/09/22
 Website of Library and Archives Canada_Heroes of Lore and Yore,
www.collectionscanada.ca/2/6/h6-230-e.html 2004/09/23

<英語ビデオ・フィルム>

- Prouty, Daniel (Writer/Co-director) *For Angela*, Ottawa:Natioual Board of Canada, 1993.
 Yakeleya, Raymond (Director) *The Last Mooseskin Boat*, Ottawa:National Film Board of Canada, 1991.

横浜とアジアの反帝国主義

鈴木 晶

1. 問題の所在

海禁政策の終了から40年、明治新政府になってから30年という段階で、日本は極東に位置しながら、世界的なネットワーク形成の影響を受け、急速な「近代化」を本格化した。そのネットワークの中の港町・横浜へ20世紀に入る直前に、明治時代初期のいわゆる西洋からの「お雇い外国人」とは異なり、アジア各地から欧米列強の帝国主義の圧力を受けて、独立運動、革命運動などの目的を持ってやって来た人々がいた。中国革命を目論む人々や変法派の人々、フィリピン、ヴェトナム、インド、ロシアからなど、この当時のそうしたアジアの人々が、「西洋の衝撃」からどのような圧力を受け、そこからどのような思想を持つに至ったのか。そしてなぜ日本に、横浜へやって来たのか。彼らは横浜でどのような動きをしたのか、またそこで彼らに対し、日本政府は、日本の人々はどのように対応したのか。

欧米列強の帝国主義競争はアジアにも植民地支配と、ある種の近代化をもたらした。この近代化の進行に伴って「アジアの日本」から「脱亜する日本」への転換点ともなったのが日露戦争期であり、この時期の情勢を横浜からの視点で見ると、そこには現代にも通ずる資本制社会の暴力性の問題点があらわれ、それはアジアの「近代」を考えることになるであろう。さらにそれは現在における日本のアジアでのあるべき姿を考えることにもつながる。本稿は修論の中で、「なぜ横浜にアジアの革命家、活動家たちが集まったのか」という考察を要約したものである。

2. なぜ横浜でアジアの革命家たちが活動したのか

欧米列強の帝国主義政策による清分割の動きは1840年からのアヘン戦争で本格化し、清は不平等条約である南京条約（1842年）により上海、寧波、福州など5カ所の開港や香港島割譲を、さらにアロー戦争の講和条約である北京条約（1860年、天津条約 / 1858年を含む）により、さらに数カ所の開港や公使北京駐在権などの追加条約を余儀なくされた。清国内では、欧米列強の進出を許した原因のひとつを政治腐敗とする見方が多く、平英団事件（1841年）、太平天国の乱（1851-1861年）などの民族運動的な動きが起こった。これらは、欧米列強の圧力もあって封じられたものの、国内では改革のための三つの動きが見られるようになった。まずは西洋の制度を導入して欧米列強の動きに対抗しようという政権側の理論である洋務派、立憲王政を掲げた変法（保皇）派、そして満州族から政権を取り戻し漢民族による国家統治によって近代国家を確立しようという革命派である。清国内でも西洋思想は急速な広がりを見せ、政権は西洋の方法論を導入することで政治腐敗や清国の弱体化に歯止めをかけ、政体を守ろうとした。しかしそれまでの政権温存は問題の解決にはならないと考えたのが、変法派（保皇派）の康有為（1858-1927）や梁啓超（1873-1929）である。彼らは自らの主張を光緒帝に伝えようとして政権側から様々な妨害にあったが、やがてその主張が光緒帝に伝わり政策化され、1898年戊戌変法が行われた。しかし変法間もない1899年、戊戌政変（西太后のクーデタ）により変法派は失脚してしまい、康・梁は日本に亡命を余儀なくされることになった。

一方、中国革命を実現しようとしていた孫文（1866-1925）は、1894年ハワイで興中会を結成して最初の革命を起こすが1895年、革命を失敗し亡命して横浜にやって来た。孫文はもともと日本を革命運動の拠点としようとは考えていなかったようだが、横浜での人的交流、特に宮崎滔天の働きかけから考えを変えて、日本を革命活動の拠点として考えるようになった。

梁啓超は、亡命直後の1898年12月、横浜で雑誌『清議報』を創刊した。そしてこれを舞台に政治改革の必要性を異国の地から訴えた。この日本亡命は、梁啓超の言論の質を変えたと言われる¹⁾。康有為の圧倒的な影響を受けながら、西洋書や西学書を手本に日本の研究者が書いた書物に精力的に目を通し、新たな知識と学問体系を貪欲に吸収し、世界の政体には、君主専制政体、君主立憲政体、民主立憲政体の三種類があるとして、中国の状況を君主専制政体とみなした。梁はその著書の影響力で、フランスの圧制下に苦しむヴェトナムの人々に、「今ヴェトナムが支配されているのは、国家のあり方の問題があるからである」という思想を芽生えさせたので、その彼の来浜はヴェトナムの革命運動の拠点を一時横浜に呼び込むこととなった。

一方、革命派の孫文は主に中国人の日本留学生と華僑社会の一部によって支えられ、横浜は革命派の活動拠点の一つになった。当初、東京在住の留学生たちは梁啓超の影響を受けていたが、清朝への幻滅や日本への失望から、革命派への支持が大きくなった。もともと当時は孫文の知名度は高くなかった。犬養毅の側近だった古島一雄は「つまり康はインテリゲンチヤだ、孫は革命をやると言ふやうな時世見だからして、支那の金持は孫なんていふものは嫌いだ。だから孫の最初振はぬのは当然だ・・・」²⁾と語っている。

また孫文は、香港で、宮崎兄弟の仲介でフィリピン革命のリーダーであるエミリオ・アギナルドと会談して、フィリピン革命の成功は中国革命の成功につながるし、その逆もありうると、相互に援助しあうことを約した。そこでアギナルドは、マリアノ・ポンセたちを横浜に送り、革命派の力を借りて武器調達を図った。このように革命派の動きはフィリピン独立運動を横浜に呼び込むこととなった。実際フィリピンへの武器輸送が失敗して、その後独立運動が失敗すると、そのために準備されていた残りの武器類は中国革命（惠州蜂起）に利用されることとなった（ただしこれは中村弥六の横領によって使用に至らず）。

資本制社会の「進化」形としての欧米列強の帝国主義支配、その中の清国分割は、梁啓超、孫文という人物を日本へ、横浜へと強引に送り出すとともに、ヴェトナム、フィリピンの独立運動などとのネットワークを横浜で形成することにつながった。ではどうして日本の中でも、横浜にこうしたアジアの革命家、運動家たちが集まってきたのかを考察していきたい。

a . 港湾都市・横浜

横浜にアジアの革命家、運動家たちが集まった理由の第一には香港、上海、神戸などに共通するような港湾都市であることである。船舶交通中心の時代には、最も利便を図ることができる場所であるといえる。華僑ネットワークを考えれば、アジアからの航路は華人人口の多いハワイ、ヴァンクーバー、サンフランシスコなどにもつながっている。また横浜は、首都東京近くの国際港湾であったことで、国家の保護も厚く、神戸港などはそれに比べると水をあげられていたという³⁾。これは首都東京のサブシティとしての役割である。この性格は開国当時も同様で、江戸幕府は1858年締結の修好通商条約（安政の五カ国条約）により五港を開港した際に、外国人が江戸になるべく近づく機会がないように神奈川（実際はさらに外国人を囲い込もうと横浜になった）を開港させた。第2次世界大戦後の連合国軍占領統治の本拠地が横浜に置かれたのも、首都東京への占領軍の影響を最小限に抑えたかったためである。

また、東京と横浜という微妙な距離は政府にとっても、要注意外国人を横浜に留め置くという面でメリットがあったようだ。例えば、宮崎滔天が孫文と知り合った後にこのような相談を受けている。孫文は、自分が英国から日本に来たのは、東京へ入って大いに画策をしたいと考えたからだが、「どういう訳か日本の政府は私の入京を許さぬ。改まった通告はないが、東京に入ろうとすると、必ず何かの故障が起こって、入京を妨げられ、どうしても、目的を達する事が出来ぬ」と述べたという⁴⁾。これを聞いて宮崎が可児長一に相談したところ、犬養毅との関係が築かれるようになり、孫文は上京が可能になった

という。こうした革命家を援助する政治家にとっても、横浜は「留め置き場」として利用価値のある都市だったと推測できる。宮崎滔天の半生記『三十三年の夢』には、犬養毅が「今度は官辺の係累なければ、その運動も自在なるを得べし」と孫文、康有為を横浜に転居させたことが触れられている。

b. アジア貿易ネットワークの中の日本

第二には、横浜がアジアの貿易ネットワークの中で、地理的に東端にあるという位置である。インド人の貿易ネットワークの東端は横浜であり、華僑の場合はハワイ、ヴァンクーバー、サンフランシスコといった場所とのネットワークも存在したが、太平洋を挟んだ距離があるため、やはりその関係はアジア間と比べては薄かったものと推察できる（ただし、梁啓超の『三十述』には「・・・冬、アメリカ実業界の同志より要請があり、これに応じた。・・・ハワイに立ち寄ったところ、当地の華僑商人2万余人から引き留められた・・・半年滞在・・・」とある⁵⁾）。また孫文はハワイに行っていた兄を頼って渡航し、そこで1894年に興中会を立ち上げているので、アジア間ほどではないだろうがネットワークはしっかりあったといえる。

また当時の日本貿易において、横浜港は生糸、北海道の海産物など輸出中心で、神戸港は繊維工業の原材料の輸入中心であった。さらに実際は輸入品の多くも横浜港を経由したものが多く、そのようなアジアでの東端にありながら貿易は盛んで華僑社会の得た収益も大きく、資金、人的流れにおいて適度の辺境性や通過性を持つ横浜は、資金面、人材面でアジア革命家たちにとって適した場所であったと考えられる。

c. 横浜居留地の意義

第三点にはアジアの一部都市に存在した居留地の存在が、横浜を革命の拠点にしたということが考えられる。居留地（または租界地）とは、外国人に一定地域を限って居住・貿易を許可する地域であるが、フランス、イギリスなどの租界地を抱えた上海や、日本最大の居留地を持つ横浜には様々な人々が集まり、またそのために治安の目の行き届かないことを利用した動きが行われた。貿易ネットワーク上にあるこれらの地では、活動支援のための資金を動かしやすいとも考えられる。その受け皿としての国際的金融機関が存在したことも理由の一つである。横浜においても1880年、日本の中央銀行である日本銀行より早く横浜正金銀行が設立された。

また、上海においては前述したヴェトナム革命運動の活動拠点や、大韓帝国臨時政府がおかれたり（1919年）⁶⁾、また日本からの中国革命の支援の動きの拠点のひとつともなった。さらに、租界地や居留地は治外法権であり、領事裁判権が及ばない場所であるので、敵対勢力からの逃亡、隠遁といった場所としても利用価値があった。しかしそれゆえ、上海などは後述の金玉均などの暗殺の場所としても機能した（1894年、上海日本人街の日本人経営ホテル、東和洋行）。また居留地は現地政府の目が届かないことだけではなく、逆に現地政府がそれを利用した例が横浜でも見ることができる。

朝鮮半島における清の勢力を排除しようと、朝鮮の親日派である金玉均らが援助を受けて行われたのが、1884年の甲申事変であったがこの企ては失敗に終わり、金らは日本に亡命したがその家族は殺害、そして見せしめを受けるほど徹底的な処罰を受けた。この革命の失敗で、翌1885年、福沢諭吉は自ら発行する『時事新報』社説に「脱亞論」を書いた。

命からがら日本に亡命した金玉均らは、1885年3月中旬ころ、福沢諭吉、後藤象二郎の援助により、横浜「山十四番地館」に居住することとなったと、資料にある。これが現在の山下町（かつての居留地）であることは間違いない。この時は金の同志9名も一緒にそこで自炊生活を送った。金らは1885年4月大阪・東成郡（平野）、その後神戸へ移ったものの、1886年6月には、横浜居留地20番地グランド・ホテルに投宿して当面滞在することになった。この時国王の命令で刺客として来日した池運永も投宿して

いた。しかし朝鮮国王が金に帰国命令を出したために、日本政府も金を日本に置いておけなくなった。資金難で、かつ身の危険のある金は簡単には動けないため、沖神奈川県令はグランドホテルがフランス領事の管轄であったことからフランス郵便船に乗せようと判断したが、それも困難になり、田健次郎神奈川県警務部長はフランス領事と協議の上で7月26日、三井財閥の別荘「共象園」(野毛山宮崎町)に金を抑留し、のちに「第三国」扱いで小笠原に行かせるがその後、金は1894年上海で暗殺された⁷⁾。

d . 日本最大の華僑社会・横浜の支援

孫文や黄興ら革命派、康や梁啓超ら変法派が横浜に来て活動拠点の一つにしたのは、日本で一番大きな華僑社会の存在であったと考えられる。経済的バックアップ、そして人的な支援、ネットワークの存在は中国再建に向けて亡命組にとっても、また、日本の華僑社会にとっても重要なものであった。孫文は「華僑は革命の母である」という言葉を遺している。居留地社会に置いての華僑の存在意義は大きい⁸⁾。

当時の日本の華僑社会を横浜と神戸で比較してみると、1900 10年代に在住していた外国人のうち中国人(清国人)が占める割合は、神戸が最大で60%に達するかどうかの規模なのに対して、横浜はほぼ60~65%台の規模である。日本人と中国人の人口比となると、さらに横浜の方が存在感を増している。当時、横浜の華僑社会は日本最大と考えてよさそう。

横浜の華僑は商業を営んでいた人々が多かった。それが康有為や梁啓超の支持者の多さにつながったと考えられる。商業を営む身としては、祖国の大きな混乱を望まなかった可能性が考えられる。実際、孫文が1897年、居留地140番地に設立した中西学校は1年ほどで理事がすべて梁啓超を始めとした変法派勢力に一新され、大同学校として再スタートした。梁啓超らの勢力が発行していた『清議報』(のちに『新民叢報』)の発行拠点も横浜であった。それを支援したのも当初、孫文の興中会横浜支部立ち上げに努力した馮鏡如、紫珊の兄弟であった。また、1899年の居留地撤廃、内地雑居に伴う運動での活躍は梁啓超たちの影響が大きかった。撤廃の際に設立された華商会議所はやはり梁の影響が大きかったと指摘されている。これについては後述する。

一方、孫文を支持していたのは、同様に華僑社会の人たちと、日清戦争後にやって来た清国の官費留学生を始め、その後の日本から学ぼうとしていた留学生であった。彼らの活動拠点は受け皿の学校がほとんど東京にあり、17の留学生組織はすべて、横浜ではなく東京に存在した⁹⁾のだが、留学生のサポートは経済面よりも、精神面、活動面(義勇軍参加など)であったので、ここでは東京と横浜の距離はさほどないと考えることができる。

さて、横浜の華僑社会の特色として言われるのが、商人・職人中心で、単純労働力は少ないと指摘されている。華僑社会の中では上層に貿易商・買弁、その下によく言われる三把刀(料理・洋裁・理髪~いずれも刃物を使うことからこう呼ばれた)という構造であるが、他にも土木建築関係業(1870年代の居留地形成期に多い)家具製造業、製版・印刷・製本業、会計係、事務員などでも活躍し、居留地経済にはなくてはならない存在となっていた¹⁰⁾。こうした華僑社会の有用性、言い換えれば質の高さが祖国中国への危機感とその変革のための活動を支えた重要な要素であり、他の居留地と比べても横浜居留地の有用性の高さと、その果たした役割は大きい。

中国革命を支援する日本人にとっても、最大の華僑社会である横浜は重要な地であった。当時の日本人の中には、欧米列強の進出を日本のみならずアジアの危機と感じ、これに対抗する必要性を感じた者もいた。そしてこうした考えを持つ者の中には、欧米列強の進出を中国で食い止めると共に、中国を基盤としてこれに対抗し続けることを考え、それには中国革命を手伝うことがまず第一であるとする者もいた。その代表的な存在が宮崎民蔵、寅蔵(滔天)の兄弟である。宮崎兄弟は中国革命に参加しようとして、特に宮崎弥蔵は中国革命に参加するための方法論として、中国商館のボーイとして働くようになっ

た。辮髪で中国名、管仲甫と名乗り（1895年10月）11月に陳少白と知己を得る。1896年1月には陳と再会して、宮崎滔天に来浜を促していた。しかし宮崎弥蔵は同年7月本牧で結核のため、29歳で死去してしまう。宮崎弥蔵は、列強植民地支配脱却のためにはまず清国革命を支援して、そこを拠点に対抗すべきだと主張していた。また世界民権革命の一里塚として「革命的アジア主義」を提唱し、これにより日本の民権化も図ろうとした¹¹⁾。宮崎滔天は宮崎弥蔵の死後その後の展開を考えようとして、亡長兄（八郎）と二兄（弥蔵）の旧友、曾根俊虎から横浜の陳少白を紹介され訪問、意気投合し、孫文を支援するようになった¹²⁾。のちに宮崎滔天は香港で孫文・康有為両勢力とコンタクトを持ったり、日本で孫文の要望で面会をセッティングしたりした。また孫文もサイゴンを革命運動の拠点として考えていたが、滔天の勧めで日本を拠点にすることにした。こうした仲介をしたのは孫文がハワイで出会った日本人菅原伝という説もある¹³⁾。

一方、革命側もその活動において、協力者を探る拠点にもなっていた。これは伊藤仁太郎という人物が横浜の実家に滞在していた際、上記の菅原伝と井上敬次郎が「愉快な人物に会わせるから」と伊藤を誘い出し、居留地の会芳楼で陳少白と会わせる話しが、犬養毅の関係者による『木堂雑誌』に紹介されている。伊藤「全体、誰に会わせるのか」「・・・支那の革命に共鳴してくれる日本の同志に会ひたいからといふので案内される訳だ」という一節がある。つまり革命活動側も日本人同士をこの居留地（中華街）で探そうとしていたことが読み取れる¹⁴⁾。

d 1 . 梁啓超の横浜亡命

康有為、梁啓超が日本に亡命したのは、日本政府の力を借りて光緒帝の復権を助けてもらおうという「幻想」を持っていたからといわれる。また日本帝国主義が康と梁を庇護したことにはそれなりの思惑があった。梁から李惠仙への書簡には以下のような一文がある。「こちらでは衣食住すべてにわたって日本国家が面倒を見てくれるので・・・お金を一銭も使っていない」¹⁵⁾。また二人の亡命については政治家や大陸浪人が同行したことが『木堂雑誌』に何度か出てくる。

梁啓超が横浜に滞在した理由はやはり、大きな華僑社会のある場所だからである。日清戦争後の華僑社会は人数も、経済力も弱体化していたという現実があったが、そうした厳しい状況の中で不平等条約が解消され1899年、居留地が廃止されることになった。同年の横浜華商會議所設立は梁の影響が大きいという指摘がある。それは商人にとっては革命派よりまだ変法派の支持者が多かったからと考えられる。會議所の発会式には東亞同文会会頭長岡護美、東京商業會議所副会頭大倉喜八郎、華商會議所顧問・東京専門学校舎監柏原文太郎、尾崎行雄、犬養毅と、中国関係人脈がそろって列席している。康有為、梁啓超らの亡命中の世話人をつとめたのはのちに横浜華僑貿易商の重鎮となった吳植恒であり、両者の結びつきを感じさせる¹⁶⁾。

居留地撤廃以後は、外国商人の活動は日本法規の下で、また日本市場を開拓のため外商間の競争も激化する。横浜華商會議所の設立はこうした内地雑居時代に向けての横浜華僑社会の取り組みであり、また會議所の設立に、亡命中の康有為・梁啓超の思想的影響が大きいのは、保皇党の啓蒙活動が横浜華僑の求めるものと一致したからこそではないかと分析されている¹⁷⁾。つまり、梁らの「適者生存」といった進化論的思想と、華僑が厳しい経済競争に参入していく状況、そして大きな変革をためらう商人としての気持ちが重なりあったことが、変法派への支持につながったのではないだろうか。孫文が中心になって横浜に設立された「中西学校」が、1年程度で梁たちの勢力中心に移行して「大同学校」になったのも、その現れであろう。この横浜は政治家や産業界とのつながりを重視した変法派にとっては適当な場所のひとつであったと考えられる。

また、中国からの適度な距離も、横浜という土地の地政的な存在意義といえる。19世紀半ばの洋務運動の影響で、西洋思想を学ぼうとする中国からの留学生が日本に多くやってきていた。梁啓超は亡命して西洋思想を中国語に翻訳していった。しかしそこから多くのことを学んでいた留学生たちは、国際情

勢の変化と清朝の旧態依然とした対応に失望し、梁から離れて革命運動にシフトしていく。

ただし梁は、来日時には古典派経済学を支持して1902年2月に創刊した『新民叢報』第1号でもアダム・スミスを取り上げていたが、日本滞在において多くの西洋書にふれたことで、重商主義、保護主義の影響（ドイツ歴史学派の保護主義的経済学説）を受けるようになり、経済に於ける政治の役割についてはその思想の転換に至ったという¹⁸⁾。それがのちに梁のベクトルが康有為より孫文に向けた理由の一つであろう。

d 2 . 孫文の横浜亡命

孫文は、梁啓超と同じく華僑社会の庇護・援助を求めて来浜したが、特に孫文は革命の資金集めのためにハワイ、シンガポール、サイゴン、香港など各地の華僑社会を回り、日清戦争後で大きな期待はできないものの、横浜華僑社会のバックアップはやはり欠かせなかった。それは日本の滞在中でも横浜での期間が多かったこと（1895.10~12、1897.8~1901.4、1901.6~1903.9、1905.7~1907.3、1913.8~1916.5）¹⁹⁾で証明される。日本には孫文の出身地である広東系の華僑が多いことも大きな意味があっただろう。その他では前述のように、横浜は日本では有数の港町であり、外国人居住者が多いことにもよる。政府人脈及び大陸浪人系の人脈（宮崎滔天など）などとの接点も持ちやすい場所であった。

当初日本では、梁啓超の方が多くの華僑、留学生たちの支持を受けていた。1899年には東京にも東京高等大同学校が設立され、『清議報』は初期の留日学生に多大なる影響を与えた。康有為が、梁の革命への傾倒を批判すると新たに『新民叢報』を発行しさらに影響力を強めた。梁が西洋思想からの影響を次々と紹介したことや、急進的な孫文と保守的な康有為の間に梁の存在があり、その位置が支持を広げたと考えられる。しかし、国際情勢の流動化と清朝の対応は華僑、特に留学生の気持ちを革命支持へと押しやることになる。義和団事件後、1903年4月、東三省から撤退予定のロシア軍がそのまま居座ったため、留学生たちは学生大会を開催し拒俄義勇隊を結成した。この動きを清朝政府が禁止したため、学生たちの失望のパワーが革命運動へと変換されていくことになった。同年夏に孫文は青山に革命軍事学校を設立、1904年に日露戦争が始まると中国人留学生が増加し、黄興、宋教仁のような蜂起に失敗し来日する者もあった。孫文は革命派の基盤をこの頃から華僑や会党から留学生に移し、1905年の中国同盟会結成につなげていく²⁰⁾。

e . 総持寺ネットワークの可能性

最後に総持寺ネットワークの可能性を考えておきたい。総持寺は、鎌倉時代、道元によって日本に伝えられた曹洞宗の寺院として、1331年現在の石川県能登に作られ、翌1322年に総本山となった。しかし1898年の大火によりその伽藍を失ったこと、また明治新政府の発した神仏分離令（1868年）の影響もあり、横浜鶴見に総本山を置くことになり、1907年に移転の官許を得て1908年着工、1911年に移転式が挙行された。横浜へ移転して間もない時期ではあったが、曹洞宗の総本山が逝江省天童寺にあることが関係しているとも推測できる。総持寺の石川素堂の個人的つながりという可能性も指摘されている。現在も総持寺には中国革命関係の碑がいくつかある。「黄興君克強之碑」（1918年建立）、「日本同志援助中国革命追念碑」（1931年、式典には山田純三郎ら出席）がある。また「板東中村君碑」は孫文のことでないかという指摘も聞く。上海で暗殺された陳其美の追悼会が1916年が総持寺で行われ、そこには寺尾亨、頭山満などが出席していた²¹⁾。また上海の東亜同文学院の初代院長根津一や、同院出身者で仏教僧でもあった水野梅暁の墓が総持寺にあることを考えると、総持寺が京浜間に位置していたという利便性も含めて、総持寺ネットワークが横浜に中国の革命家たちを呼び寄せたとも考えられる。

f . その他横浜へのアジアの人々の来訪

梁啓超、孫文を軸として様々な中国の人々が横浜に来訪すると、前述のようにヴェトナム、フィリピン独立運動の人々がいずれも横浜に一時期住居を構えて、活動の拠点にした。フランスの植民地支配から独立を目指したファン・ヴォイ・チャウは、1905年の日露戦争における日本の勝利に東洋の希望を見出して、梁啓超の住んでいた横浜にやって来た。チャウは日本政府に資金援助や軍事援助を期待して来日したが、梁啓超に見通しの甘さと人材育成の重要性を説かれたことを受け、「東遊（ドンズー）運動」を掲げて横浜に居を構え、留学生を呼び寄せる活動を始めた。横浜での活動はグエン朝の皇位継承者でありながら、フランス支配によってその道を閉ざされていたクオンデ候来日まで続き、クオンデ候来日を機に東京へ移る。日本では中国人の偽名を使うことで怪しまれないようにしていた。そうしたヴェトナム人にとっては、横浜の華僑社会、その後転居した東京の中国人留学生の居住地域は格好の活動拠点となった。

その他、横浜に来たアジア系の外国人ではインド人の活動が見られる。地理的にアジアでの貿易ネットワークの東端であり、宗主国・英国の影響が強い香港、上海よりも活動が容易であった。また頭山満などの庇護を受けたビハリ・ボースが東京に在住していたため、日本政府は横浜の「英領印度人」である貿易商にも「要視察外国人」の指定をしてその行動を報告させていた。

また、ロシア革命以前からの移住者（商人）や、革命の影響から逃れてきた人々は、ロシアからの距離的な位置やアメリカ移住への可能性などを考えたのではないかと推察できる。1917年のロシア革命以前にも横浜では、孫文が1906年、ポーランドの革命家ピウスツキと、また宮崎滔天の仲介で第一次ロシア革命に関係したゲルショニとも会談している。またロシア革命後には日本をマーケットとしたタタール系ロシア人が来浜しているが、彼らはイスラム教拡大だけでなく、日本をアジアの盟主として考えて協力関係を結ぼうとしていた。また、他国へのアクセスの利便性や日本国内での販売の拠点として横浜が目された。こうしたタタール系を含めた多くのロシア人は、山手町179番地の「レッド・ビルディング」（赤レンガ造り、関東大震災で崩壊）に滞在していた²²。

3 . おわりに

アジアの革命家、活動家たちがなぜ横浜に来たのかを考察することで、近代の資本制社会における横浜が果たした役割が見えてくる。祖国を離れて活動せざるを得なかった人々が横浜を拠点にせざるを得なかったことは資本制社会の暴力性の現れであり、同様のことは、グローバル経済の中で今も形や場所を代えて進行しているといえる。

〔注〕

- 1) 佐藤慎一「近代中国の体制構想 - 専制の問題を中心に」溝口雄三・浜下武志・平石直昭・宮嶋博史『アジアから考える』東京大学出版会、1994年P230
- 2) 「対談木堂先生と東亜問題(三)」『木堂雑誌』昭和10年3月号
- 3) 『新修神戸市史 歴史編 近代・現代』1994年
- 4) 伊藤仁太郎「木堂先生と支那革命(二)」『木堂雑誌』昭和9年5月号
- 5) 丁文江、趙豊田編、島田虎次編訳『梁啓超年譜長編第一巻』岩波書店、2004年P272
- 6) 木之内誠『上海歴史ガイドマップ』大修館書店、1999年
- 7) 韓永渉『古筠金玉均正伝』高麗書籍、1992年
- 8) 伊藤泉美「横浜居留地における華僑の職業」横浜居留地研究会『横浜居留地の諸相』横浜開港資料館、1989年
- 9) 外交史料館、外務大臣官房文書課作成「本邦ニ於ケル内外人ノ親善ヲ目的トスル諸会名並所在地等」大正10年11月16日、1門3類3項
- 10) 伊藤泉美「横浜居留地における華僑の職業」、横浜居留地研究会『横浜居留地の諸相』横浜開港資料館、1989年
- 11) 米川均「引き継がれた革命宮崎弥蔵」P47、上村希美雄監修『夢駆ける - 宮崎兄弟の世界へ』荒尾市宮崎兄弟資料館、1995年
- 12) 宮崎滔天「三十三年の夢」『日本人の自伝11』平凡社、1982年P90
- 13) 陳水發『横浜の華僑社会と伝統文化』中日文化研究所、1997年P193
- 14) 伊藤仁太郎「木堂先生と支那革命(上)」『木堂雑誌』昭和9年3月号
- 15) 丁文江、趙豊田編、島田虎次編訳『梁啓超年譜長編第一巻』岩波書店、2004年P288
- 16) 『開港から震災まで - 横浜中華街』横浜開港資料館、1994年P38
- 17) 『開港から震災まで - 横浜中華街』横浜開港資料館、1994年P33
- 18) 狭間直樹編『共同研究梁啓超 - 西洋近代思想受容と明治日本』みすず書房、1999年P239
- 19) 陳徳仁、安井三吉『孫文と神戸』補訂版、神戸新聞総合出版センター、2002年
- 20) 小林共明「留日学生史研究の現状と課題」、辛亥革命研究会『中国近代史研究入門』汲古書院、1992年P228
- 21) 『曹洞宗大本山総持寺』大本山総持寺、1996年
- 22) 鳥居民『横浜山手』草思社、1977年

〔参考文献〕

- 池田誠、安井三吉、副島昭一、西村成雄『図説中国近現代史(新版)』法律文化社、1993年
井口和起『日露戦争の時代』吉川弘文館、1998年
伊藤泉美「横浜居留地における華僑の職業」横浜居留地研究会『横浜居留地の諸相』横浜開港資料館、1989年
伊藤泉美「横浜居留地における華僑の職業」、横浜居留地研究会『横浜居留地の諸相』横浜開港資料館、1989年
伊藤秀一『アジアの民族運動』講談社、1985年
内海三八郎『ヴェトナム独立運動家ファンボイチャウ伝』芙蓉書房、1999年
大形孝平『日印関係小史』アジア経済研究所、1969年

加藤祐三「都市史研究の課題と展望」、『横浜と上海』横浜開港資料館、1995年
 韓永渉『古筠金玉均正伝』高麗書籍、1992年
 木之内誠『上海歴史ガイドマップ』大修館書店、1999年
 木村毅『布引丸 - フィリピン独立軍秘話』恒文社、1981年
 栗田尚弥『上海 東亜同文学院 - 日中を架けんとした男たち - 』新人類往来社、1993年
 小島晋治、並木頼寿『入門中国の歴史 - 中国中学校歴史教科書』明石書店、2001年
 小林共明「留日学生史研究の現状と課題」、辛亥革命研究会『中国近代史研究入門』
 汲古書院、1992年
 佐藤慎一「近代中国の体制構想 - 専制の問題を中心に」溝口雄三・浜下武志・平石直昭・宮嶋博史『ア
 ジアから考える』東京大学出版会、1994年
 白石昌也「東遊運動期のファン・ポイ・チャウ - 渡日から日・中革命家との交流まで」
 『東南アジアの留学生と民族主義運動』巖南堂書店、1981年
 丁文江、趙豊田編、島田虎次編訳『梁啓超年譜長編第一巻』岩波書店、2004年
 陳徳仁、安井三吉『孫文と神戸』補訂版、神戸新聞総合出版センター、2002年
 時任英人『犬養毅その魅力と実像』山陽新聞社、2002年
 鳥居民『横浜山手』草思社、1977年
 中村喜和・長縄光男・長與進編『異郷に生きる - 来日ロシア人の足跡』成文社、2003年
 西川正雄、南塚信吾『ビジュアル版 世界の歴史18帝国主義の時代』講談社、1986年
 日本貿易史研究会編『日本貿易の史的展開』三嶺書房、1997年
 狭間直樹編『共同研究梁啓超 - 西洋近代思想受容と明治日本』みすず書房、1999年
 藤井昇三「孫文の現代史的意義と横浜とのかわり」『孫文と横浜』図録・有隣堂、1989年
 宮崎滔天「三十三年の夢」『日本人の自伝11』平凡社、1982年
 森達也『ベトナムから来たもう一人のラストエンペラー』角川書店、2003年
 山根幸夫、藤井昇三、中村義、太田勝洪編『近代日中関係史研究入門』研文出版、1992年
 横山宏章『孫文と袁世凱 - 中華統合の夢』岩波書店、1996年
 米川均「引き継がれた革命宮崎弥蔵」、上村希美雄監修『夢駆ける - 宮崎兄弟の世界へ』荒尾市宮崎兄弟
 資料館
 『木堂雑誌』
 『開港から震災まで - 横浜中華街』横浜開港資料館、1994年
 『新修神戸市史 歴史編 近代・現代』1994年
 『曹洞宗大本山総持寺』大本山総持寺、1996年
 外務省記録、外務大臣官房文書課作成「本邦ニ於ケル内外人ノ親善ヲ目的トスル諸会名並所在地等」大
 正10年11月16日、1門3類3項
 小島晋治、並木頼寿『入門中国の歴史 - 中国中学校歴史教科書』明石書店、2001年

陶山篤太郎と川崎

川崎における現代化プロセスの一考察

眞 有 経 子

概 要

本稿は、陶山篤太郎に関する未発表資料をもとに、川崎市史の検証を行うことを目的としている。

まず、「1. はじめに」においては、川崎市の考察の対象地域となる理由を述べた。

「2. 川崎という場所」では、川崎市史について概観し、グローバル化の時代といわれる現代の問題とのかかわりについて述べた。

「3. 陶山篤太郎という人物」では、川崎市史を見直す上で重要な人物である陶山篤太郎を取り上げ、これまで確認できた資料をもとに表Ⅰ『佐久間権蔵日記』横浜開港資料館所蔵と表Ⅱ『佐久間日記』より抜粋した篤太郎に関する記述を表し、さらにそれを(1)『佐久間権蔵日記』、(2)『京浜詩』、(3)『川崎新聞』、(4)『明暗』と項目別にして、その血縁関係や交友関係などから陶山の人となりについて浮かび上がらせた。なお、ここには陶山篤太郎の従来年譜に今回の調査によって明らかになった事実を加えた新たな年譜を記載している。これは、本稿の主要部分をなすものである。

「4. おわりに」では、従来看過されてきた「京浜デパート襲撃事件」に触れ、川崎市の沿革および現在の市況や展望について略述した。また、今後の課題について述べた。

1. はじめに

川崎における産業の歴史は古い。今でも池上本門寺という寺が大田区池上に実在するが、江戸時代、川崎に移住してきた池上家同族の池上幸豊は、白砂糖と黒砂糖とを作り分けることに成功した。その製糖方法は池上自身の足で国内に伝播され、それによって日本に一大産糖地帯ができたといわれている。この功績によって、日本における砂糖の自給自足体制は18世紀末までに確立されたのである。それまで砂糖といえば総てを輸入に頼っていた。そのため、国内貨幣である銅貨を国外へと流出させていたのである。完全な国内調達を可能にしたことは、池上の偉業といっても過言ではない。

明治期に入ると、梨の新品種が川崎の大師河原という地で誕生した。それは、現在おいしい梨の別称ともなっている「長十郎梨」のことである。開発したのは大師河原の当麻辰次郎で、屋号は長十郎であった。「長十郎」は病虫害に強く、甘みもあり、取れ高も多いとされる優良品種である。つまり、それだけ当時の川崎の水と空気は清く澄んでいた。

こうして池上幸豊や長十郎など、川崎における産業の史の変遷を見ると、共通しているのは、ある人物が中心となって指導者的役割を果たしながら新しい産業が産声をあげたということである。

しかしながら、従来川崎における先行研究では、近代化の過程で工業化が推し進められ、大気汚染による農業 果樹栽培 の衰退、あるいは、埋め立てによる漁業関連産業の消滅、公害問題などが取り上げられるにとどまり、必ずしもその内実が明らかにされてきたとは言いがたい。

そこで、修士論文「川崎における現代化プロセスの考察」では、そうした時代に翻弄されてきた川崎を空間的議論の中心に据え、山之内靖がいう「階級社会からシステム社会への移行」¹⁾とされる総力戦体制下に、ある特定の人物から映し出される川崎と、またその地域で起きた事象を捉えなおしてみたいと考えている。

本稿では、その特定の人物として陶山篤太郎を取り上げ、未発表資料をもとに考察を加えていきたい。

2 . 川崎という場所

まず「川崎」について述べておく。現在、川崎といえば神奈川県川崎市を指す。しかし、本稿では特に沿海地域である川崎市川崎区の高摩川河口周辺地域からそれに隣接する横浜市鶴見区にまで至る、川崎市南部周辺の地域を前提としている。

ところで、川崎市は総じて南北に細長く、ちょうど東京都と横浜市にはさまれている格好である。北部には高額所得者が多く居住しており、今では希少となった緑が残る住環境が広がっている。北西部まで含め、その居住者のほとんどは東京都内や横浜市内へ通勤、通学しているというのが現状である。

また、中部には私鉄各線が通じ、東京や横浜へのアクセスは良い。しかし、最寄り駅に行くまでの足はもっぱらバスで、徒歩の割合も多い。したがって、総じて交通の便がいいという地の利があるわけではない。

川崎市の南北を結んでいるのがJR南武線である。南武線沿線には早くから上場各社の生産拠点が集積しているが、近年それらが研究施設へと変貌し、ここ数年でその数は増加傾向にある。つまり、研究拠点とそこに勤務する人々の居住区域でもある。

一方、南部・沿海地域というのは、北部、北西部、中部地域と比べると、まるで異なる顔を持ち合わせている。というのも、沿海地域は京浜工業地帯の中心地的役割を果たし、そこに勤務する人々によって成り立ってきた地域だからである。

川崎の、特に南部がそのような地域へと変貌する契機となったのは、1912（明治45）年の町議会において石井町長が提案した「工場招致を百年の町是となす」に対する決議であった。爾来、産業拠点として工場を次々と招致し、日本おける重要な工業生産拠点へと急成長した。さらに戦後には高度成長に伴う重化学工業の発展に大きく貢献することになった。

ところが、パブル崩壊以降、企業の業績悪化とコスト削減によって多くの工場が中国へと転出、移転した。そのため工場地帯に空き地が目立ちはじめ、埋め立てによる広大な工場地帯は虫食い状態となった。その空き地には格安マンションが建ち並び、首都高速湾岸線開通にいたって物流拠点となる新しい倉庫群が次々と出現したのである。

そうした変遷を見るとき、次のような仮説が成り立つのではなからうか。すなわち、川崎の、なかでも特に沿海地域は、日本のみならず世界情勢からの影響を受けやすい地域であり、それがいち早く表面化される地域なのではないか、ということである。もちろん、ここでその影響というのは経済的な側面だけに現れるのではない。地域社会全体に及ぼすような時代の流れを表徴するものをいう。

当然ながら、地域社会を構成しているのは企業ばかりではない。そこに居を構える住民、勤務者もあり、その主体はさまざまである。そうした社会の構成員たちが日本および世界からどのような影響を受けるのか、それが極めて顕著に現れる地域というのが川崎ではなからうか。とすると、その横軸となるはずの時間はどのように変遷していくのか。先述した川崎の変貌ぶりは、グローバリゼーションといわれる時代の到来と軌を一にしているように思われる。

ここでグローバリゼーションについて論じる余裕はないが、近年川崎に本社を置く多くの企業がグローバル（＝世界）を意識した経営にシフトしており、それに伴っていまや川崎は世界的な企業戦略を展開する企業の本拠地へと発展しつつある。

以上の事柄を踏まえた上で、いまわれわれが生きるグローバリゼーションの時代を探究するために、川崎における現代化の過程を再検討することは、あながち無駄とはいえない。

次に、総力戦体制からグローバリゼーションに向かう草創期の問題について、陶山篤太郎を取り上げて検討してみたい。

3 . 陶山篤太郎という人物

陶山篤太郎とは、1928（昭和3）年、第1回普通選挙に立候補して得票第1位で当選し、以後川崎市議会議員を3期務めた人物である。しかしながら、その詳細については、陶山が詩作活動をしていた時期に発表された詩と、『川崎市史』や『市議会史』における公式記録など、限られた記録からでしか知る手立てはなかった。

ところが、横浜開港資料館に寄贈された陶山と親戚関係にある佐久間家の個人資料のなかに日記があり、それが『佐久間権蔵日記』（以下、『佐久間日記』と略す）となって1999（平成11）年から順次翻刻、出版された。これは、陶山を知るための貴重な史料である。なお、この『佐久間日記』は、2003（平成15）年までに第一集から第五集までが毎年刊行されており、陶山篤太郎の名前はその第一集の後半部分にあたる1910（明治43）年1月より散見することができる。

(1) 『佐久間権蔵日記』

『佐久間日記』の記録者は佐久間権蔵といい、横浜開港資料館所蔵の佐久間家資料によれば、日記のほかに天和2（1682）年の武蔵国橘樹郡鶴見村の年貢割付帳を最古として、古文書、手紙などが現存²⁾している。また佐久間家は代々権蔵を襲名し、鶴見村の名主役、村会議員などの公職に就くという、いわゆる地域名望家として活躍した旧家であった。

佐久間権蔵は文久元（1861）年4月17日生まれで、幼名は文平³⁾、のちに亮弼とされた。1883（明治16）年に東寺尾村の持丸家の娘かねと結婚し、その年の徴兵令改正がきっかけとなって同年12月15日付で家督を相続⁴⁾した。1895（明治28）年、権蔵と改名したことで、名実ともに佐久間家の第15代当主佐久間権蔵となったのである。

表Ⅰ 『佐久間権蔵日記』横浜開港資料館所蔵

記 録 者	佐久間権蔵 文久元年（1861）生まれ、幼名は文平。のちに亮弼となり、明治28年（1895）に権蔵と改名、第15代佐久間権蔵となる。
佐久間日記	横浜開港資料館より翻刻・出版されているのは第一集から第五集の大正5年のものまで。現存する日記は、明治16年、同43年～大正元年、大正3年～8年、大正10年～12年、大正14年～昭和9年までの計23冊。 第一集～明治16年・43年分 第二集～明治44年・45年分 第三集～大正3年分 第四集～大正4年分 第五集～大正5年分

この日記は、1883（明治16）年および、1910（明治43）年から1934（昭和9）年（権蔵は同年9月16日に73歳で他界する）にいたるまでの計23冊が残されている。（表Ⅰ参照）残念なことに、1910（明治43）年から1934（昭和9）年までのうち、1913（大正2）年、1920（同9）年、1924（同13）年の3年分が欠落しており、その理由については不明である。また、権蔵の青年年期にあたる1884（明治17）年から1909（同42）年までの日記も存在していたと思われるが、「何らかの事情によって失われ、現存しないとす他はない」⁵⁾とされている。

権蔵の友人には左右田銀行を興した実業家である左右田金作、親戚には茶商として横浜で活躍した大谷嘉兵衛⁶⁾などがいる。また、日本美術院創立者として著名な岡倉天心の兄である岡倉八十八は権蔵の

友人であることなど、重要な時期の日記欠損分はあるものの、佐久間家の家業、親戚付き合い、交友関係、個人情報などを知ることができる。

この『佐久間日記』には、陶山篤太郎の出生についての記述は見られない。しかし、権蔵の親戚に当たる橋樹郡川崎町陶山喜三郎と妻むらの間に生まれた子であることが確認できる。篤太郎の父である喜三郎は、東寺尾村の持丸家から陶山家に養子として迎えられた人で、持丸音松といった。妻のむらは、佐久間権蔵（＝佐久間亮弼）の妹である。つまり、篤太郎は権蔵（亮弼）の甥だった。

権蔵（亮弼）には他にも妹がおり、それぞれが嫁いだ先の親戚らとも付き合い、世話をしている。権蔵（亮弼）の長男である佐久間道夫は篤太郎より3つ年上で、佐久間家で起業して本業となっていた味噌醸造業の手伝いをしながら、昭和2年（1927）に市議員1級選挙に当選し、佐久間家の長男として立派に成長している。

次に、佐久間日記第一集の後半である1910（明治43）年1月8日付けから第五集1916（大正5）年12月29日付までの日記に記載された陶山篤太郎に関する記述をいくつか抜粋し、作表したものを掲げておく。

表Ⅱ 『佐久間日記』より抜粋した篤太郎に関する記述

	日 付	日 記 文
第一集	明治43年1月8日	道夫、篤太郎本日ヨリ学業始マル
	同 年1月18日	午前陶山喜三郎殿寺尾へ訪問ノ途中来臨、家事整理ノ件を陳ズ
第二集	明治45年5月19日	午後四時頃Y校ノ生徒来リ、本日ノボート競争ニ篤太郎右ノ指ヲ負傷セシトノ報ヲナセリ、(中略)、右ノ中指ト人サシ指ノ二本ヲツプシ臥床シラル
	同 年5月26日	篤太郎ノ負傷日々快方ニ傾ク
第三集	大正3年3月30日	本日八横浜商業学校ノ卒業式アリ、篤太郎モ卒業セリ、卒業生七十九人ノ内二人落第シ、七十七人ノ卒業生ノ内篤太郎七十三番目ナリト、本日同人ノ学友山崎ヨリ承知ス
	同 年3月31日	石塚ヲ訪問シテ篤太郎就職ノ件又々依頼ス、(中略)七十三番目ノ(七十七人ノ卒業生)成績故へ就職上大ニ都合アシ 午後より篤太郎ニ対シテ将来ノコトニツキ懇々諭セリ、ソレヨリ同人八卒業生ノ送別会ニ出浜ス
	同 年4月18日	〔受信〕月岡左右田氏より廿日午前十時ニ商品倉庫へ篤太郎ニ来ルヘキ旨通知アリ
	同 年4月20日	篤太郎八横浜商品倉庫(左右田、西村ノ合名組織ナリ)雇入レ確定シ、左右田殿より該契約書ヲ篤太郎ニ渡サレ月俸金廿円ノ支給ナリ
	同 年4月28日	陶山篤太郎本日ヨリ横浜商品倉庫へ通勤ス
	同 年7月26日	彼ノ頑愚ナル(中略)昨日モ新子安ニ行クト云ヒ外出のマ、今年後七時過(中略)実ニ陶山家ノ悲運八音松(現:喜三郎一筆者注)ノ破産ニ非ズシテ、寧ろ篤太郎ノ如ク阿呆漢ノ生レシコソ家破メツナレ、ア、右ノ事情ニヨリ明日篤太郎ヲ川崎ニ返スミ込
	同 年7月30日	〔受信〕川崎ノ篤太郎ヨリ永々鴻恩ヲウケシ謝状来ル
	同 年10月4日	余八同家ノ競売ニ付キ地処八当方ニテ競落トスベキヨウ計フベキニツキ、(中略)現在ノ隣地ナル五三番地ノ宅地七畝廿四分ヲ必ず競落シ、陶山家祖先ノ祀ヲ絶タザルヨウスベケレバ、家族ヘ安心スルヨウ伝言シカヘス

第四集	大正4年8月28日	篤太郎八不具ニモ不拘（ツンボニテ右ノ中指ノ先キガツブレラル）、過日甲種ニ合格シテ昨日抽籤ニテ砲兵ノ六番ノクジニ当レリト云フ
	同年12月10日	陶山篤太郎市川ノ砲兵隊ヘ明日入嘗（以下省略）
第五集	大正5年12月4日	今朝鴻ノ台ノ砲兵十六聯隊一中隊ノ陶山篤太郎ヨリ来翰アリ、同人ハ今回上等兵ニ進ミテ新兵ノ係リトナレリ（以下省略）
	同年12月5日	〔発信〕鴻ノ台ノ砲兵十六レン隊一中タイノ篤太郎ヘ返書ヲ出ス、先ツ同人ノ上等兵ニ進級セシヲ祝シテ、新兵ヲ愛ブセンコトヲ警告ス
	同年12月29日	鴻ノ台砲兵聯隊ノ篤太郎二泊ノ休暇出シトテ来ル、夜十時頃川崎二帰ル

まず、1910（明治43）年1月1日付けの日記から読み進めると、権蔵の息子である道夫と、篤太郎が同じ小学校に通っていたことがわかる。表Ⅱに示したように、同年1月8日付けに「道夫、篤太郎本日ヨリ学業始マル」とされていることから、同じ屋根の下で暮らしていた。同年1月18日付には「午前陶山喜三郎殿寺尾へ訪問ノ途中来臨、家事整理上ノ件を陳ズ」とあることから、その理由が陶山家の家計困難によるものであり、そのために篤太郎は佐久間家に預けられていたのである。

第二集には、横浜商業学校 現在のY校 に通う篤太郎の闊達な様子が記されているが、1912（明治45）年5月19日付を見ると、ボート競走中に右手の中指と人差し指を負傷し、つぶれてしまうほどの大けがをしている。権蔵は、そうした篤太郎のことを実父である喜三郎以上に心配し、時折、道夫とともに観劇や花月園に連れて行くなど、あらゆる手立てを尽くしている様子が見られる。

勉強のできが悪い篤太郎には、学校とは別に夜学にまで行かせるよう特別な計らいもしていた。しかし、第三集の1914（大正3）年3月30日付に「本日八横浜商業高校ノ卒業式アリ、篤太郎モ卒業セリ、卒業生七十九人ノ内二人落第シ、七十七人ノ卒業生ノ内篤太郎七十三番目ナリト、本日同人ノ学友山崎ヨリ承知ス」と記されていることから、篤太郎は下から数えたほうが早い成績だった。権蔵は、篤太郎を就職させるため、高校卒業を目前にして、徐々に厳しく接するようになる。また、権蔵は方々に篤太郎の就職先を紹介してもらうために出向き、書状を出すなど、いろいろと口利きを依頼して回っている。しかし、卒業後も篤太郎の就職先はなかなか決まらなかったのである。

その要因として、篤太郎の右手の指の身体的不都合が考えられるだろう。それでも権蔵は根気よく篤太郎に対し「将来ノコトニツキ懇々論セリ」（同年3月31日付）と言い聞かせている。つまり、権蔵自身、篤太郎と同様のハンデキャップを背負ったつもりで、わが子以上に懸命に職に就かせようとした様子が見て取れる。

その努力が実ってか、権蔵の友人で先述した左右田の世話で、彼の合名組織である「横浜商品倉庫」にようやく就職（同年4月20日付）させる運びとなった。この頃、まだ篤太郎は佐久間家に寄留しているが、会社勤めをはじめてから無断欠勤や無断外泊をしたことが原因で、同年7月28日に川崎の実家に送り返すと権蔵から言い渡されている。

このような篤太郎の行動は、権蔵の面目をつぶすような事態であることにちがいない。が、それを権蔵は後に「阿呆漢」と嘆いているのは印象的である。この記録から考えられることは、権蔵は篤太郎を甥としてよりは、むしろ、できは悪いのに無謀でやんちゃなことをする息子と見ていたというほうが自然であると思われる。佐久間家から追い出されてすぐの7月30日付に権蔵は「川崎ノ篤太郎ヨリ永々鴻恩ヲウケシ謝状来ル」と一行だけわざわざ書き残していることからしても、権蔵にとってそうした一連の出来事に終止符が打たれたのであり、親戚としての縁が切れる意味ではないということが容易に想像できる。

ところで、この第三集には陶山家の家政がさらに困窮していく様子が記され、そして篤太郎が送り返されたあとは、川崎の実家は競売にかけられることになる。陶山家はもとより、篤太郎のことを思う権

蔵は、その宅地分を落札⁷⁾する意志を表明している。

つづく第四集の1915（大正4）年には篤太郎よりもむしろ父喜三郎の名が頻繁に出てくる。これは、陶山喜三郎が金策に奔走していたためで、陶山の家土地を整理する話へと進んでいく。また、1915（大正4）年8月28日付には、篤太郎が何らかの原因で耳が遠くなっていることも記されている。篤太郎は予備兵に招集されることが決まったため（「砲兵ノ六番ノクジニ当タレリ」⁸⁾）、同年12月10日に市川の砲兵隊に入営した。

ここまでが『佐久間日記』から判明した陶山篤太郎の青年期である。

(2) 『京浜詩』

『佐久間日記』のほかに、同人雑誌『京浜詩』から詩人としての陶山を知ることができる。『京浜詩』は、毎月第2土曜に発行されていた月刊誌で、発行兼編集人は竹内多三郎である。

なかでも1967（昭和42）年7月に発行された第65号は「特集故陶山篤太郎」で、総勢28名にも及ぶ陶山の知人らが「私の知っている陶山篤太郎」と題したアンケートに対する回答がすべて掲載されている。

この『京浜詩』の創刊については、詳らかではない。先の陶山の特集号からさかのぼれば、1961（昭和36）年11月と推定できるが、管見では文学関連の事典や雑誌記録には残されていない月刊誌である。したがって終刊の時期や事情についてもはっきりしない。ちなみに、編集人竹内多三郎は、郷土史家であり詩人でもあったが、これまた文学事典には名を残していない。

ところで、編集人である竹内多三郎は、陶山の死後20年以上も経てから彼の書いた詩に魅せられ、陶山の特集号では陶山について追跡調査した様子を日記仕立てに記している。これもまた、陶山を知る上で大変貴重な資料である。この『京浜詩』によって、竹内多三郎が調査した陶山篤太郎の年譜が一つの大きな手がかりとなった。かつ、生前の陶山を周囲の人々はどのように見ていたかということも、そこからうかがい知ることができる。ただし、先の『佐久間日記』とは親戚縁者の名前などに多少の食い違いもあり、竹内の収集した資料が必ずしも十全でないことは留意すべき点であろう。

以下に掲げる陶山の年譜は、竹内が『京浜詩』に収載した陶山の年譜と、『横浜開港資料館館報』第8号にまとめられている『佐久間日記』から判明したことをもとに、加筆・修正を加えたものである。

【陶山篤太郎の年譜】

1895年（M28）4月4日

神奈川県橘樹郡川崎町小土呂五拾四番地に住む陶山喜三郎とむらの長男として生まれる

1902年（M35）7歳

4月 町立川崎尋常高等小学校尋常科入学

1904年（M37）9歳

家庭の事情で橘樹郡鶴見町の佐久間権蔵家に身を寄せたため、同郡村立生見尾尋常高等小学校に転校（何月か不明）

1906年（M39）11歳

3月 同小学校卒業

4月 生見尾小学校高等科に進学

1910年（M43）15歳

3月 生見尾尋常高等小学校高等科卒業

4月 横浜商業学校入学（現：Y校）

1914年（T3）19歳

3月 同校卒業

4月 (株)横浜商品倉庫入社

- 7月 佐久間の斡旋で就職したものの、実家に戻される
- 1915年（T4）20歳
12月 千葉県国府台の陸軍野戦砲兵隊に入営
- 1917年（T6）22歳
同隊伍長勤務上等兵で除隊（何月か不明）し、自宅正面にあった三光商会を継承するが、詩作に没頭するようになる
- 1918年（T7）23歳
4月 佐藤惣之助の詩誌『太洋の岸边』の同人となる
同年（何月か不明）、東京世田ヶ谷の陸軍野戦砲兵隊に予備召集されるが、体格が良すぎて着られる軍服がなく、即日解除される。そのまま帰宅するのきまり悪く、二子玉川にあった「柳屋」に3日間逗留。そのとき、のちに妻となる小川げんを知る
- 1921年（T10）26歳
10月 三光商会倒産
- 1922年（T11）27歳
9月 小川げん入籍、長女篤子誕生
- 1923年（T12）28歳
9月 関東大震災
- 1924年（T13）29歳
7月 川崎町に市制施行で、出生地（小土呂五四番地）が小川町六四番地に変更される
9月 惣之助に励まされ、処女詩集『銅牌』を出版
また、惣之助の発起で横浜万珍楼にて出版記念会を開催
- 1925年（T14）30歳
6月 「新人を評す」で萩原朔太郎らに絶賛される
この年齢の前後に『川崎新聞』を継承、発行か
- 1926年（T15）31歳
3月 予備召集により世田ヶ谷野砲第一聯隊に入隊
この年、佐久間権蔵が県議補選で県政界に進出する際、選挙運動を担う
- 1927年（S2）32歳
6月9日 妻げん（30歳）大師河原宮川病院で逝去
- 1928年（S3）33歳
6月 神奈川県議会議員第1回普通選挙に社会民衆党所属で立候補
2816票で次点（票差101）となる
7月 金子光晴らと共同詩集『篝火』出版、散文詩など収載
9月 普通選挙第1回川崎市議会議員選挙に立候補
471票第1位で当選、21日に第2代目副議長に就任
- 1929年（S4）34歳
9月21日 副議長を辞す
- 1932年（S7）37歳
5月 社会民衆党を離れ「日本国家社会党」を結成
常任中央執行委員となる
9月 日本国家社会党より川崎市議会議員に再立候補
365票第15位で当選
- 1933年（S8）38歳

- 7月 日本国家社会党分裂するも残留し新党務長に就任
1935年(S10) 40歳
- 7月 京浜デパート襲撃事件 ^(ママ) 主動者容疑で検挙される
1936年(S11) 41歳
- 3月 (全国遊説中名古屋で知り合った) 近藤静子と結婚
6月 愛国政治同盟より神奈川県議員選挙に立候補
2788票第4位で当選(議席第13番)
9月 川崎市会議員選挙に立候補、444票第12位当選
11月 県会において質問演説(拷問事件に関する内容)
大日本青年党(党首橋本欣五郎)の旗揚げに参画
1937年(S12) 42歳
- 7月 川崎市宮前小学校にてよう懲戦時体制確立の演説会
(大日本青年党)
11月 県会にて「重大事局認識の徹底を期せ」質問演説
「五月会」結成(三浦寅之助、金井芳次、河野幾三、石渡清作、陶山篤太郎)県
政の刷新を展開する
1938年(S13) 43歳
- 6月 妻静子、榎町6番地の自宅で逝去(35歳)
7月 神奈川県議会副議長に就任
1939年(S14) 44歳
- 4月 県代表皇軍慰問団の副団長として大陸へ出発
6月 約40日間の日程を終えて帰国
8月 県議会副議長満期辞任
10月 川崎市会から水道委員として盛岡仙台を視察帰途列車中に奇禍、那須駅で下車し
佐久間道夫の那須温泉近光荘にて逗留治療
1940年(S15) 45歳
- 3月 吉川節子と結婚
6月 大日本青年党より神奈川県会議員選挙に立候補3382票で次点
既に病床にあり、政見発表演説も発声意のままにならず
11月 母むら他界
1941年(S16) 46歳
- 9月28日午後11時50分、榎町の自宅で病死
火葬されたのち「浄性院篤堂一針居士」として下作延の善養寺(浄土宗)内にあ
る先祖代々の墓に眠る

以上がこれまでの調査で明らかになったものだが、この年譜の詳細については紙数の都合上、ここでは割愛する。

さて、その陶山特集号で竹内多三郎の手によって明らかになった陶山の年譜と、「私の知っている陶山篤太郎」と題して多くの人々が寄せた文面からうかがい知る陶山の人となりについて見ておきたい。陶山の家は、篤太郎が生まれた当時足袋屋を営んでおり、小さい頃は「青木足袋屋の篤ちゃん」⁹⁾と呼ばれていた。篤太郎は9歳のときに町立川崎尋常高等小学校尋常科から橋樹郡村立生見尾尋常高等小学校に転校している。

それから1918～19(大正7～8)年ごろ、陶山は川崎町にあった「少年俳句会」に数回足を運んでい

る。彼自身は俳句にあまり興味を示していなかったようだが、この句会には友人の佐藤惣之助や鈴木保徳画伯らがよく顔を出していた。陶山はその句会であまり話をしなかったが、句会の少年たちからは尊敬されていた人だったという。

「陶山さんの思ひで二、三」という文を寄せている横浜市港北区折本町真照寺住職の雲井麟静は、佐藤惣之助が「客が呑む酒より陶山の呑む量のはるかに多い、(中略)これでは店の採算が取れない」とこぼしていたことを明かしている。また、陶山の体格は「五尺九寸五分」¹⁰⁾、「廿一貫の体重」¹¹⁾、「巨漢」または「巨大な体」などと記されていることから、身長は約180センチで体重は約79キ口、当時の日本人にしては身長も高く、見栄えのする大きな体格であったと想像できる。それから、篤太郎は入営してからたった2年で上等兵にまでなつて除隊している。除隊後は、川崎の実家正面にあった酒販業「三光商会」を継承し、それとほぼ同時期に詩作に没頭するようになり、佐藤惣之助の詩誌である『太洋の岸边』の同人となった。ところが、26歳になった篤太郎はその「三光商会」を破産させて無一文となつてしまふ。そうしたなか27歳で小川げんと入籍、長女篤子が誕生する。

関東大震災に遭遇したのは28歳のときである。その一年後に佐藤惣之助の勧めで処女詩集『銅牌』¹²⁾を出版。これには高村光太郎が序文を寄せ、佐藤惣之助の発起で出版祈念会が開催された。篤太郎の詩は萩原朔太郎にも絶賛され、新人詩人としては華々しいデビューを飾ったといえるだろう。

1925(大正14)年、篤太郎が30歳のときのこと、橘樹郡県議会議員補欠選挙に出馬した佐久間権蔵の遊説責任者として郡内を回っている。その重い任を全うした。このとき、篤太郎は将来政治家になる自分の姿を、伯父である佐久間権蔵や、権蔵の息子で篤太郎の兄貴分である道夫と重ね合わせていたのかも知れない。権蔵にとっては、いくら篤太郎が不甲斐ない甥っ子だったにせよ、息子の道夫同様に信頼していたと考えていいだろう。

篤太郎が初めて選挙に出馬したのは33歳のときである。そうしたなかでも詩作活動はつづけられ、金子光晴らと共に散文詩などを収録した共同詩集『篝火』¹³⁾を出版している。

(3) 『川崎新聞』

そうした詩作活動の傍ら、『川崎新聞』の編集発行を波津久劔より引き継ぐことになった。その時期は1926(大正15)年前後と推定されるが、創刊については判然としていない。

この『川崎新聞』とは、1948(昭和23)年に創刊されて1996(平成8)年に廃刊された『川崎新聞』とはまったく異なる新聞であることを強調しておかなくてはならない。なぜなら、篤太郎が主筆を勤めた『川崎新聞』は、佐久間家文書のなかから発見された14点だけしか現存していないもので、それ以外の記録にもほとんど残されていない新聞だからである。現在の調査では、新聞資料所蔵の諸機関には『川崎新聞』の現物は残っておらず、その存在すら記録されていない。したがって、『川崎新聞』についての正確な情報は今のところ得られていない。¹⁴⁾

そうしたなかで、『川崎新聞』が佐久間家資料から発見されたことは、佐久間と篤太郎の選挙戦がどのようなものだったのか、陶山が初めて選挙に立候補する意気込みはどのようなものだったのか、新聞のコラムには陶山の論評が掲載されるなど、陶山の個人史を探る上ではもちろんのこと、川崎市史を見直す上でも極めて重要な史料となった。

(4) 『明 暗』

最後に、雑誌『明暗』を紹介しておきたい。この雑誌は、編集兼発行人を務めた福井茂一より、1925(大正14)年11月の創刊号から1929(昭和4)年7月の第45号までが川崎市立中原図書館に寄贈されたものである。川崎の歴史を通史的に知るうえでは欠かせない『川崎市史』においても、この『明暗』という地方雑誌から引用されている箇所は多く見受けられる。しかしながら、これもまた先の『京浜詩』同様に終刊ははっきりしていない。¹⁵⁾

この雑誌の第3号（大正15年1月号）の14ページから17ページまでは、福井が担当したシリーズ「京浜間・・・新聞発達史 並に其時代活躍の記者（三）」に紙数が費やされており、そこには『川崎新聞』について記している箇所がある。次に引用する。

川崎市議第一回選挙に際して坪井竹子君や大友一男君が東洋自由新聞の川崎版を作って活躍したのが動機ともなって十三年十月十一日川崎日々新聞と云う日刊新聞が出現し（中略）現在は全く坪井大友両氏の経営となって今日に至っている。これと相前後して川崎の土地っ児で詩人にして快男児の陶山篤太郎君が社長となって「川崎新聞」を創立し（中略）現在川崎に於ける日刊新聞はこの二つである。（『明暗』第3号15～16頁より抜粋。引用文中の下線は筆者による）

これまで陶山篤太郎の30代前半までの生い立ちや人となりについて概観してきたが、40歳のときには「京浜デパート襲撃事件」を起こして投獄される事件が起きる。その後、水道委員として東北地方へ行った際にはその水で当たってチフスになり、さらにカリエスにかかって徐々に身体が蝕まれ、最後には演説すらできなくなるほどノドをつぶしたという。死因についてはカリエスとも咽頭癌ともいわれているが、現時点で死因についてははっきりとした資料などは未見である。

なかでも「京浜デパート襲撃事件」は1935（昭和10）年に起こった一大事件で、当時としては大きな社会運動でもあり、しばらく世論を賑したほどであった。この事件は、百貨店法の改正と連関して起きたもので、それによって陶山が主導者容疑で検挙され、投獄されるのである。これは、川崎におけるシンボリックな社会運動の一つとして挙げるほどの重要な事件であるはずだが、『川崎市史』には詳述されていない。しかし、この事件は、当時の世相を反映する重要な事件であったことにはちがいない。

4．おわりに

修士論文では、上述した「京浜デパート襲撃事件」を中心に考察したいと考えている。目下、横浜開港資料館の方のご協力をいただき、調査を進めているところである。したがって、未見の資料も多いため、その事実を記載するにとどめておきたい。

最後に、川崎市制80年の歴史について触れておく。

川崎市は、1924（大正13）年7月1日に市制施行されて誕生した。いまから約80年前のことである。人間に譬えるとすれば、今年で満80歳を迎え、傘寿の賀の祝いを終えたばかりの高齢都市といえるだろう。

地理的には、東京と横浜との間に挟まれた、多摩川沿いに位置する細長い地域であるが、1939（昭和14）年ごろまで隣接町村との合併を繰り返しており、現在の市域に至るのは1963（昭和38）年頃である。

1971（昭和46）年8月、政令指定都市に指定¹⁶⁾されるが、周知の通り、この頃の川崎は日本でも有数の公害都市としてその名を馳せていた。特に沿海部は京浜工業地帯の中心的役割を果たす地域となったため、川崎の空はまさに灰色であった。すでに、江戸時代には「長十郎梨」が誕生し、果樹栽培をはじめとする農業地帯であった川崎は、2度に亘る世界大戦を経るなかで、かつての牧歌的な風景は失われ、国内屈指の軍需工業都市として急成長したのである。

2001（平成13）年、阿部孝夫現市長が初就任して以来、そうした“灰色の街”というイメージを払拭するための戦略が大々的に行われるようになった。市のイメージを美味しいサンドイッチの具に譬えたキャッチコピー（東京と横浜に挟まれた地域でどこに行くのも便利で旨味があることを意味する）が功を奏し、いまでは転入希望者が後を絶ない。多少の自然が残される多摩川上流地域には高級住宅街も広がり、人口約131万人を数える大都市に変貌した。

また、現在、川崎には一流企業の生産拠点から研究拠点へと再編されつつある地域も出現¹⁷⁾している。その一方で、多摩川の下流域に近い川崎駅周辺から多摩川縁にはペーパーハウスも数多いなど、一つの市域でありながら多彩な顔を持っている。

そうした川崎市史を繙くことは、単なる地域研究にはとどまらない、グローバリゼーション研究の一側面をも明らかにすることができるのではなからうか。

いうまでもなく、グローバリゼーションといわれる現象は、必ずしも可視的なものではない。グローバリゼーションとは何かということを理論的、かつ、具体的に提示することは大変難しい。そこで、川崎において極めて重要な役割を果たしたと考えられる陶山篤太郎の足跡を追うことは、川崎における現代化の過程の一端を考察することにつながるものと考えている。残された課題は多いが、ひとまずここで筆をおく。

〔注〕

- 1) 山之内靖「方法的序論」(山之内靖、ヴィクター・コシュマン、成田龍一編『総力戦と現代化』柏書房1995年) 12頁および46頁
- 2) 横浜開港資料館・平成15年度第1回企画展示「ある明治人の半生涯 『佐久間権蔵日記』にみる地方名望家と地域の歴史」展示資料目録
- 3) 『佐久間日記』(第四集)大正4年の日記で、権蔵ゆかりの場所を訪れる記述から判明したものである。
- 4) 『佐久間日記』(第一集)87頁、12月24日月曜の記録に「都合二ヨリ十五日ノ日付ニス」とされている。
- 5) 『佐久間日記』(第一集)解題三「『佐久間権蔵日記』について」6頁
- 6) 大谷嘉兵衛の養子である大谷金蔵には権蔵の妹きわが嫁いでいるため。
- 7) 『佐久間日記』(第三集)10月4日日曜から抜粋すると「余八同家ノ競売二付キ地処八当方ニテ競落トスベキヨウ計フベキニツキ、(中略)現在ノ隣地ナル五三番地ノ宅地七畝廿四分ヲ必ず競落シ、陶山家祖先ノ祀ヲ絶タザルヨウスベキレバ、家族ヘ安心スルヨウ伝言シカヘス」と訪問した陶山喜三郎に申し伝えている。買収資金については、10月1日付の記録から佐久間家と持丸家側の親類で負担することが決まっている。競売当日は、佐久間権蔵の代理人として青木町の吉田高司に落札委任状と保証金500円を託し、宅地53番地234坪を坪単価11円62銭4厘で競り落としたことが記されている。
- 8) 『佐久間日記』(第四集)8月28日付
- 9) 高橋好之「陶山君を憶う」、竹内多三郎編集・発行『京浜詩』(65号)昭和42年所収のもの。筆者である高橋好之は、『京浜詩』に「大洋の岸边」の同人として記されている。
- 10) 明治以後、1尺 = 1メートルの33分の10と定義されている。10分の1尺 = 1寸 = 10分 = 約3.03cm。よって、陶山の身長は約180cm以上あったことになる。
- 11) 1貫 = 3.75kgであるから、体重はおよそ79kgと推定される。
- 12) 『銅牌』1924年9月出版。古書店では4万7,500円前後の値がついている。
- 13) 『篝火』昭和3年7月出版。現時点では記録に残されているだけである。
- 14) 川崎市役所編『川崎市史年表』(昭和43年)によれば、大正13年10月11日欄に「また、このころ古川においても「川崎新聞」が発刊される」と記されているものの、この大正期に発刊された『川崎新聞』の正確な発刊時期については、いずれも確たる証拠が見つからない。
- 15) 『明暗』それ自体と、福井茂一とともに『明暗』を創刊した藤田鎌吉を中心に取り上げた詳しい論

稿は、加藤千香子の「1920年代の地方都市と新中間層 川崎市の地方ジャーナリストの軌跡を中心に」(横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅲ社会科学第1集、1998年)であるが、ここでもやはり「終刊ははっきりしない」と記されている。

- 16) 政令指定都市として指定されたのは、札幌、福岡とともに昭和46年8月28日であり、施行されたのはその翌年の昭和47年4月1日である(『川崎市史』通史編4上、495頁)。
- 17) 本稿を執筆中「川崎市内の研究者の集積率は日本一」(日本経済新聞2004年7月15日付)であることが確認できた。川崎市内を走る南武線沿線を中心に、上場企業の研究施設が多いこと、新設される研究機関が今後も増えることなどが報じられている。

〔参考文献〕

- ・有馬学著『日本の近代4 「国際化」の中の帝国日本』中央公論新社、1999年
- ・伊豫谷登士翁、成田龍一編『再魔術化する世界』御茶の水書房、2004年
- ・小熊英二著『単一民族神話の起源』新曜社、1995年
- ・大石嘉一郎、金澤史男編著『近代日本都市史研究』日本経済評論社、2003年
- ・金子光晴『詩人』講談社文芸文庫、1994年
- ・川崎区文化協会編集発行『川崎評論』(Vol.19)平成15年
- ・川崎市議会編集発行『川崎市議会史』(第3巻)昭和60年
- ・川崎市議会編集発行『川崎市議会史』(年表編)昭和63年
- ・川崎市編集発行『川崎市史』(資料編4上・下)平成2年
- ・川崎市編集発行『川崎市史』(通史編4上・下)平成9年
- ・川崎市役所編集兼発行『川崎市史』(年表共)昭和43年
- ・川崎市史編さん委員会『川崎市史研究』第二号、川崎市公文書館、平成三年
同上 第四号、平成五年
同上 第五号、平成六年
同上 第七号、平成八年
- ・酒井直樹、ブレット・バリー、伊豫谷登士翁編『ナショナルリティの脱構築』柏書房、1996年
- ・佐藤卓己著『『キング』の時代』岩波書店、2002年
- ・成田龍一編『都市と民衆』吉川弘文館、1993年
- ・沼尻晃伸著『工場立地と都市計画』東京大学出版会、2002年
- ・林宥一著『「無産階級」の時代』青木書店、2000年
- ・山之内靖著『システム社会の現代的位相』岩波書店、1997年
- ・山之内靖著『現代社会の歴史的位相』日本評論社、1982年
- ・山之内靖、ヴィクター・コシュマン、成田龍一編『総力戦と現代化』柏書房、1995年
- ・山之内靖、酒井直樹編『総力戦体制からグローバリゼーションへ』平凡社、2003年
- ・横浜開港資料館編集発行『佐久間権蔵日記』(第一集)平成11年
同上(第二集)平成12年
同上(第三集)平成13年
同上(第四集)平成14年
同上(第五集)平成15年
- ・横浜近代史研究会、横浜開港資料館編『横浜近郊の近代史』日本経済評論社、2002年
- ・日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大事典』(第二、四、五巻)講談社、昭和52年

〔参考資料〕

- ・「川崎新聞」大正14年6月13日付、同年8月26、29日付、
昭和3年6月10日付、4年2月24日付、
7年8月28日付、同年9月11日、12日付、
11年5月24日付、同年9月20日付、
12年2月28日付、同年4月11日、18日、25日付
- ・「川崎新聞」昭和23年11月10日付創刊号～昭和24年5月7日付、同年7月2日付
- ・佐藤孝「佐久間権蔵とその日記」
（横浜開港資料館平成15年度第1回企画展示記念講座、2003年）
- ・竹内清「佐久間権蔵日記にみる川崎の近代化」（前項と同じ）
- ・植山淳「佐久間権蔵と味噌醸造」（前項と同じ）
- ・中村尚史「京浜工業地域の形成と佐久間家」（前項と同じ）
- ・加藤千香子「1920年代の地方都市と新中間層 川崎市の地方ジャーナリストの軌跡を中心に」（横浜国立大学教育人間科学部紀要、社会科学第1集、1998年）
- ・加藤千香子「都市化と「大正デモクラシー」」
（近現代史部会共同研究報告、『日本史研究』464号、2001年）
- ・竹内多三郎編『京浜詩』（65号）京浜詩の会、昭和42年
- ・竹内多三郎「風雪四十六年 陶山篤太郎の人と生涯」、同「風雪四十六年」（続）
川崎市総合文化団体連絡会編『文化かわさき』第二・第三号、昭和50年
- ・松本洋幸「大企業の進出と地域政治 大正期の橘樹郡田島地域」
（横浜開港資料館紀要第22号、平成16年）
- ・川崎市立中原図書館所蔵『明暗』（創刊号～第45号）明暗社
- ・横浜開港資料館所蔵、佐久間家所蔵資料
- ・横浜開港資料館所蔵、京浜デパート事件関係資料
- ・拙稿「グローバル化再考 川崎市を視座として」
フェリス学院大学国際交流学部2002年度卒業論文

付 記

本稿は、本学大学院国際交流研究科研究会（2004年7月24日）における発表をもとに、加筆、修正を加えたものである。

明治期—キリスト者の思想と闘い

矢嶋楯子とキリスト教

熊田京子

概要

日本で女性の人権闘争が解決の運びに結びついたのは、第二次世界大戦後の占領軍の民主政策の力が大きかった。婦人参政権の獲得、公娼制度の廃止等の大懸案がGHQの指令により、民主主義の手本として国民に示されたのである。しかし、これらの問題解決には確かに占領軍の力は大きかったが、戦争で中断されるまで果敢にくりひろげられた女性運動、とりわけ60年間闘い続けて来たキリスト者である女性たちの矯風運動の活躍も見逃す事ができない。特に女性に人権という言葉が用いられなかった時代に、聖書を携え運動することは社会的にも大きな反発を受ける行為であった。その先駆けを担ったのが日本キリスト教婦人矯風会である。本小論文では、その矯風会の初代会頭として活躍した矢嶋楯子の生涯（明治期）を辿り、外国人キリスト者が果たした役割、楯子の思想に影響を及ぼしたキリスト教の意義について、その関連する資料を基に分析を試みる。

目次

はじめに

I 矢嶋楯子の思想形成

- (1) 矢嶋楯子の生家と教育
- (2) 熊本洋学校とキリスト教
- (3) プロテスタンティズム導入と日本の近代化

II 矢嶋楯子とキリスト教

- (1) 楯子とキリスト教の出会い
- (2) 楯子のキリスト教受容
- (3) キリスト教と学校教育

III 矢嶋楯子と生涯闘争

- (1) 日本キリスト教婦人矯風会の活動
- (2) 禁酒運動をめぐって
- (3) 思想信条を賭けた生涯闘争

結びにかえて

はじめに

1886（明治19）年、日本における近代最初のキリスト教婦人団体が誕生した。会員56名、初代会頭には当時桜井女学校校長代理の職にあった矢嶋楯子が選出された。この団体はアメリカに生まれたWoman's

Christian Temperance (禁酒) Unionを「矯風会」と訳し、「我が国総体の風を矯めん」という意気込みから出発している。日本の女性プロテスタント信者による社会福祉事業の始まりだった。楳子が53歳だった当時の日本は、宣教師を中心とする医療、福祉、教育活動が各地で活発化しており、楳子も女性宣教師マリア・ツルーの薫陶を受け、その人格に傾倒しキリスト者となっていたのである。楳子は25歳から35歳まで酒害による過酷な結婚生活を体験している。

楳子の生まれ育った熊本は当時からきわめて封建的な社会で、男尊女卑の土地柄でもあった。しかも夫は酒乱であり、酔うと暴力を振るわれ、体を酷使して失明寸前までいった。性根が尽き果て、乳飲み子を抱えて夫から逃れ、自ら離婚の意志を表明した楳子に対して社会の風あたりは冷たかった。今なら理解も同情もされるだろうが、当時は儒教の「三従の教え」が婦人の従う道だと言われ、出戻りの女は悪者扱いされたのである。楳子の甥である徳富蘆花の妻愛子でさえ、楳子の死後まで「夫を捨てた」と言って非難している¹⁾。晩年の楳子は、夫が酒さえ止めてくれたら辛抱できたと話しているが、当時は酒害が及ぼす家族への影響など頓着せぬ社会状況があった²⁾。その楳子の傷ついた心を捉えたのが、「万国の婦人よ、協力せよ」のスローガンを掲げてやって来たアメリカ人女性ミセス・メリー・クレメント・レビットの講演だった。「社会から酒の害を失くさなければ、女性の解放はない」という演説に感動したのである。夫の白酒に苦しんだ楳子は離婚の痛手から感ずる事が多く、矯風会設立に際し禁酒禁煙を出発点としたが、日本の婦人運動は「一夫一婦の実現」、「公娼制度の廃止」という人権闘争を必要としていた。

2004(平成16)年6月17日、『朝日新聞』夕刊のトップにアルコール依存症の数「全国推計82万人」という大見出しが載っていた。厚生労働省の研究班が世界保健機関の基準に基づき全国調査で明らかになったものである。適度な酒量は百薬の長といわれるように、酒はストレスの解消や人間関係を円滑にするためには役立つが、反面その害も深刻であることは現在に至るまで変わらないといえよう。習慣的大量飲酒によって起こるアルコール依存症は、一度罹ると酒量のコントロールが効かなくなり、家族までも巻き込む厄介な難病だと言われるようになっている。医学が発達した現代であればこそ解明も出来た難病といえるが、今から130年以上も前には封建的家族制度に縛られた多くの女性たちが、酒害の被害を受け、悩み苦しんでいたのである。当時酒乱という認識はあっても、「依存症」という医学的な言葉も、救済対策もなかったからである。楳子は離婚を選択した自分の事を「私は家庭の失敗者」と言っているが、果たして本当に失敗者と言えるだろうか。

明治期一般の日本社会における婦人の地位向上や、酒・廃娼運動等の広範な社会問題に活発に取り組んだのは、キリスト教を受容した日本人キリスト者の働きと宣教師を初めとする教会の強力な支援であったことは否めない。明治初期、矯風会が創立される以前から酒害の影響を憂えた人達の中に禁酒会が創立され、紆余曲折を経て昭和の時代には断酒会として現在も活発な活動が継続されている³⁾。今回の研究の一つとして、私も断酒会の講演会や修養会に参加してその取り組み状況を観察してきた。現在の酒害による取り組みは宗教宗派に偏らないということが断酒会の目的にもあるが、断酒会の基にあった禁酒運動の働きに、キリスト教という宗教が大きな力を発揮していた事は歴史的にも知られるところである。19世紀半ば、宣教師によってプロテスタント・キリスト教が日本に導入されて以来、そこから社会事業・教育事業などが始められた。明治・大正期を通じて矯風運動に奔走したキリスト者の楳子は、社会事業の先駆的逸材とも言えるだろう。

本研究では、キリスト教を受容するまでの楳子の思想がどのような環境で形成され、活動に生かすことが出来たのかを、女子学院院長・日本キリスト教婦人矯風会会頭としての揺るぎない地位を確立してきた歴史的背景を辿りながら、キリスト教に支えられた楳子の闘いを考察する。

I 矢嶋楯子の思想形成

(1) 矢嶋楯子の生家と教育

矢嶋楯子は1833（天保4）年4月24日、熊本県上益城郡木山町の庄屋の家に9人兄弟の第8子として生まれた。男子は総領に直方という兄がいるだけだったので、男子誕生を心待ちしていた一家の落胆は大きかった。お七夜を過ぎても名前がもらえなかったのが「かつ」と付けたという。大勢の姉妹の中で育った楯子は、「腹が立たないので自然喧嘩も出来なかった」と自ら言うほど、無口で目立たず、皆からは「渋柿」というあだ名をもらっていた。父親の忠左衛門は易もやれば医者への代りも勤めるというほどの何事も器用な人だった。文武両道に優れ、庄屋と代官という当時の行政、警察権力を持つ実力者でもあり、自分の子供たちには自ら「孟子」を教えるなどの教育をした。母親の鶴も学問を好んだ人物で、娘たちに家事一切を教えると共に「論語」や、「女大学」の手ほどきもした。一巻の「躰方」という薄い手引き草子を用い、男女8人の子供の教育に心を砕いていったという。一般の母親などに衛生面や医学上の知識のない時代にも母鶴子は全てにおいて勝っていた。井戸の水を煮沸して飲ませたり、過食を禁じたり、子弟の養育には非常な知識があったということも楯子も後に述べている。1911（明治44）年の『婦女新聞』に掲載された貧民窟の衛生観念を見ても、明治以前の時代、母鶴子の教養の高さが如何なるものか頷ける話である⁴⁾。

女子に教育が無用とされ、家事と機織りが大事とされた家父長的時代である。当然、楯子は寺子屋も行かずに教育は母鶴子から受けただけであつたが、「一度聞いたなら二度尋ねるものではない」と、覚悟して勉強に励んだという。家庭は学校教育と同じだったのである⁵⁾。母が自ら規矩を示して自啓自発を待つ教育は、個性豊かな子供達を育くみ、その子供たちは長じてそれぞれが社会的名声を博することになったのである。温厚で辛抱強い三女の順子は竹崎律次郎に嫁ぎ、後に熊本女学校の校長となった。才気煥発な四女の久子は幼少からその性質を見込まれ、後に徳富家へ嫁いで蘇峰・蘆花兄弟の母となり、五女の姉・つせ子は幕末の政治家横井小楠の妻となった。後に社会事業家として名を成した楯子を陰から支えた姉妹ら4人は、「熊本県四賢女」と今も称えられている。

母鶴子は1853（嘉永6）年楯子が嫁ぐ前に亡くなっているが、楯子が教わった「女大学」は女性としての楯子の人権を尊ぶものではなかった。母鶴子の薫陶を受けた楯子は嫁いだ林家でその教えを守るべく奮闘したが、夫の酒による被害に耐え切れず、無念の復籍をしている。楯子の夫を含め、姉妹の夫達はみな横井の門下生であつた。しかし三女の順子の夫を除いては、大酒飲みで妾もいたというが離縁となったのは楯子だけだつた。楯子は後年、矯風会の会頭としての演説で自ら「三従の教え」を批判しているが、当時の日本社会には家族主義の伝統がしっかりと息づいていた⁶⁾。長子相続が原則であり、長男が生まれれば「家」は安泰となるだけでなく、嫁の位置も安定したのである。姉の久子が嫁いだ徳富家でも、女子が4人も続いて生まれた時は4女に初子と皮肉って名づけたほどで、5子に男子として誕生した蘇峰は別格扱いで育てられたという。「家」の存続が重んじられ、女は跡継ぎを産む道具と考えられ、妾を持つ風習が堂々とまかり通った。当時の男尊女卑の風潮のある社会では、女は耐えるだけだつたのである。

冠婚葬祭を始めとして、日常お互いの交際に至るまで酒が用いられ、楯子は結婚して痛切に酒害の恐るべき事を体験している。夫は酒を飲まぬものは武士ではないという悪習慣に捕われ、人を見下げる事を何とも思わない家風に育っていた。楯子が眼病を煩っても医者にも診てもらえぬ家庭環境は、配下で医学の志ある人には学資を出しても学ばせたという父の高邁なる精神を思う時、異なる思想のギャップに耐え切れなくなつてしまつたのである。楯子の思想は男優位の時代風潮と自らの体験により、思想の変革を迫られたのであるが、その第一の行動が、自らの黒髪をばつさり切り、離縁の意思表明をしたことだつた⁷⁾。嫁しては夫に従うという「三従の教え」を拒絶したのである。第二は名前を改名したことである。東京猿楽町にいる兄直方の看病の為上京する際、その途上に長崎港の船の出入りを見つめ、

船を動かす楫の力に感心して自分の名前を楫子と改めた。自分の新しい人生の船出には新しい名前が必要である、人生の楫は自ら取るのだという決意を込めて「楫子」という名前に未来を託したのである。楫子が儒教道德の教えを斥け、自分で人生の楫を取れる女性へと新たな一歩を踏み出したのは1872（明治5）年だった^{8）}。

（2）熊本洋学校とキリスト教・・・楫子の思想変革の環境。

楫子の故郷・肥後、今の熊本は天草の騒動や島原の一揆などがあり、早くからキリスト教が伝道されていた。キリシタン禁制の時代には、臣民の第一の忠義は絵踏みであったといわれ、楫子も幼い時には子供心にも物珍しく、足で踏む光景をこっそり垣根の外から覗いたことがあったという^{9）}。極めて封建的な熊本社会では1869（明治2）年に横井小楠が耶穌教かぶれの売国奴として暗殺されており、その年にも、藩類族御改所からは「切支丹宗門改は怠りなく行え、来春奉公人出替時分、新参は申すに及ばず居続きの者並びに譜代の男女とも入念に相改めよ」との厳重な達しがあったのである^{10）}。

それから2年後に熊本に洋学校が設立されたのは、親実学党派の青年貴公子である細川護久が肥後の維新を大胆に推し進め、大改革に乗り出したからである。当然、人事の面では楫子の縁戚に連なる実学党の人材が名を連ねた。徳富家に寄寓していた楫子は竹崎・徳富両義兄が小楠亡き後、改革案作成に日夜奮闘するのを垣間見て生活してきた。肥後の実学派のトップである横井小楠の門下生として、昔から財政的にも支えてきた矢嶋一族の苦勞がやっと報われ、小楠の理想が実現したのである。楫子は横井小楠が部屋住の頃を回想し、「横井先生のために何事かと言えば一番先に駆けつけるのが矢嶋、金を持って出るのが徳富、奔走するのが河瀬という風によく兄弟仲の善かったものでした」と一族の師に対する献身を語っている^{11）}。賢夫人と言われた楫子の母も、いつも小楠の話し相手であり、楫子は小楠たち男子の討論を壁にすり耳をして聞いたという。それは天下国家から耶穌教の話等、楫子の好奇心を刺激するものだった^{12）}。

1871（明治4）年、熊本洋学校が開設されアメリカからリロイ・ランシング・ジェーンズが教師として招かれた。ジェーンズの教育は全寮制で、日本初の男女共学という点も含め、婦人に優しくし、弱い者を助ける騎士道精神を説いたきわめて特徴のある教育だった^{13）}。男子中たった二人だけの女子生徒だった楫子の姪・横井みや子と徳富初子は、男子生徒による女性蔑視の環境の中でも、勉学に励み、後年はキリスト者としての信念に基き立派に楫子の矯風活動を支えている。当時、男子七歳にして席を同じうせずの儒教精神に燃えていた海老名喜三郎（弾正）は「日本にいる外国人で、ジェーンズほど大きな感化を及ぼしたものは無い」と、後に語っている^{14）}。それは、熊本洋学校から一度に大勢のプロテスタント集団が誕生したことからも頷けることである。1876（明治9）年、熊本の花岡山で洋学校35人の若者が花岡山に登り、祈禱会を開きキリスト教によって祖国を救うという趣旨の「奉教趣意書」に署名制約したのであるが、この花岡山上でのキリスト教派の結盟は、洋学校生の間でも大きな波紋を呼び起こし、これに対する儒教派36名の反発となって現れた^{15）}。1873（明治6）年にキリスト教禁令の高札が撤去されていたとはいえ、長年キリスト教を邪教として扱ってきたことから来る偏見は根強いものだったのである。

趣意書の署名にある洋学校1回生の伊勢（横井）時雄（小楠嫡子）、2回生の海老名喜三郎（弾正）3回生の徳富猪一郎（蘇峰）らは、いずれも矢嶋楫子の縁者であり、後に郷土が誇る人材となってキリスト教史に残る活動をしているが、それは「教育と宗教によって国に仕えること」という、ジェーンズの教育理念でもあり、横井小楠が甥たちの渡航時に与えた「堯舜孔子の道・・・」の思想にも共通するものだった^{16）}。明治元年の春、自ら夫と離縁した楫子は、懐に赤ん坊の達子を抱き姉妹の家々に寄寓していたが、当時の学者としては早くからキリスト教に関心を持った小楠は「耶穌というのは、神でも人でもなく、一つのものであって死んで刑磔にあがって初めて此ヤソの事業があがった。ハリツケが其人の成功であった」と、耶穌教について楫子に語ったことがあるという^{17）}。横井小楠との家族的交わりは、楫

子の思想の根底に儒教への懐疑、キリスト教への関心をもたらしている。寺子屋も行かず家庭が学問の場であった楯子にとって、熊本の実学派の開明的思想は、直接教えられることがなかったにしても自然感化となり、女性として自立する上での思想形成に有益な学問になったと推察できる。

(3) プロテスタンティズム導入と日本の近代化

熊本洋学校の建学の目的は、「西洋器械の術」を求めることであり、ジェーンズには西洋文明の物質的側面だけを求めたのであったが、結果として「熊本バンド」という有為のプロテスタントが育まれた。ジェーンズは著書『熊本回想』の中で「人間を鼓舞し、生きる意欲を奮い立たせるものを、彼らはキリスト教に期待していた」と述べている¹⁸⁾。明治初期に入信し、のちにキリスト教指導者となった多くの人たちは、佐幕派出身の士族階級であった。自己の生活の安定や栄達、家名の再興や旧藩の復興を願い洋学を志したのである。このころ熊本洋学校に入学したものの多くも、政治に興味を持ち、将来は大臣、参議になり、日本の政界を指導したいと考えていたのであった¹⁹⁾。しかし、その理想はアメリカから来た一人の教師の感化によってキリスト教への関心へ導かれたのである。

安政5年にアメリカ総領事タウンゼント・ハリスと幕府全権井上信濃守・岩瀬肥後守との間に条約が締結された時、ハリスは当時上海に居た友人の聖公会宣教師に「日本宣教の将来の成功は派遣される初代宣教師の性行、態度、人物によるものである。私見をもってすれば、学校を興し、英語を教え、貧民に施療するが如きことは最も伝道のために有益な働きとなるであろう²⁰⁾」と、このような書簡を送っているが、一度に多くの若者にキリスト教感化をもたらしたジェーンズは、正にその大きな働き人だったといえる。著書である『生産初歩』の序文の冒頭に「余此書ヲ著ス八肥後人民耕作ノ進歩に良全ノ教導ヲ示シ傍ラ国人許多ノ疑問に答フルニアリ」と著述の目的を述べているように、南北戦争の後、軍を辞して農業に従事していたことから、実学派の人々とも親交を結び、竹崎律次郎らにも農業生産の指導をしている²¹⁾。ジェーンズ夫人も料理裁縫等の家庭的知識を与え、実学社中の女達は見習い聞き習い、実学社中は竹崎律次郎を筆頭にいずれも夫妻の大きな物質的恩恵に与った²²⁾。ジェーンズが19世紀の欧米の高い水準の教育を実行し、経世家としても地域住民の生活向上、殖産興業へ果たした貢献度は高く評価されるに値する。

花岡山の件以来、熊本の世情は混乱を極め、ジェーンズはますます身の危険を感じるようになっていたが、それは彼が熊本に来る以前から日本で活動していた宣教師にも当てはまるものであった。外国人暗殺の続いていた江戸や横浜の様子を懸念するヘボンも、書簡の中で「私どもの安全を保障するために神奈川に住っている人々はみな横浜へ移転しなければならない」と書いている²³⁾。明治初期のプロテスタント・キリスト教の導入は、不安定な世情の中にも宣教師たちの強い信念に裏打ちされた活動によって、少しずつ人々との間の信頼が育まれていった。熊本洋学校教師の人選を依頼され、日本からの留学生の橋渡しをしたフルベッキも、佐賀藩立の長崎致遠館の教師時代に大隈重信や伊藤博文を教えた事から、後に幕府に重用されている²⁴⁾。

フルベッキの依頼でジェーンズを熊本洋学校に派遣した、アメリカ改革派教会外国伝道局総主事のジョン・M・フェリス博士も、維新前後の数年間日本人留学生の受入れに尽力している。熊本では横井小楠の甥である左平太、太平を初めとして、日本中からアメリカへ留学した日本人学生は500人以上といわれるが、その半数以上がフェリス博士に何らかの形で世話になり、日本人留学生の父と仰がれたという²⁵⁾。熊本洋学校で教育を受けた有志達は、キリスト教主義の学校、同志社でさらに神学を学び、後にキリスト者の先輩でもある楯子に協力して、禁酒や廃娯等のさまざまな社会改革運動を補強する力となっていったのである。キリスト教を基盤とする教育事業の影響は、ここ熊本の一地域においても、日本の近代文化の形成に大きな功績を持つ事になった。

Ⅱ 矢嶋楯子とキリスト教

(1) 楯子とキリスト教の出会い

楯子が上京した1872（明治5）年は、まだキリスト教禁止の高札は降ろされていなかったが、各地では洋学熱の高まりで宣教師による学校教育が始められていた。楯子が教育を目指したのは看病していた兄の影響が大きかった。楯子自身も福沢諭吉の「西洋事情」を読んで啓発され、四十歳で小学校教員伝習所に通い自己の勉学に取り組んだのである²⁶。自己の将来について進路を模索し始めたとき、日本に初めて学制が布かれ、義務教育が始まっている。楯子は伝習所の若い友人から木版で書かれた新約聖書を貰ったことで、教会に行ったが、最初は違和感を覚えて行く気がしなかったという。祈りの中にある「我らの罪を許し給え」という言葉に囚われたからである²⁷。楯子が聖書の理解を求めていた当時は、キリスト教を宗教としてよりも西欧文明の精神を理解する手立てとして強い関心を持つ人が多かった。楯子も最初はそうだった。しかし数多く説教を聴くにつれ、その内容に引かれていったのである。

楯子の回想によると、伝習所では、「心の広い人と思う方はキリスト教を信じており、もっと深く聞いてみたいと思った」と述べている²⁸。楯子の受洗した宣教師タムソンが、楯子に直接どんな説教をしたのかは詳しくは書かれていないが、楯子の受洗する2年前、やはりタムソンから洗礼を受けたガントレット恒子の母親の言葉に、共通するものがある。恒子の母親は「聖書は漢語で読めないし、賛美歌は分からず、説教も理解できなかったが、ただ一つ苦悩を聞いて下さる神様があるということを知り、ひたすらその一言にすがりついた」というのである²⁹。楯子も「私は求め求めました、私は傲慢で満ちていると悟りました」と難解な聖書を少しずつ理解していった自分を発見している。

教会員や牧師の親切な環境は、楯子に新しい生き方、考え方があることを教えてくれた。楯子は「西洋婦人の徳の高い人と一緒に働いて共に日常生活して見たなら神様を知る事も出来ようと思っていました」と語っているが、この気持ちを知ってツルー（Mary・T・True）を紹介してくれたのが親切な安川亨牧師だった³⁰。楯子は「ツルーさんがなかったら、私は信者になることはできなかったかもしれません」と言う³¹。しかし、楯子が洗礼を受けたのはそれから大分あとのことである。なぜなら、楯子の性質である「解るまでは動かぬ」という自覚の表明に基くものだった。

(2) 楯子のキリスト教受容

楯子は『新女界』紙面において、わが自覚の時と称し精神的変遷を三段階に分けている。

第一段階は子守を疎かにして母親に叱られて以来、自分を律するために「古歌とお守り」を「お護符袋」にして身につけ、戒めにしたことである。第二段階はツルーと出会い宗教を超えた人情という愛に触れた時である。第三段階は日曜ごとに教会に行き、救いの道が分かり、受洗を決意した時だという。楯子が洗礼を受けたいとの知らせを聞いた時は、ツルーもタムソンも涙を流して喜んでくれた。楯子は当時を回想し「重荷を卸したように、只感涙に咽ぶのみでありました」と述べている³²。楯子は長い間重荷を背負ってきたのであった。七夜に名前も貰えず、歓迎されずに生まれた楯子は「父からは愛されたが、母は難しい人でした」と語っている。賢母といわれる母には何も褒められた事はなく、たった一度だけであるが箸箱が割れるほどに叱られたことがあるという³³。この体験を楯子は第一の自覚にあげているが、楯子にとってはよほど大きな心の衝撃だったに違いない。年齢40を越えても手放すことが出来ないほど大事なお守りだったのだから、それは愛される事のなかった自分に対する母の愛情の身代わりになっていたともいえよう。しかし、その大事なものがツルーと出会うことにより価値を失う事になったのである。

第二段階では、ツルーは初対面の時から楯子に一言もキリスト教を勧めなかった。学校教育では、楯子の全てをあるがままに受け、ただ信じ、任せてくれたという³⁴。それが愛という強い信頼となってキリスト教へと導かれることになった。楯子は「私の毎日の生活の第一はツルーさんを読む事でした」と

回想している³⁵⁾。楯子よりも年齢は若い、何事にも寛容なツルーの人格の素晴らしさは、ツルーに接した他の多くの日本人も認めるところであった³⁶⁾。聖書を学んだ楯子が熊本へ帰省するとき、他者でありながら自分のことのように真剣に祈ってくれるツルーに心を打たれた楯子は、「お護符袋」を偶像とみなされることに躊躇し、汐止橋の上から投げ捨てたのである。この行為は母の愛からキリストの愛へと、変革を遂げた楯子の、自覚という愛の変遷の証明である。

やがて心の変遷は第三段階である受容という実を育み、楯子は涙を流して神と結ばれることになった。「キリスト教を信じるようになり、始めて光を得、希望を生じ、この忌むべき性質さへ薄紙を剥くごとくに癒えて来ました」とも語っている。キリスト教という精神的支柱を得た楯子はそれからの生涯をキリスト教教育者として、社会事業家として精力的に活動することになったが、それは苦悩の一物を胸の片隅に生涯抱える葛藤の始まりだった。

久不白落実の『矢嶋楯子伝』によると、明治5年から11年までの6年間は楯子にとって暗中模索の時代であるとして、3つの問題を提起している。(1) 酒の問題、(2) 女性としての内なる人の問題。(3) 神とは誰なのか、ということである³⁷⁾。楯子自身も「東京に出て10年までの時代はまっくらな時代でした」と後に語っている。この三つの問題のうち二つは、ツルーを知る事によって信仰に導かれ神を知る事が出来たし、神を知る事により酒の問題も、後に禁酒運動の推進力となって解決されたのである。しかし女性としての内なる問題だけは楯子に重い罪の意識を育てることになった。落実は「人間の弱さから、心の闇に迷い込んで悩みぬいた」としか書いてはいないが、それは妻子ある男性を愛して子供を設けたことであった。楯子は神を知り苦悩から解放されたが、神を知ったために、返って罪の箍を科せられたといえる。なぜなら、当時では教育者としても、後の矯風運動の先駆者としても、この問題は公には出来ないことだったからである。神を求めて模索を続けた楯子は、儒教と違うキリスト教に新しいモラルのあり方を求め、婦人宣教師ツルーの、人格的感化を受けて48歳にしてキリスト信者となったのである。

(3) キリスト教と学校教育・・・宣教師の人格的感化

1858(安政5)年に日米修好通商条約が締結されると、安政6年から各派のキリスト教宣教師が来日し、禁教下においても英語塾など、西洋文明による教育が各地でおこなわれるようになった。1870(明治3)年、カロソルス夫人(Julia Carrothers)が築地居留地にミッションボードの援助を受けないA六番女学校(桜井女学校、新栄女学校の時代を経て女子学院となる)を開設し、横浜でもヘボン施療所の一室でミス・キダーが女子のための教育(フェリス女学院の前身)を始めたが、これは女子ミッションスクールの嚆矢となった。楯子に人格的感化を及ぼしたマリア・ツルーも、夫の夢であった日本伝道の志を継いで単身で伝道のため来日している。

宗派は異なるがミッションの学校はいずれも宣教への強い使命感で運営されていたのである。楯子は新栄女学校の中でのツルーの伝道の心持を「随分いい家のお嬢さん達が多くありました。おつきに御隠居さんが付き添って来られるなどというので、この人々に伝道がしたかったのです。私などの働きは其の方へ必要であったのでしょうか」と語っている。楯子はツルーの意を受けて学校経営にあたり、キリスト教女学校としての特色ある教育を断行したのである。ツルーの教え子だった田村えい子の回想によると「ミセス・ツルーは本当に謙遜な人で、いつも矢嶋さんを立て、矢島さんも聡明でしたから常にミセス・ツルーに聞いてやりましたから、何の問題もなく極めてスムーズに発展したのだと思います」とある³⁸⁾。二人の信頼関係が教育に大きな役割を果たしたのである。

楯子の特色ある教育とは徹底した英語教育と寄宿舎の規則など一か条もないという自治教育であった。楯子は「あなた方は聖書を持っています、自分を自分で治めなさい」と口癖のように言ったという。英語教育に関しても「日本の学問の程度は師範学校に遜色ないものと標準を定め、そのうえ英語が出来るようにしたい」という初志を、寝食を共にする生徒に自由と自治を与えながら貫いたわけである。しか

し、全てが教育上好意を持って受け入れられたわけではなかった。女子学院で学んだ久布白落実は「英語を日本語同様に時間をかけて仕上げるなどは年中批評の的となったが校長はビクともしなかった」と述べている³⁹⁾。

キリスト者による宗教的情操教育は、確かに自然と生徒を薫陶することになったに違いない。例えば1章でも取り上げた熊本洋学校のジェーンズであるが、彼は厳しい校則を設け、厳格な集団生活を維持した。後に同志社に転向した学生たちは、学校の風紀上の差に最初は失望するが、改革案を作って新島校長に進言し、禁酒禁煙を断行し、それは初代同志社の規則となって運営されたという。洋学校教師の厳しくとも高潔で、模範的な生き方を彼らも踏襲したのであった。楳子の宗教生活もツルー夫人によって開かれたものである「人を動かす最大のものは雄弁に非ずして偉大なる沈黙である」と楳子は言っている⁴⁰⁾。ツルーの信仰に立つ行いを見て深く感じた楳子の至言である。

キリスト者達を中心に始められた学校教育は、女子において高等教育に先鞭をつけたが、社会事業においても同様だった。楳子の矯風会もここから誕生したからである。米国長老教会宣教師インブリーも30年間の日本伝道の体験をふまえ、女子学院を事例にあげて日本におけるキリスト教教育の大いなる成果を評価している。しかし、それは「精神を能く磨き真に高尚なる志をお立てなさい」と説いたツルーの理念に合うものでもあったろう⁴¹⁾。矯風会活動に見られるように、楳子の薫陶を受けた生徒の中には社会に出てからも楳子と学校を支え、「社会の弊風を矯めん」という高尚なる志を持って社会的活動に従事した者も多数あるからである。明治期、キリスト教と学校教育は文明開化を推し進めた政府にとっても、社会の片隅で光を求めていた人々にとっても、有益な働きをしたことは否めない事実であった。

Ⅲ 矢嶋楳子と生涯闘争

(1) 日本キリスト教婦人矯風会の活動・・・『婦人新報』から読む活動

『東京婦人矯風雑誌』第56号の社説に「矯風とはなんぞや」として矯風の意義が詳しく掲載されている。「今日の社会にお行はるゝ悪しき風習と言へば、娼妓の制度も其中にあり・・・」として、楳子は積極的に娼妓問題に取り組んで行ったのである。当初、矯風会は世間から「外国の模倣事業、キリスト教的思想の直輸入」等と非難を浴び、同じキリスト教の牧師たちからも「狂風会」と呼ばれて批判もあった。これに関して福音同盟会に楳子の代理として出席した潮田千勢子は「婦人矯風会事業の現状」の講話として「矯風会は他の婦人団体が未だ発達せざる先に生まれたので、自然お転婆にも見え、誤解も招いたのでございます」と語っている⁴²⁾。

楳子たちは、婦人団体としても初であり、この『東京婦人矯風雑誌』も女性の手になる初めての機関誌で、1893年『婦人矯風雑誌』95年『婦人新報』と改称し、社会の悪風を糾弾している。楳子は矯風会設立の動機を「不良の子女を出す家庭は親の不行跡にあり、教育者としても禁酒禁煙、一夫一婦の唱道が大切だと強く感じたからである」と述べている⁴³⁾。1916年の『婦人新報』233号に「貞操問題の淵源」として、会の誕生から活動に至った経緯が掲載されている。楳子は「矯風会が公娼廃止問題を掲げて起き、貞操問題を叫び、一夫一婦の請願を議会に提出し、飛田問題で政府と戦うに至ったのも、突発した問題ではなく遠い淵源がある」として、巖本善治他、男性キリスト者たちの尽力を述べている。矯風会は婦人という名が付くが、男性会員もあり、請願に関しても法律に熟知した政治家の存在は欠かせないものであった。矯風会創立以来、1889（明治22）年に一夫一婦確立の建白の請願を提出し続け、1892（明治25）年には在外売淫婦取締法制定を加え、二つの請願を政府に毎年提出してきているが、時代はキリスト者の道徳観念から遠く外れるほどの風紀紊乱状態だった。

組合教会牧師の宮川経輝は、日本人は世界一の不潔として「ある外国人の著書中、日本婦人の七人中、一人は必ず醜業婦だと書いている」と嘆く⁴⁴⁾。津田梅子も洋書に書かれている吉原遊郭の内容が日本の品位を下し、国辱を招いているとして「どうか今少し一般の婦人方にご注意を願って・・・」と意見して

いる⁴⁵。明治の日本社会は経済的支配階級をめぐって貴婦人や芸者等が華やかに時代の脚光を浴び、女性は芸者や酌婦などを足がかりとして「玉の輿」の僥倖をえたという。楳子が一夫一婦の請願を提出したときの首相、伊藤博文の妻、梅子も下関の芸者であり、皇室をはじめ官吏や政治家、実業家に妻妾同居の風習が存在していた時代だった。支配階級と芸者の存在は引き離して考えることはできなかったのである⁴⁶。かつて熊本で教鞭をとっていたジェーンズも、あけっぴろげな日本人の浴場や芸者町の情景などを「悪い考え」を大いに刺激すると指摘している⁴⁷。ヘボンですら「この国民ほど肉欲の罪に耽って恥じない国民を見たことはありません」と日本の事情を書簡に記している⁴⁸。厳格なキリスト教倫理を、身を持って実践しているキリスト者と、一般的日本人の性道徳観念の大きな隔たりといえよう。

1872（明治5）年、マリア・ルース号事件を契機に、日本は国際対面上、名目的に芸妓娼を解放した。明治政府は直後に従来の遊郭制度を貸し座敷制度に改め、近代公娼制を確立させたのである。しかし、群馬県の遊郭廃止の令を機運として、全国的に廃娼運動が盛り上がり、1890（明治23）年に全国廃娼同盟会が結成されると、矯風会も参加団体に加わった。日本の廃娼運動の中でも、娼妓救出の先鞭をつけたのは名古屋美善教会のアメリカ人宣教師U・G・モルフィであった。婦女新聞は、廃娼運動の実績と題し「矯風会は口舌による廃娼思想による宣伝に努むるのみ」と厳しく批判している⁴⁹。しかし、モルフィに続いて救世軍の体を張った救い出しが行われると、楳子たちも彼らの運動と連動し、活動は広げられたのである。

楳子は各地で遊郭建設の動きを察知すると出かけて、反対運動の第一線に立った。母親のデモとして百人以上の女性たちが公娼反対に立ち上がったのも日本初の試みだったが、反対運動は敗北し参政権獲得の必要を痛感したのである。楳子は後に「実に見事な失敗でございました。しかしながら、少しも残念という節がありません」と言う。それは楳子の信仰における「なすべき分は尽くして余りある」という自覚だった。矢嶋の下では男性キリスト者の貢献、人脈の厚さは組織の生命を維持する絶対的条件だったが、何よりの強みは矯風会創立時から名前を連ねている親戚筋の縁の下的協力だった。特に姉の徳富久子は、妹の楳子を鼓舞して社会的に活動させたと蘇峰や蘆花も著書で述べている。男女の純潔、一夫一婦制の道徳は、楳子の思想に精力的な廃娼運動というエネルギーを与え、より厳格な信仰心を育んでいった。日本キリスト教婦人矯風会の活動を支えたのは、キリスト教という強い信仰の力だった。

（2）禁酒運動をめぐって

英語のテンペランスは禁酒や節制を意味したが、楳子たち日本の矯風会は広義の解釈をもって禁酒を含む人権闘争に邁進した。その婦人矯風会よりも先に、わが国に最初に禁酒会ができたのは、1873（明治6）年、横浜に外国人船員による禁酒会が最初である。この会はずぐ消滅したが、この運動がきっかけで日本人による最初の横浜禁酒会が1875（明治8）年6月に設けられている。その後1876（明治9）年には札幌農学校のクラーク博士に教わった伊藤一隆ら13人の同校第一期生たちが、禁酒禁煙を誓い、誓約書にサインしており、全国的に禁酒運動が活発化したのは日本キリスト教矯風会が創立された明治19（1886）年以降であった。レビット夫人の来日で婦人矯風会より先に、日本各地には禁酒会が設立されていたが、1890（明治23）年、世界矯風会の第2回特派員ジェシー・アッケルマンらの禁酒遊説を機に盛り上がり、東京でも禁酒会が誕生したのである。

この設立には楳子の右大臣、左大臣と評された潮田千勢子と佐々城豊寿の力が大きかったという。アッケルマンの書簡には「彼らは{婦人キリスト教禁酒会}の会名を変じたれども、きわめて勢力ある婦人会ありて、禁酒はその事業の中の一に居れり。禁酒雑誌も数種ありて、そのうち婦人ら自身にて発行するものも一個あり」と述べている⁵⁰。楳子たちは、雑誌『酒の害』を発行し、飲酒の弊害を説き、頁の最後に会の趣意書を掲載している。特に「東京府下病症類別死亡表」にある酒毒関係区分の例は、当時としては啓蒙的な調査に値するだろう⁵¹。これは医学社会が酒の濫用による危険性を唱える以前の話だからである。

これ以降各地の禁酒会も例に倣い、横浜禁酒会雑誌における鈴木元士医師の「アルコールの説」や、東京禁酒会の「禁酒問答」などにより、各地の禁酒会が社会への酒害啓蒙運動に励んでいるのが分かる⁵²。こうした雑誌の画期的なことは、禁酒ばかりではなく、酒に関わる世情の諸々の事情も取り上げている事である。『日本禁酒会雑誌』第5号には横浜市外に在る私娼は其の概数一千人に下らず、その私娼は日本人を相手とするにあらず・・」とある。まさに酒害啓蒙運動を通して社会改革に取り組むキリスト者たちの姿勢が雑誌からも読み取れる。青山学院の禁酒演説会では片山医学博士が「結核と花柳病と酒に原因する所の病氣、この三つを「社会病」とし、特に酒の害が深刻であると警告している⁵³。この状況原因は、大企業による日本酒の大量生産の拡大や、値段の上昇が拍車をかけたのである。日清・日露戦争で、政府は戦費調達のため日本酒やどぶろくの自家醸造を制限し、大企業の造る日本酒の値段を引き上げ、日露戦争の直前、国庫収入の実に約39%が酒税による収入だった。酒代が高くつく一般家庭では飲酒が即貧困に結びつきやすくなっていたのである。貧困と男尊女卑の社会で、飲酒の弊害は娘の身売りや海外醜業婦問題にまで発展したのである。東京禁酒会の根本副会長もアメリカ滞在中、酒と銃による惨劇を実際に見聞きしながら、酒害を現実問題として捉えたのである。根本は明治34年に未成年者飲酒禁止法案を提出したが、23年後の1922（大正11）年ようやく可決されている。

東京禁酒会は安藤太郎を会長、根本正を副会長とし、会の中心的役割を銀座教会が担ったことは『銀座教会百年史』にも記されているが、後年、楯子は安藤の活躍を評して「矯風会を真に燃やしつけたのは安藤太郎氏の力によること多く、その陰には夫人の力が大きい。家庭におけるキリスト教矯風主義を立派に行った手本である」と『婦人新報』で述べている。1890年代は大勢のキリスト者たちが積極的に禁酒運動を推進させて行った。楯子は「禁酒禁煙に就いては禁酒会あり、風俗の改善を促すに就いては廓清会あり、慈善救済に関しては救世軍があり」としながら、キリスト教主義に基く社会事業を誇りとして称えている⁵⁴。その結果、婦人矯風会が立ち上げた東京禁酒会は1898（明治31）年日本禁酒同盟となり、1953（昭和28）年、「断酒友の会」が創立され、平成の時代も生き続けている。各自治体では、保健所や精神保健福祉センター等で飲酒に関する正しい理解についての普及啓発、医療機関や断酒会の紹介などの支援が行われている。楯子たちの蒔いた禁酒運動の種は、近代国家の重要な支柱である福祉行政となって見事に開花したといえるだろう。

(3) 思想信条を賭けた生涯闘争・・・楯子の系譜における人間模様

楯子が思想の自己変革を辿っていた幕末・明治初年代は、日本全体で家をふくむ伝統的社会秩序が崩れていく時代だった。楯子の家系も厳格な儒教主義の上に横井小楠の新思想をついだ実学派の環境が身近にあったことは1章でも述べた。その実学派の門下生でもあった楯子の夫・林七郎の旧居が今も文化財と目される程の偉を現存しているという。『益城町史・通史編』の中にある林七郎は名士として存在し「伝記に七郎の酒乱の故とあるのは、確たる証左を得たものにあらず・・・楯子離縁の定説は不当・・」と記されている⁵⁵。

確かに楯子側の資料は、蘆花も久布白落実等、誰を探しても酒乱の他に見当たる言葉はなかった。通史では「蘆花が小説風の作為を加え、落実がそれを踏襲したものと思われる」とあるが、身びいきの感情ならそれも頷ける。しかし、これが楯子の身内であっても、楯子に良い感情を持っていない人間の話ならどうだろうか。蘆花の妻愛子は「私が母（楯子の姉久子）から聞きました話にも・・」と実際に聞いた話として、酒乱説を語っている。愛子には皮肉屋として知られる楯子との永い確執があった⁵⁶。楯子を糾弾する愛子の言葉に、あながち定説も信憑性を増してくる。そこには蘆花と同じ正直な一途さが感じられるからである。

楯子の死後、蘆花はすぐに「二つの秘密を残して死んだ叔母の霊前に捧ぐ」を発表し、過去の秘密を隠しては、人を導いたり、教えたりすることに嘘があると書き、「矢嶋叔母の絶筆について」では、不義の子をもうけた矢嶋叔母には懺悔がなかったと非難した⁵⁷。この事態を受けて落実は2年前に楯子

が告白した「全国の会員と知友の前に申す」を公表した。落実は「私は臆病で其の折を見出すことができなかった」と、懺悔は聞いたが公表できなかった理由を詫びている。そして「先生の生涯のこの1頁に対して、余りに打たれた」と苦しんだ胸の内を語る。落実も、楯子と蘆花の間に立って辛かったのである。「蘆花は親類中から半気遣いにされていたが、小さな小娘でも一人前に扱ってくれた」と、落実は蘆花に受けた親切を回想する⁵⁸⁾。

なぜここまでにして蘆花は世間に公表しなければ気がすまなかったのか。それは楯子の家系からもたらされた性格に起因している。例えば楯子の姉妹は、何れも並外れた丈夫な魂の持ち主と評されるほどの女傑ぞろいであった。その一人である楯子の人となり、甥の徳富蘇峰の言葉から見立ててみる。蘇峰は「私は如何なる具合であったか、幼少より此の叔母さんは嫌いでありました」と語る。楯子が離縁を決意し、娘の達子を抱えて徳富家に寄寓していた頃の思い出は決して良いものではなかったことが窺える。「先生は人にも物にも、恐れる事を知らぬ女性でありました。勇気は矢嶋家の持ち前でありましたが、先生にはむしろそれが頗る豊富でありました」と、感心もしている。確かに会頭としての活動は1921(大正10)年まで続き、その間74歳で一人万国大会に出席、89歳秋までに欧米に計3回、満州・朝鮮に1回という、老齢にして国際的規模の動きをしている。常に運動の先頭に立ってきた楯子は「東洋のウィラード」と呼ばれ、世界WCTUはその功績を称え1915(大正4)年、楯子の誕生日をジャパン・デイと定めたのである。

思想も意気もその肉体と共に衰えるのが普通であろうが、楯子は時代の進展と共に意気は衰える事がなかった。さらに蘇峰は「先生は無用に節して有用に使う人でありました。ただそれが余りに徹底的で、打算的にも、冷ややかにも、勤定づくめに、世を渡る人にも見えませんでした」と語る⁵⁹⁾。社会指導者の位置についた楯子にも、公と私の面に違いがあったことを、矯風会の書記をしていた佐々城豊寿の姪、相馬黒光も語っている。片腕となって働いた潮田千勢子との確執も性格的な悩み的一端だったのである⁶⁰⁾。老叔母に懺悔を求め、死後秘密を世間に示す蘆花の行動は、楯子と同じ血脈を感じても違和感はない。兄弟の確執があったとされる蘇峰は「蘆花は一度思い立てば周辺に如何なる影響が及ぼうと行動する性癖があった」と釈明する。蘇峰もやはり楯子と同じように世間に公開されている⁶¹⁾。これは一族に流れる強烈な個性の対立といえるだろう。

楯子の闘いは社会活動だけではなく、キリスト者としての、自分自身の罪との闘いでもあった。矯風会にとって、性の問題は決してなおざりにできぬ重要な柱だった。その矯風会の先頭に立ってきた楯子が、かつて妻子ある者の子を生んだという事実は、まさに晴天の霹靂だった。蘆花の暴露は大きな社会的反響をまき起こしたが『婦女新聞』七月五日号の社説では「之を事実としても・・人格的未熟から起こった不幸若しくは過失に過ぎない。そしてそれらの不幸や過失を、体験し、内省して、老女史の大なる人格は完成したのである・・」と記している。楯子は自分の秘密と弱さに向きあい、唯一神信仰というキリスト教に励まされながらも、苦しんで生き抜いてきた。自己の体験に基づいた罪認識は生涯つきまとってはいたが、キリスト教は矢嶋楯子にとって、かけがえのないものとして、楯子を大きく成長させる原動力になった。

結びにかえて

楯子が悩んでいた時代、熊本にはまだ禁酒会が存在しなかった。アルコール依存症の関連用語に「共依存者」という言葉がある。それは家族が依存症になり、苦しい思いをした人の事であるが、見方を変えれば人生や自分の生き方を真剣に考えるチャンスを得た人でもある。楯子の離婚は、むしろ自分を自立させ、客観的な目で世の中を見ることに向かわせた。そして自分たちで禁酒会を立ち上げた。その禁酒会が114年経過した現代に断酒会として受け継がれ、酒害に悩む人たちを支えている。その功績から

鑑みても、楯子は「家庭の失敗者」かもしれないが、楯子の選択は間違いではなかったと思うのである。これまでは楯子の系譜に関わる人脈を背景とした文献や資料を参考にしてきた。今後の研究計画としては、矯風会活動に関わる当時の雑誌や、キリスト教関連の雑誌等からも資料を収集して、さらに考察を深めて行きたい。

〔注〕

- 1) 徳富愛「矢嶋叔母さんと私」〔婦人公論〕1925年8月号 18頁。
- 2) 嶋楯子「酒に泣いた十年間」〔婦人画報〕増刊 1907年1月号 12頁。
- 3) 「禁酒新聞」財団法人日本禁酒同盟 2004年9月 第765号。
- 4) 矢嶋楯子、「八十九歳でも達者な自分」〔太陽〕臨時増刊号1921年 6月号 273頁。
- 5) 矢嶋楯子、「すぎこしかた」〔婦人新報〕第177号、93頁。
- 6) 矢嶋楯子、「逓信省官吏養成所に於ける演説」〔婦人新報〕第175号、1912年、25頁。
- 7) 徳富健次郎、「竹崎順子」〔蘆花全集〕第15巻、1929年、115頁。
- 8) 久布白落実「矢嶋楯子傳」不二屋書房、1935年、134頁。
- 9) 大濱徹也〔女子学院の歴史〔学校法人女子学院、1985年、575頁「新女界」第1巻第7号、1909年10月1日。〕
- 10) 近代熊本女性史年表刊行会「社会の動きと女性・熊本県公文類纂12 - 69」〔近代熊本女性史年表〕亜紀書房、1999年、1頁。
- 11) 守屋東「矢嶋楯子(三)」〔婦人新報〕第288号、1921年、24頁。
- 12) 同上書、23頁。
- 13) リロイ・ランシング・ジェーンズ〔熊本回想・ジェーンズ〕熊本日日新聞社、1991年46頁。
- 14) 三井久、「熊本バンド物語」〔近代日本の青年群像〕日本YMCA同盟出版部、1980年、219頁。
- 15) 三上一夫〔横井小楠・その思想と行動〕吉川弘文館、1999年、173頁。
- 16) 前掲書、「熊本バンド物語」184頁。
- 17) 前掲書、「矢嶋楯子(三)」23頁。
- 18) 前掲書〔熊本回想・ジェーンズ〕107頁。
- 19) 前掲書、「熊本バンド物語」183頁。
- 20) 日本基督教団牛込弘方町教会〔雲の柱・火の柱〕1977年、3頁。
- 21) 前掲書〔熊本回想・ジェーンズ〕157頁。
- 22) 前掲書「竹崎順子」143頁。
- 23) 高谷道男編訳〔ヘボン書簡集〕岩波書店、1959年、67頁。
- 24) 高谷道男編訳「フルベッキ略伝」〔フルベッキ書簡集〕新教出版社、1978年、11頁。
- 25) フェリス女学院編訳〔キダー書簡集〕教文館、1975年、176頁。
- 26) 矢嶋楯子「すぎこしかた」〔婦人新報〕第187号、21頁。
- 27) 前掲書〔婦人新報〕第175号、27頁。
- 28) 前掲書「すぎこしかた」22頁。
- 29) ガントレット恒〔七十七年の想ひ出〕植村書店、1949年、14頁。
- 30) 守屋東「矢嶋楯子(八)」〔婦人新報〕第300号、1922年、21頁。
- 31) 同上書、20頁。
- 32) 前掲書〔女子学院の歴史〕581頁、「新女界」第4巻第10号、1912年10月1日。

- 33) 守屋東「矢嶋楯子(七)」〔婦人新報〕299号、1922年、23頁。
- 34) 前掲書「矢嶋楯子(八)」24頁。
- 35) 同上書、20頁。
- 36) 前掲書〔女子学院の歴史〕590頁。「道」1957年1・2・3・4月合併号。
- 37) 前掲書〔矢嶋楯子傳〕151頁。
- 38) 前掲書〔女子学院の歴史〕598頁。
- 39) 久布白落実〔魔娼ひとすじ〕中央公論社、1982年、47頁。
- 40) 矢嶋楯子「因習打破」〔婦人新報〕第253号、1918年、2頁。
- 41) 前掲書、峯尾栄子口訳「善良なる模範の価値」〔女子学院の歴史〕587頁。
- 42) 潮田千勢子「婦人矯風会事業の現状」〔婦人新報〕第60号、1902年、17頁。
- 43) 矢嶋楯子「教育者の悔い」〔婦人新報〕第236号、1917年、2頁。
- 44) 宮川経輝「日本は世界一の不潔」〔婦人新報〕第187号、1913年、14頁。
- 45) 津田梅子〔婦女新聞〕第574号、1911年。
- 46) 高群逸枝〔日本女性社会史〕眞日本社、1947年、288頁。
- 47) 前掲書〔熊本回想・ジェーンズ〕55頁。
- 48) 前掲書〔ヘボン書簡集〔170~171頁〕。
- 49) 「魔娼運動の実績」〔婦女新聞〕第1672号、1932年。
- 50) 小塩完次〔日本禁酒運動の八十年〕(財)日本禁酒同盟、1970年、28頁。
- 51) 津田仙〔酒の害〕婦人矯風会、1888年、40頁。
- 52) 榊原守文〔禁酒問答〕東京禁酒会、1891年21頁。
- 53) 片山国嘉〔青年と禁酒〕教文館、1905年、5頁。
- 54) 矢嶋楯子〔婦人新報〕第214号、1915年、3頁。
- 55) 益城町史編纂委員会〔益城町史・通史編〕益城町、1990年、12頁。
- 56) 前掲書〔婦人公論〕15~19頁。
- 57) 前掲書〔婦人公論〕20~24頁。
- 58) 前掲書〔魔娼ひとすじ〕49頁。
- 59) 徳富蘇峰「矢嶋先生」〔婦人新報〕第331号、1925年、9~15頁。
- 60) 相馬黒光〔黙移・相馬黒光伝〕平凡社、1999年、320~322頁。
- 61) 徳富蘇峰〔弟・徳富蘆花〕中央文庫、2001年、112頁。

〔参考文献〕

- ・徳富健次郎『竹崎順子』〔蘆花全集〕第15巻、1929年。
- ・久布白落実〔矢嶋楯子伝〕不二家書房、1935年。
- ・リロイ・ランシング・ジェーンズ〔熊本回想・ジェーンズ〕熊本日日新聞社、1991年。
- ・三井久〔近代日本の青年群像〕日本YMCA同盟出版部、1980年。
- ・三上一夫〔横井小楠・その思想と行動〕吉川弘文館、1999年。
- ・土肥昭夫〔日本プロテスタント・キリスト教史〕新教出版社、1980年。
- ・高谷道男編訳〔ヘボン書簡集〕岩波書店、1959年。
- ・高谷道男編訳〔フルベッキ書簡集〕新教出版社、1978年。
- ・フェリス女学院編訳〔キダー書簡集〕教文館、1975年。
- ・ガントレット恒〔七十七年の想ひ出〕植村書店、1949年。

- ・大濱徹也『女子学院の歴史』学校法人女子学院、1985年。
- ・高群逸杖『日本女性社会史』眞日本社、1947年。
- ・久布白落実『糜娼ひとすじ』中央公論社、1982年。
- ・金子幸子『近代日本女性論の系譜』不二出版、1999年。
- ・(財)日本キリスト教婦人矯風会『日本キリスト教婦人矯風会』ドメス出版、1986年。
- ・相馬黒光『黙移・相馬黒光伝』平凡社、1999年。
- ・徳富蘇峰『弟・徳富蘆花』中央文庫、2001年。
- ・『婦人公論』1925年8月号。
- ・『婦人画法』増刊1907年1月号。
- ・『禁酒新聞』第765号(財)日本禁酒同盟、2004年9月号。
- ・『太陽』臨時増刊号1921年6月号。
- ・『婦人新報』第175号～ 婦人新報社、1912年。
- ・近代熊本女性史年表刊行会『近代熊本女性史年表』亜紀書房、1999年。
- ・日本キリスト教団牛込弘方町教会『雲の柱・火の柱』1977年。
- ・『新女界』第4巻、第10号、1912年。
- ・『婦女新聞』第574号～1911年。
- ・小塩完次『日本禁酒運動の八十年』(財)日本禁酒同盟、1970年。
- ・池田次郎吉編『禁酒雑誌』禁酒雑誌発行所、第1、5号、1890年。
- ・津田仙『酒の害』婦人矯風会、1888年。
- ・榊原守文『禁酒問答』東京禁酒会、1891年。
- ・嘉片山国嘉演説『青年と禁酒』教文館、1905年。
- ・益城町史編纂委員会『益城町史・通史編』益城町発行、1990年。

グローバル 第4号

2005年3月31日 発行

発行者 石島 紀之

発行所 横浜市泉区緑園4-5-3
フェリス女学院大学大学院
国際交流研究科
電話 045-812-8283

印刷所 (株)エイコープリント
電話 045-252-2711

CONTENTS

Introductory Note	Noriyuki Ishijima
Part 1 Lectures by Guest Speakers	
“ Editor-in-Chief of Children's News Analyzing World Affairs ”	Akira Ikegami1
“ Japan's ODA and JVC's Activities ”	Michiya Kumaoka12
Part 2 Summaries of Master Theses	
“ Violence against Women:A Study on Eradication of Violence from Characteristics of Assailants ”	Hitomi Iwasaki17
“ Irish Popular Education in Hedge School of 18-19 Centuries ”	Rieko Ishigaki23
“ Women NGOs' Activities for Advancement of Japanese Women's Status and UN around Japan's Admission into UN ”	Haruko Umemoto28
Part 3 Researches and Studies	
“ Real and False Images of Aborigines of Canada ”	Keiko Akiyoshi33
“ Anti-Imperialism in Yokohama and Asia ”	Akira Suzuki45
“ Tokutaro Suyama and Kawasaki: A Study on Process of Modernization of Kawasaki ”	Tsuneko Maari54
“ A Christian's Thought and Struggle in Meiji Era: Kajiko Yajima and Christianity ”	Kyoko Kumada67